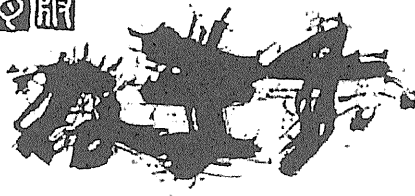


第2期・第4号

(通巻21号)



Kawaraban namazu



瓦版なまず

第2期第4号(通巻21号)

編集人: 季村 敏夫

発行人: 季村 範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone : 078-681-6231 Fax : 078-681-6232

つわものどもが夢のあと - 2

渡辺一考

思文閣出版から『蕉門珍書百種・和露文庫(全七巻)』が覆刻されているが未見である。従って、蔵しているのは『蕉門珍書百種』の第一期十冊と『和露文庫』の頭の五冊、それと単行出版された『文舛集』である。手持ちの『青蘊発句集』巻末に『蕉門珍書百種』の宣伝が付されているので紹介したい。

野田別天樓開題

安井小酒校訂蕉門珍書百種 第一期 十冊完成
芭蕉門下二銭餘人と稱す。元禄を最盛期とし降りて寛永、正徳、享保に涉り各種の撰集に散見するもの数百家。其作品閑寂趣味の極致に達し俳諧史上最高位を占め眞に一大偉観となす。

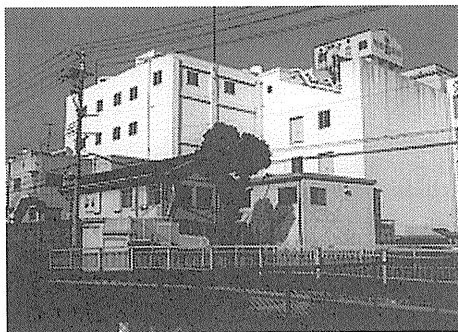
古俳書目に月に其影を没し深く芭蕉を研鑽せんとするものゝ如きは淡として望洋の嘆を發せざるはなし。偶同志川西和露氏多年蒐集せる古俳書中より當時の撰集、日記、隨筆、紀行等未だ世に流布せざる珍書佳冊の翻刻を慫慂するに會す。乃茲に和露氏藏本を基とし旁ら諸家の秘襲を乞うて適宜叢書中に加ふる事あるべく誓うて校訂の嚴密、解題の精緻を期し、是れに古樸淡雅の装幀を施し犠牲的低價を以て諸賢の渴望を促さんとす。

第一編の『当座佛』には「此書は知名の古俳書蒐集家も手にせざりし無二の珍書にして和露文庫中の絶品に属せるもの、元禄十六年惺然門なる播州の井上千山の撰にかゝり惺然並に同門下の句を以て充たされ其飄逸奔放なる風趣巻中に横溢し惺然研究に缺くべからざるもの、是を珍書百種の巻首に選める所以なり」と著されている。

川西和露(一八七五年四月二十日~一九四五年四月一日)は神戸の地元財閥川西家のひとで、先代の川西清兵衛は1896年に日本毛織を設立、二式飛行艇や紫電改を生んだ川西航空機の創業者でも

あった。川西家は和露をはじめ、川西英、川西祐三郎氏などを輩出している。

略年譜に「古俳書を天理図書館へ収め」と記されているが、和露の蔵書は天理図書館の綿屋文庫に収録されている。国会図書館も一部の蔵書は別置され、請求記号も他の図書とは別になっているが、天理図書館にも同様の扱いを受ける綿屋文庫、古義堂文庫、吉田文庫がある。綿屋文庫は中山家(天理教教祖中山みきの家)の屋号「綿屋」にちなむもので、名古屋の石田元季(石田春風)旧蔵の近世文学書約一万冊、神戸の川西和露旧蔵の俳諧書約三千冊、京都の藤井乙男(藤井紫影)旧蔵の近世文学書約五千冊などを含む文学関係資料が中心で、柿衛文庫、東京大学図書館「酒竹・竹冷文庫」とともに三大俳諧コレクションと評されている。



株式会社増田製粉所本社工場
(アーカイブ事務所より東徒歩2分)

菟書家で思い出したが、一九〇六年に増田製粉所を興した増田増蔵の末裔に増田五良（一八九五年五月十四日～一九七八年四月十八日）がいる。谷沢永一をして「神戸に、増田五良という明治文学の愛書家がいって、馬薊亭と号している、ということを知らないようでは、明治文学を専攻する資格がない」と謳われた第一級の読書人である。ぐろりあそえてと共に神戸で生れた五典書院から数冊の著書が上梓されている。和露と共に神戸屈指の蔵書家なのだが、触れる機会がない。蔵している書冊だけでも紹介しておきたいと思う。

文學界記伝 聖文閣 昭和十四年
馬薊亭雜記 五典書院 昭和十七年
文學界のころ 朝日新聞社 昭和二十五年
天正遣欧使節異聞 五典書院 昭和三十一年
隨筆乱読雜記帳 五典書院 昭和四十一年
金曜抄 三題 五典書院 昭和四十三年

明治本縁起 私家版 昭和四十七年
文學界記伝（聖文閣版の複製） 国書刊行会
昭和四十九年
明治本拾遺 私家版 昭和五十一年

私が育った兵庫区荒田町四丁目は戦前は湊東区と称した。その四丁目一七八番屋敷に美書出版で知られた五典書院があった。戦後は一貫して福田印刷工業を使ってい、製本に記載はないが同じ東灘区の須川製本所の仕事である。

増田五良氏は上戸で三宮のムーンライトや飛鳥を最厭になさっていたが、私家版をホステスに配り歩いていた。『明治本縁起』や『明治本拾遺』に掲げられた「三枚つづき」や「婦系図」等々、鏡花本の美しさに覚醒したひとが幾人いただろうか。双方のマダムやホステスから増田氏のはなしは何度か聞かされたが、畏怖の念など微塵もなかった。

海の民の記憶 連載 3

柳原一徳

山口県周防大島の属島、沖家室島（おきかむろじま）に父方の実家がある。周囲わずか 1 里のこの島はかつて海上交通の要衝として栄え、明治以降はハワイ、北米、南米、朝鮮、台湾、旧満州等へ多くの移民を排出した。いまは人口 187 人、129 戸（2006 年 3 月末現在）、過疎化の進んだ年寄りとネコとタヌキの島だ。

周防大島自体が元々盆正月の帰省者の多い地域だが、なかでも沖家室出身者は島の外にあって島との強い絆を維持している人が多い。伊予の三津浜から大島の港々をめぐる柳井まで汽船が来ていた時代、盆正月には三津浜から沖家室島直行の臨時便が出たという。浄土宗の信仰を基底とすることからお寺を中心としたコミュニティがしっかりしてお盆の帰省が特に多い。それもあって、ふだんは静かなこの島だが、お盆がくれば空き家に一斉に灯がともる。昔から多くの島外人口を抱えてきた「移民の島」のエトスなのだろう。橋が架かっていたまに至るも「盆に沈む島」と形容される所以である。

中世にも人が住んだといわれるこの島は、豊臣秀吉の海賊禁圧令で一旦無人島となった。石崎系図略記は、慶長 11 年（1606）正月 20 日伊予河野氏の家臣だった石崎勘左衛門を筆頭に、石崎、柳原、金井、林、安本の 5 氏が伊予の興居島（ごごしま）から周防大島を経て渡島したと伝える。昨年（2006 年）は「開島 400 年」の節目にあたり、島の出身者でつくる「かむろ会」（宇部、広島、大阪、東京）と島の自治会で実行委員会を作り、種々の記念事業に取り組んだ。その一環として、「きずな」と名付けた「開島 400 年記念誌」を発刊することになり、編集を私が請け負った。そのため、去年は春から夏にかけて再々島に帰る機会を得た。

梅雨の晴れ間の 7 月半ば、海から見た島の写真をおさえるため、島で 2 番目の若手漁師（とはいえ 50 歳を超えている）横山和明さんに船を出してもらった。漁船に乗せてもらうのは、漁師だった母方の祖父が亡くなって以来 20 数年ぶりだ。

「やりー今年は水温が低いで、タチウオもアジも喰わん（釣れん）」と横山さんがボヤく。本浦の漁港から沖に出て、まず島の全景をおさえる。島を背にすると右手に大水無瀬島、小水無瀬島、前方に片島、

愛媛県二神島、由利島、その先に四国の山並みが見える。針路を西にとり洲崎沖から沖家室大橋をくぐって人家のまったくない島の南海岸に廻る。平郡島が指呼の間に見える。

——こりゃあ平郡かね。こっから見ると意外と近いもんですのんた（のう、あんた）。

——はあ。いっとくさんよーい。近こう見えるが、こっから30分はかかるぞ。

周防大島の過ぎ去りし口を描いた宮本常一の文章にこんなところがある。

——男達が突然姿を消した。宮島にでも詣ったのだらうと云って心配していなかったのだが2日も3日も帰ってこないのでもたそろそろ心配しはじめたところに連中ひょっこり帰ってきた。聞くと、海は風いでいるしいい月夜だからそこに居合せた者で漁船を漕ぎ出した。宮島さんにお詣りしたら、この際広島へ行こうと。広島へ行ったら行ったで出雲大社にも詣ってこうという話になったのだと。（『民俗学の旅』より、要約）

母方の祖父も、ふらつといなくなることが時々あったと聞く。やはり漁船で宮島へ詣っていたのだと、そして、終ぞ連れて行ってもらったことはなかったと祖母は生前話していた。海の民のもつ、独特の距離感とか世界観といったものか——。かむろの海で波の間に間に揺られながらそんなことをふと想った。

さて、島のお盆。「開島400年」もあって、去年は一段と賑やかだった。灯籠流しのあと、夜の9時頃から「口説き」といって、男女の営みというかエロ話の口上にのせて老若男女が輪になって踊る。昔は一晚中踊り続けたと聞く。「開島400年記念法要」のため、移民先のハワイ、アラスカから島に帰ってきた人たち15人も一緒に輪になる。このジイさんバアさんたちにとって、これが島との今生の別れになるやもしれぬ。ハワイから一緒に来て来た大学生のお孫さんなど、沖家室方言はおろか日本語すら話せない。それでも彼もまた島の人だ。

盆踊りといえば、写専の学生時代に観た林忠彦の写真で印象に残ったカットがある。昭和20年代の撮影だったと思う。輪になって踊る人々の周りには誰もいない。観る阿呆がいないのだ。元来盆踊りはそういうものだった。母方の実家のある周防大島の安下庄（あげのしょう）など、ここ10数年で毎年8月16日の盆踊り・花火大会だけは立派なイベントになり島外から多くの人が訪れ道路が大渋滞するほどの盛況だが、部落ごとの盆踊りはごく一部を除いて廃れてしまった。それとは対極にある世界が、この島にはまだ残っている。

16日早朝、精霊を海へ帰す「流れ灌頂」が行われ、島のお盆は終わりを告げる。潮がひくかのように帰省の人らが都会へと戻っていき、島はいつもの静けさを取り戻す。不思議なことに、島ではその日を境に海も空も秋の色合いに変わる。

こんな風景が、この島では毎年繰り返される。

端がゆらぐ

季村敏夫

一方の端にふれたら、他の端がゆらいだ。

これは、チェーホフの短編「学生」（訳・松下裕）のなかに出て来る。新約聖書の後半、裏切りのペテロに関するものだ。

端というのは、面白い場所である。木の先端なら、そこで開花が始まり、鵜の早贄の場所でもある。橋の先端は他界であり、橋の下の淀みに身元不明の死体が浮かんでいる。道の先端はどこまでも未知であるが、足自身に歩みを止めることは出来ない。一步後退、二歩前進などという発想もあるが、歴史の歩行をおもうと、稗史、私は蹟に心が向かう。端がゆらぐとは、いかなる事態なのか。そういえば、まさに一変した白骨、焼き

あがった骨をつつく生者の箸は、物となった死者の、いったい何に触れているのだろうか。

春まだ浅い夕暮れ。鵜のさえずりのなか、神学生が歩いている。次第に濃くなる夕闇の散歩という、この時間の設定がいい。寒さがぶりかえし、その日は真冬ようだったという。外套を通し、肌食い込む冷氣。かじかむ指先、足の先、先端はことごとく硬直する。炎がなつかしい。闇のなかの焚火。いっしんに手をかざす人影に青年は近づく。千九百年前のあのひと道に蹟き、おもわずたたずんだに違いない。風が顔を撃つ。【リューリクの時代にも、ヨアン雷帝の時代にも、ピュートルの時代にも、これとそっくりの風が吹いてい

た】、捕縛される寸前のイエスにも吹き、【憂愁や、こういう周囲の荒地や、暗やみや、苦しい感じ—こうした恐ろしさはみな、昔もあつたし、今もあるし、これからもあるだろう。そしてなお千年たっても】、そうおもったとき、青年は家へ戻る気が失せていた。

一日の農作業を終えた農婦が、ものおもいに沈みながら炎を見つめている。「なんと冬に逆もどりですね」と、青年は近づく。そのとき胸によぎるもの、イエスを裏切る、あのペテロのかなしげな姿だった。「ちょうどこんなふうな寒い晩に、使徒ペテロも火にあたってたんだらうね」、炎の暗い中心をいっしんに見つめながら、青年はつぶやく。

grief ということ、チェーホフは描いている。焚火のなかから出る青年の言葉。彼はペテロの裏切りの情景を語りだす。するとじっと聞き入っていた老婦が、いきなり泣き出したというのだ。しかも穏やかな微笑を残して、ここがチェーホフの本領である。ペテロのかなしみが、おばあちゃんの問近に迫ったことを青年は信じる事が出来た。そのときである。ゆらぐ物音が聞こえてきたのは、一方の端、チェーホフはそう記した。

鶏が鳴く前に、ペテロは三たび裏切る。三度とは数限りなくということだと喝破したのは武田泰

淳だった。裏切りはむしろ常態であることを知る人の、おそろしい発想である。チェーホフはそのことも踏まえ、もう一步踏みこむ。小さな声で。老いたものの無言の背姿が、途上にたたずむ若ものに深い感動を与えることはよくある。『童年往事』の侯孝賢や『眠る男』の小栗康平など、そのことを映像で丹念に描いている。チェーホフは、老いたものが若ものから学ぶという事態を描く。一方の端に触れたら、他の端がゆらぐ、よもや、たまゆらのことではあるまい。もう一方は他者性のことであるとおもうが、現在、他の端は限りなく遠い。もう一方がゆれるということはない。

嗚咽と夕闇、感動におののく青年の心境をチェーホフはこういう。【すると喜びが急に胸にこみあげてきたので、彼は息つくためにしばらく立ちどまったくらいだった。「過去は」と彼は考えた、「つぎからつぎへと流れだす事件のまぎれもない連鎖によって現在と結ばれている」と】。端がゆらぐとは、『眠る男』のなかで深く意識されていたイエーツの、自然の一部であるこころの営みは、互いに流入しあい、絶えず変化する出遭いを繰り返しながら小さな力を喚起する記憶力だという、おおいなる示現のことをいっているようにおもえてならない。

「発酵」と「発酵したもの」—「種」から何かが—

水本有香

前略、木内寛子様

突然のお便りにて失礼いたします。わたくしは2006年5月からアーカイブの活動に参加している者です。昨年、わたくしはあなたが書かれた「恵まれたものは恵まれて」（笠原芳光、季村敏夫編『生者と死者のほitori』人文書院、1997年刊、以下「同書」）を拝読いたしました。

その中で、あなたが引用されていた「みんなが同じ物語を語るなんて危険きわまりない。みんな同じことを体験するなんてありえないんだ。」（バリー・ロベス『冬かぞえ一九七三年』菅原克也訳より）

ということばに出会いました。

当たり前すぎて、潔すぎて、目が眩みました。それでいて阪神・淡路大震災から12年たった今でも、このようなことばを口に出すことは憚れるよ

うにわたくしは思います。あなたがこの文章を引用された時期から数年経っていても。そして、ますますこれから。

自分の体験を自らの目線で伝えられる人、それを受け止められる人がたくさんいればよかったけれど、そんな人がたくさんいるとは思えません。何故なら、わたくしを例にすれば、見えない、いや見えたとしても、「震災の被災者」像に比べて劣っているとか、「自分はそれ程の被害を受けへんかったし」と今でも、自分の被災の経験を卑下しているからです。そして、自分の体験を敢えて教訓として美化し、「伝えなければ」と伝える程の何か突き動かされるような衝動もないからです。

ただ、淡々とあなたは同書で、

「地震のことを話すときのとまどい、それは何なのだろうか。

恵まれたものは恵まれて、恵まれないものは恵まれない。」

と記しておられます。自分自身が体験したことなどを卑下せず、美化もせず、そして、渦巻く衝動に駆られず伝えること、それを受け止めることの難しさに対する唯一無二の対処法をあなたの文章から受けた気がし、自分が感じた余りの清々しさに、それを隠すことが出来ず、お手紙いたしました。

しかしながら、木内様、最近伝えることにはますます色々な不安が付き纏う時代になって参りました。何故なら、「フィクションがリアルにとってかわりつつある」（朝日新聞「天声人語」2006年12月20日より抜粋）からです。技術を利用した震災のイメージ映像、温かい交流の話等が、色々な人が伝えることを放棄、躊躇、諦めている。忘れようとしている間、体験するしないに関わらずあらゆる人の脳裏を占拠し、あたかもそれが本当にそうであったかのように、最初はよちよち歩きだった幼子が12歳の子どもが一人で気ままに歩き回る姿のように、「よくぞここまで成長したね」とは素直に喜べないような何か恐ろしいものが世の中に孕んできているように感じます。

さらに、あなたは同書で、

「見たものは見たもの。

種は見えないところで、すでに発酵をはじめているのかもしれない。」

とも書かれています。

種が「発芽」するのではなく、「発酵」ということばを使われたのには、今のこのような状況を既にそのときからあなたが予測されていたような気さえしてきます。それはわたくしの曲解でしょうか。あなたがお亡くなりになられている今、わたくしに確かめる術はありません。

もし、種が「発芽」するのであれば、「結実」として実がなっていたかもしれません。

実とは何ぞや。

それは、「発酵したもの」とは非なるもの。

それは、他の種に関わることなく、関わるこのできないもの。

それは、また同じような姿かたちをした「種」しか生み出さないかもしれない。

それは、実にならず腐ってしまうかもしれない。実は多少大きくとも、小さくとも実でしかない。

もし、「種」が伝えること、伝わったこと、残ったこと、受け止めたこと、そして「こと」だけじゃなく、ものや、人だとしたら……。きつとわたくし自身も何らか発酵し、周りの生きているもの、生きていないものさえも発酵していますね。善しも悪しきも発酵は自らの意思に関わらないところでも起こり、止めることはできません。冒頭のあなたの引用文を読めば読むほど、わたくしや木内様の生まれるずっと以前から人間は、多種多様な「種」を蒔き続け、その「種」は「発酵」を繰り返していると思わずにはいられません。

また、「種」だけを一つの「種」として、「発酵したもの」を一つの「発酵したもの」とひとまとめにすることは出来ません。「種」はただ「種」だけではおられず、「発酵したもの」もただ「発酵したもの」ではおられません。「種」はまた別の「種」と、「発酵したもの」はまた別の「発酵したもの」と何処かで、誰かと、何かと繋がってきて、そして繋がっていきます。

もしかしたら、このようなお手紙を差し上げることさえも重種の「発酵したもの」かもしれません。

木内様、是非、お会いしてみたいです。わたくしは常に世の中の遅くことから遅れている人間なので、この歯痒さは何度となく経験しておりますが、やはり残念です。あなたが生きておられたら今の状況はどう言われるでしょうか。

古書とアーカイブをめぐる

—林哲夫著『神戸の古本力』のこと

市村登和

新刊本を売る書店・海文堂書店で開催されたトークショー（昨年の7月17日）は、新刊⁽¹⁾の出版を記念したもので、古本と古本を売る神戸の古本屋とをめぐるのがであった。著者の林哲夫さん、関西の古書店に精通する高橋輝次さんと北村知之さんによるトークが繰り広げられたもので

ある。その場集って愉快地聴き入った者は、帰路あるいは後日、名前のあがった古書店を訪ね、一冊二冊と古本を買い求めたに違いない。新刊書店で紹介（の意図は無かったと思うが）された古書店。一方向で終わりそうだが、ここで終わらず、このトークショーを文字化し、さらに古本エッセ

イ三本に古本アンケートの回答と古書店リストとの四部構成に仕立て『神戸の古本力』として新刊書店に並べた発行所みずのわ出版と三人の編著者は義理堅い。参加者たちは再び新刊書店に向かい、新刊本を購入する。そして、読んでまた、古本屋に足を運ぶことだろう。新刊書店と古書店との往還、そのことを予測した上での企画、果たして、どうだったのだろうか。

自己充足して（あるいは自己充足させる）専門の中で通用すればよいというのが、従来の自己完結型の書店とすれば、このトークショーは、新刊書店の外側に置かれている古本や古書店に開かれ、意図的な接触を試みたショー＜劇場＞⁽²⁾であった点で新しいのではないだろうか。外に開くことへの気づきは、最近の「カフェ」ブーム⁽³⁾など⁽⁴⁾でも感じることができ。ブームに関わらず、外に開くための主体は何か、開けば何が見えるのか、については更なる一步の重要性を感じている⁽⁵⁾ところである。「古書」を「資料」と読みかえ、「古書店」を「アーカイブ」（保管庫または文書館）と読みかえとどうだろうか。新刊本と古書、新刊書店と古書店との関係、興味はつきない。

私は出版記念トークショーに参加できなかったが、本書を読むうちに六甲の口笛文庫を訪ねてみたくなった。しかし、元来の私は新刊書が手に入らねば図書館へ向かう性質で、古書店はほとんど訪れたことがなく、むしろ古書店は敷居が高い場所であり、したがって、口笛文庫へも道路を挟んだ対向の歩道を二、三回往復し、来店者の存在を確認してから道路を渡り、ようやく路面の引き戸を開けたのであった。店内を一巡二巡としているあいだ、店前の陳列台から比較的最近の家庭本を手にする人、店内平積みの方季の入った雑誌を丹念に見る人、奥の階段に積まれたビジュアル雑誌から選んで買う人と、書かれている通りの賑わいであったことは、本書が口笛文庫を私に教えてくれたことを一瞬忘れ、まるでこれまでに知っていたかのような錯覚を覚えた。

私も一冊求め、帰路は、その本が私の手元に来るまでの時間を思った。著者の思いを発信するとき、作品が誕生する。購読者が現れることで、作品は受信される。ここでは、著者と購読者との往還に止まるが、古本となって最初の購読者を離れるとどうなるのだろうか。著者と最初の購読者のメッセージは、先ず古書店（古書店主というべきかもしれない）が受信することになるのではないか。さらに古書店の店頭で古本として並び、再びその書物の発信が古書店によって始まり、古書店での買い手が受信する。新刊本の購入では起こり

えない「上書き」の行為の連続が、一冊の本に発生する。「ここに、この本は、どのようにして、たどり着いたのか、そしてどこへ」、この問いは、新刊書店でも起こりうるのだろうか。

どのような時間をくぐるのか。この問いは、資料を整理するときにもよく頭を過ぎる。資料が、人から人、場所から場所へと移動することをおもえば、手元を離れていく古本と資料とはかけ離れたものではなく、私から遠いと思っていた古本は実は近い存在だったのではないか。口笛文庫を訪ねたことで、『神戸の古本力』がぐっと私に近い一冊になった。

『神戸の古本力』の装丁は黄色地に黒。意識してのことと推察。「コーベ」の黒文字はコーベックスのロゴを思い出させる。

- (1) 林哲夫著『文字力 100』みずのわ出版、2006年。
「瓦版なまず」通巻19号に、本の紹介掲載。
- (2) ジュンク堂書店の福岡聡は、書店は劇場であり主役は来店者と言う。福岡聡『劇場としての書店』（新評論、2002年）。
- (3) サイエンスカフェ、哲学カフェ、ニットカフェ他多数あり。現在「震災・まちのアーカイブ」も企画中。
- (4) 西宮北口では市立図書館と新刊書店が同じテナントビルで共存している。両者が意識的に互いに外に開いているとは言いがたいかもしれないが、結果として開かれた状況にあると思われる。
- (5) 「瓦版なまず」通巻19号（あとがき）参照。



林哲夫・高橋輝次・北村知之の編著『神戸の古本力』みずのわ出版、2006年刊、1,500円＋税

「まちのアーカイブ」ということ

佐々木和子

1998年3月、神戸市長田区に「震災・まちのアーカイブ」が誕生した。前身は、震災・活動記録室である。震災直後のボランティア達の記録を残そうと、1995年3月、ボランティア自身がたちあがったものであった。私たちは、引き継いだグループに「震災・まちのアーカイブ」と名前をつけた。

「Archives」、「アーカイブ」、「アーカイブス」、「アーカイブズ」。人間の作成した記録・文書（ドキュメント）を保存して将来の活動のために公開するシステム、また記録・文書（ドキュメント）そのもののことをいう（『アーカイブ事典』）。

当初のもくろみは、被災地の街のあちこちに「アーカイブ」を作ろうであった。記録・文書（ドキュメント）の作成者、所蔵者自身が「まちのアーカイブ」になろう。私たち自身も記録・文書（ドキュメント）の保存とともに、そのお手伝いをしよう。つまり、ドキュメントの保存を通じて、被災地という現場の真ん中に、被災者自らが震災そのものを考える場を構築しようとしたのである。

すぐに記録や資料だけで、震災という出来事は、残っていくのかという疑問がだされた。記録に残らないものはどうするのか。記憶にしか残っていないものは消えていくのか。ぼそっと語られた「つぶやき」、本音は、どこへいってしまうのか。被災地の中からは、色んな声が聞こえていた。

被災地ではいつのまにか、「震災の正史」ともいふべきものがつくられていった。悲惨な被災地。

未曾有の災害にうちひしがれた被災者。全国からボランティアがやってきて、やさしく差し伸べられる手。「復旧」から力強く「復興」へすすむ街。そして、未来へは防災の街づくり。阪神・淡路大震災というイメージ化されたパッケージがつくられ、それを消費する仕組みさえできてきた。

私たちは、震災をひとつの物語に回収していくとする風潮を恐れるようになる。そこに回収されない物語は、なかったことになるのではないか。結局何があったかを覆い隠すことにつながるのではないかと考えた。元来ドキュメントの保存、すなわちアーカイブという存在は、物語の多様性を開くものであった。

同時に「告発」の立場からの言説にも違和感をいだいた。行政の不手際は確かにあった。解決すべき不備もたくさんあった。しかし、権利ばかりの主張には同意できなかった。

私たちは、震災で亡くなった死者を悼み、死者が語りたかったことは何だったのか、そこで何があったのか、ゆっくり考えたかった。残された私たちがするべきことは何か、話し合いたかった。そして、そこからつぎの一步を踏み出したかったのだ。震災の記録や記憶は、こういった中から引き継がれていくのではないか。

12年たった今、このようなことを目指した場合は、震災・まちのアーカイブしかなかったように思う。「まちのアーカイブ」は、呻吟しながら、現場で震災を考え続けた。

【イベント告知】

アーカイブカフェ

ボランティアという生き方

—語りと音楽がつなぐ—

会場に流れるムビラ*の音色、キッチンから漂うコーヒーの香り。

今回はボランティアという生き方をともに見つめます。

語りと音楽が交錯するとき何が生まれるのか、その瞬間に立ち会ってほしい。

街へ出て、アーカイブカフェを開きます。

*ムビラはアフリカ・ジンバブエのショナの人々の楽器。

—「ひょうご安全の日推進事業」の助成を受けて実施します—

*アーカイブカフェ「ボランティアという生き方 ―語りと音楽がつなぐ―」
 2007年2月4日(日) 13時~16時
 会場 : みみずく舎(神戸市中央区元町通6-7-9/阪神「西元町」駅下車すぐ)
 参加費 : 500円(1ドリンク付)
 スピーカー: 水本有香・菅 祥明
 ゲストアーティスト: 三木まさよ(ムビラ演奏)
 お申し込みは下記まで。
 Eメール: archive_kobe@ybb.ne.jp 電話 : 090-2063-0234 (担当 菅)

活動日誌

2006年

9月28日(木)「瓦版なまず」の編集会議。於:伊川谷
 10月7日(土)「瓦版なまず」の印刷、発送作業。於:事務所
 10月21日(土)於:三ノ宮・11月3日(金)於:事務所・11月17日(金)於:三ノ宮
 11月24日(金)於:三ノ宮

何度も話し合いを続けた結果、県の助成金を申請するという決断を選択し、来年の2月4日、「ボランティアという生き方」をテーマでアーカイブカフェを開くことになる。

12月31日(日)アーカイブカフェのチラシを印刷・発送。於:三ノ宮

2007年

1月7日(日)「アーカイブカフェ開催のための打ち合わせ」於:舞子
 1月12日(金)FMわいわいの番組内で「アーカイブカフェ」の告知を行なう。於:新長田
 1月14日(日)ビデオテープのDVD化の準備作業。於:事務所

資料寄贈:ジェネシス岡田光生氏よりダンボール2箱。1998年JNAP「あげます・ください列島リレー」活動資料。(季村範江)

寄稿者紹介

柳原一徳(やなぎはら・いっとく)1969年生まれ。「みずのわ出版」代表。『阪神大震災・被災地の風景―終わりになき取材ノートから』ほか。

渡辺一考(わたなべ・いっこう)1947年生まれ。モルトバー「ですべら」店主。編著『鏡花集成』ほか。

あとがき

出遭いがもたらすエネルギーが、ときに歴史を出現させる。この小さなプラットホーム、「震災・まちのアーカイブ」もそうだった。ある日、災害一次資料がもたらされ、その偶然性に導かれ、関係が生まれた。ひとは去り、現われ、消えていく。廃駅になるまで、繰り返されるだろう。

「難ボランティア資料」の整理解読を巡る新展開を報告する、第二期創刊号のあとがきでこう書いた。昨年四月のことである。だが挫折。立ち上がれないまま、年を越した。その間も、防災は特化されつづけた。

過口、「防災ファシズム」なることばを目にした。地震のときは朝日新聞の記者、現在は関西学院大学の教授である山中茂樹氏の文章(月刊「きんもくせい」44号、2006、12、20発行)のなかである。ナチスもそうだったが、ファシズムを熟望するのは民衆であり、民衆の無意識の欲望である。防災ファシズムなる事態、主婦や勤めびとの集まりである私たちは、最初から主張してきた。何を今更、という以上に事態は深刻なのだろう。

阪神大震災が、国家による危機管理体制の推進の契機となったとは、無念である。防災の特化は国防につながる。震災、サリン、拉致問題、三点セットがついに防衛省を発足させた。私たちの声は的中した。

ボランティアなる外来の考えに易々と飛びつく傾向に、私はこれまで、どうしてもなじめなかった。いところの尊行は信じられなかった。通りすがりの、心づくしでいいではないか。ときに見捨てることもあるという悪の自覚を見据えるべきだとおもってきた。「ボランティアという生き方」、若いひとからあがった言葉である。だが私にはまばゆい。共に在ること、他のひとびとと世界を分かちもつこと、アーレント風にこう読みかえ、来月私はテーブルに臨もうとおもっている。

厳しい道程の第二期、いまだ喘いでいる。百年、二百年後に現れるひとは、塵の塵である私たちの姿を見出してくれるだろうか。『ワーニャ伯父さん』のチェーホフをおもいながら書きこんでいる。

(季村敏夫)

2007 - 06 - 17

22



Kawaraban



瓦版なまず

第2期第5号（通巻22号）

編集人：季村 敏夫

発行人：季村 範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone : 078-681-6231 Fax : 078-681-6232



- | | |
|------------|--------------------------|
| 2 上念省三 | うしろめたさをめぐる言葉の憂鬱 |
| 4 季村敏夫 | 思惟の迂遠 |
| 4 菅 祥明 | まちのそとへ |
| 5 加納成治 | 静かな眼 |
| 6 安水稔和氏に聞く | 雑誌の記憶 |
| 10 大西隆志 | エディション・カイエと阪本周三 |
| 11 柳原一徳 | 植民地の記憶 |
| 13 野口豊子 | 登尾明彦詩集『パンの木』（みずのわ出版）を読んで |

表紙・絵 林哲夫

うしろめたさをめぐる言葉の憂鬱

上念省三

もうそれすら何年も前のことになるが、震災から（という時に、世間ではそれを「阪神・淡路大震災」のことだと注をつけなくてはいけなくなったことに驚き戸惑っているのだが）10年を迎える頃に、ネット上に「10年後の既視感〜阪神大震災の記憶のためにⅡ」と題した文章を書き続けていた。ちょうどそのころ、JR福知山線尼崎駅の事故に関する論評から「サバイバーズ・ギルト」という言葉に出会い、たいそう憂鬱な気持ちになった。

「生き残った者の罪障感」と訳されることが多いようだが、はっきり「罪悪感」と呼んだ方がよいのかも知れない。そもそも第二次世界大戦下の強制収容所から「生き残った者」の心的危機を表わした言葉だということだった。強制収容所と震災を同質視することはできないと思いつつ、同じような罪悪感に、自分も含めた多くの人が苛まれていたことに思い至り、なおのこと憂鬱になった。

アーカイブが12年目を期して開いた「ボランティアという生き方」という催しは、そのタイトルの印象とは違って、三木まさよさん演奏のムビラという楽器を軸に、お互いの思いをシェアしあう、緩く暖かい集まりになって、よかった。しかしながら、多くの人の口から発されたのは、震災当時何もできなかったからとか、私にできることは何もなくといったような、自分を責めたり貶めたりする言葉だった。中でも、震災の個人的な体験について言葉にするのはほとんど初めてだという水本有香さんの、ためらいがちで口ごもるような姿に、奇妙な痛々しさを感じたりした。当時ぼくと同じ魚崎にいたという彼女は、被災地の中心にいなが何もできなかったと言っておられたようだったが、中心にいたんだから、何もできるわけなかったじゃないかと思いつつ、ぼく自身も同じような「ギルト」を感じていたことを、思い出した。のだ。それら一連のことについてぼくが「うしろめたさ」と発言して、ある種のやりきれなさを洩らしたのだったか、季村さんからそれについて書けと連絡をいただいた。

われながら、罪障感とか罪悪感とかではなく、うしろめたさと呼んだのは、何だか適切なことだったように思う。常日頃、目の前にそびえ立っているたぐいの問題ではなく、いつもそこにあるのにふと後ろから声をかけられて驚くような気がかり。とりあえず生きてしまっている以上、日常

というものはあるのだから、四六時中そのことに囚われているわけにはいかないが、ふとした時に、自分はここにいるのに、どうしてあの人はいないのだろうかと思ってしまうと、たまらない。まずもって、幸いにも死なずにすんだのに、何もうしろめたく思わなくてもいいじゃないか、というのが当たり前の取りなしだろう。じゃあ、どう思っていればいいのか。ギルトの対義語とはいえば、イノセントということになろう。罪のない、無邪気な。さて、死ななくて、よかったね、と無邪気に喜ぶということが、震災の後のぼくたちに、継続的な態度として可能なかどうか。「よかったね」という言葉が出ないとしたら、よかったという、その言葉に収まりきらないから、言葉が出せないでいるのだろう。言葉に出してしまうと、自分が、自分の思いがその言葉に絡げられてしまうから、言葉を出したくない、とか、言葉を出すことで、あのことが自分の外側に出てしまう、とか。それが十年以上も続いていて、これまで言葉にできなかった、そういう人が、水本さんもそのようにか、おられたわけだ。

いっそ、出してしまいたかったのだろうか、ぼくは。震災について何ごとか言葉を出すことについてのためらい。うしろめたさ。お前など直後からずっつと書いてるじゃないかと、まあその通りなのだが、もう死んだ人は何も言葉を出せないのに、ぼくは生きていて言葉を出し、あろうことか、ちやほやされたりもしている。何をやっているのだろうか。

それでも、書かないと、自分が崩れてしまうような、そんな思いはあった。崩れてもいいじゃないかとも思うが、それでもぎりぎりのところで書く背を押すのは、結局は何かのためにするのではなくて、やむにやまれぬ自分からの情動なのだろう。「いまま地震と関わっているのは、被災者として十把一絡げにされそうになった、されてしまった、あのこの報道などによって醸された勢いに対する、うらみ、であるかと思っている」(「風化ということなど」から。初出「瓦版なまず」2号。1998年9月)と、木内寛子さんが「うらみ」という言葉を発見したのは、「兵庫県南部地震に出会って、書いておこうと思った。このようなことはめったにない」(同)、そのめったにない自分への驚きや訝しさについて、ぎりぎりまで考え抜いた末のことだったに違いない。

神なき時代だからだろうか。生きていることを神仏に感謝する、という態度は、あまりぼくたちになじみがない。誰かが死に、誰かは死ななかったことを、神の手に帰するのでなければ、どうするのか。おそらく、そのあたりからギルトが生じているのだろう。死んだ誰かに罪があって罰されたわけでないことはわかっている。自分が「善き人」だから死ななかったという覚えはない。さしたる根拠なく自分が当たりくじを、誰かが決定的なはずれくじを引いてしまったことを、どのように自他に説明、納得すればいいのか。本当は、震災では生き残った人より死んだ人の方が少ないのに、自分が不当に生きているような気がする。理由なく当たりくじを引いてしまった以上、きっちりとお返しをしなければいけない、という思いが、「被災者」をその後「ボランティア」に駆り立てた源なのかも知れない。罪を犯したのでもないのに、贖罪のような感情である。

特に地震という自然現象であるからには、悪意や加害者というものが存在しない。もちろん行政の街づくりの責任とか、いろいろなことを言う場合もあるが、地震が起きたこと自体への何かではありえない。どこにも持って行き場のない、怒りの対象を見つけれない被害である。こんなふうには、被害しかないような状態の中に置かれてしまったとき、比較的被害がなかった者が、被害が大きかった者に対して、加害者であるかのような感覚に襲われ、そうであるかのように振舞うことが、何だか正しいことのように思われる。加害者づら、とは変な言葉だが、そう身を置くことが、より誠実であるように思われる。だからいっそう、自分の被害や苦しさは、言葉にできない。被災の中心地にいながら被害がなかったことの「うしろめたさ」とは、そのように生まれたのだったか。

十年以上経って、それらをめぐる言うに言われぬ言葉が内部にまだ存在し続け、出せないでいる、そういう人がおられたわけだ。しかしその内部に

存在する何ものかは「実にならず腐ってしまう」のではなく、「自らの意思に関わらないところでも」、おのずから繋がっていく(引用は水本有香「発酵」と「発酵したもの」から。『瓦版なまず』第2期4号。2007年1月)のではないかと、もういない木内さんの文章から水本さんは触発されて、するするどだったか、ようようにだったか、言葉になってきたのだったか。『ブルーベリーがく詩>に入らなかった』(2002年10月、ドット・ウィザード)という木内さんの本に挟まれた便箋の、木内さんの文字を見ながら、言葉が、いつまでも遅れて届くことができるということを改めて知らされ、思いが遠くへ飛ぶ。

人はいつも、まだ死んでいない。必ず誰かに後れている。木内さんの「うらみ」は、まだここらあたりに残っているのだろうか。木内さんは「書く。だが私たちは何を書いているのだろうか。結局、記憶を書いているのではないだろうか」とも書いている(「わたしたち、わたし自身へのメモ」から。初出「瓦版なまず」3号。1998年12月)。書くことは、言葉はいつも遅れている。遅れて届くということは、未来に向けて既に書かれていたということではないのですか?と木内さんに言えば、お笑いになるだろうか。その遅れが、数日であるか、数年であるか、十数年であっても数十年であっても、あるいは永遠でさえあっても、後ろを振り向くといつもそこにはあのことがあるような距離であるのかもしれない。早くから言葉を出してしまっているばくなどは、言葉を出さない人の内部で「発酵」しつつある、その言葉以前の何ものかが詰まっているであろう鳩尾のあたりを覗いてみたい。遅れがいかにかやわらかく思いを包み込む歲月の堆積であったか。

短い人生の中で、こんな大きな災害や戦争、収容所といった死と生の岐路に立たされるような経験は、滅多にあるまい。理由なく、生き残る、生き延びる、生きながらえる…ことになってしまった以上、どう考えてみても、その岐路において死ななかった者は、もう死んでしまった者への負い目を抱いて、うしろめたい思いで、その後の時を過ごすしかないのだろう。せめてもの、という願いや祈り、贖罪のような心映えから、ボランティアという方途を選ぶ人もいる。「ボランティアという生き方」に集まった多くの人が、ボランティアを誰か他の人のためであるより、自分自身のためになっていると、諦念からではなく、実感から来る謙虚な喜びから述べておられたのが、印象的であった。



当日のアーカイブカフェ

ムビラ演奏 三木まさよ

speaker 水本有香 菅 祥明

思惟の迂遠

季村敏夫

あの巨大な地震のあと、神戸にさまざまな言説が飛びかった。そのうち、もっとも多く、かつ支持されているかに見えるのが防災に関わるものである。圧倒的な防災主導のなかで、今回私たちのグループは、見るからにひ弱な、かつ解釈しづらいような細部からの問題提起を試みることになった。弱々しいからといって、また細部だからといって、決して過ぎ越せないこころの形と場所であること、そのことに力点を置いたアーカイブカフェだった。

DVD作品「ひとがためらうとき」というネーミングは、当日の話し手だった水本有香さんの心中から選んでみた。さらされることの恐怖に、ぎりぎりまで苛まされた彼女の場合、「ためらい」と「うしろめたさ」は、ときにかぶさり、ときに牽引しあい、いずれにせよ、二つのおもいが関係の磁場を形成しながら揺れつづける。この揺れが、彼女の地震だといえ、水本さんの現在とすれ違ってしまいうだろうか。

死んでしまったひとをおもうと申し訳ない気持ちになる。戦争で生き残ったひとから、自責のメッセージがしばしば伝えられた。水本さんの申し訳なさ、おかげさではなく存在論的である。いつも遅れを抱えている。ある種のズレをどうしようもなく抱えるため、思考はいつも違まわりをする。生き残ったひとの倫理ともいふべき「ためらい」であり、「うしろめたさ」である。むしろ防災学には考えもつかない迂遠な思惟である。

DVD『ひとがためらうとき』、ただいま製作中

まちのそとへ
ーアーカイブカフェを終えてー

菅 祥明

「まちのアーカイブ」と名乗る団体が、まちのそとへ。2月4日に開いた「アーカイブカフェ」は、長田区東尻池の事務所からそとへ出ることを目的に企画したものです。

第2期アーカイブの始動とほぼ同じ時期に私も再び、アーカイブの活動に関わるようになりました。活動の流れからいったん距離を置くと、出戻るとは本人よりも周囲のメンバーにいつそう余分なエネルギーが要ったと思います。ともかくも再始動したアーカイブ（と私）にとって、あえて負荷のかかることに取り組むことで突破口が見出せると考え、事務所のそとで行なう「アーカイブカフェ」を思いついたのでした。

ところで、この団体はなぜ「まちのアーカイブ」と称しているのでしょうか？ 震災・まちのアーカイブとは何者なのでしょう？ 一般的な意味のアーカイブは資料と場所は分かち難い関係にあります。（デジタルアーカイブが隆盛しているので、サーバーを置くだけの建物が「アーカイブ」を名乗って資料そのものは倉庫で厳重に保管、という時代はいずれやって来るでしょうが…）

「まちのアーカイブ」をみると、その存在は資料と場所だけでなく、人を抜きにして考えられませんか。人と資料と場所—その3つが分かち難い関係にあるのがこれまでの「まちのアーカイブ」であったはずですが。

しかし、長田区東尻池の事務所からそとへ出ても「まちのアーカイブ」は成り立つと思うのです。それは資料を見捨てるという意味ではありません。「まちの」という枕詞は「まちに在る」をも意味するのだし、東尻池の事務所を砦のように護ることも必要ないでしょう。いやむしろ、そとへ出ることで＜アーカイブと資料＞という関係を解きほぐすだろうし、活動を他者の眼にさらして「まちのアーカイブとは何か？」と問われることも再始動の時期にはとりわけ大切です。

そのように、そとへ出る取り組みのひとつとして今回、「アーカイブカフェ」を開いたわけです。その成果は16人の参加者とスタッフの中で発酵されるのを待ちます。来年は「まちのアーカイブ」も設立10周年。長期にわたる活動が自閉自足に陥らないためにはそとの空気にふれることが

一番です。協力して下さったメンバーの方、ムピラの音色を奏でた三木まさよさん、多くの出会い

に感謝しつつようやく第1回の「アーカイブカフェ」は閉じられそうです。

最新刊

脱走の話

—ベトナム戦争といま—

著者 吉岡忍・鶴見俊輔

発行所：編集グループ SURE

<http://www.groupsure.net/>

吉岡 阪神大震災のとき、危機管理神話というものが日本でいっぺんに広がった。強権を持った国家が危機を仕切るんだ、という思想が日本中に広がりましたね。この思想は、被災者を一方的に弱い存在、無力な存在として見る。実際は、そんなことはない。彼らこそ、一番強く、頼りになる人たちですよ。ボランティア活動の核になるような、互いに助け合う、ということを始めしたのは、被災者自身ですよ。ところが、危機管理思想は、人間は弱いものだ、国家や権力にすがらなければ生きていけない存在なんだと、一方的にそう教え込むんです。そういう思想が九〇年代後半に広がりました。

静かな眼

加納成治

木内寛子さんの名前をはじめて記憶したのは、1995年、「ARE」の第3号に載った短い文章のなかでだった。「ARE」は同人誌だが、そのころ林哲夫さんが力を傾けて編集していた。神戸の自宅を立ち退かねばならなくなった林さんが尼崎に来て、一緒に不動産屋を回ったりした日のことを、ふと思い出す。

「メモ」と記した文章のなかで、木内さんは荒ゴミのことを書いていた。地震の当日が荒ゴミの日で、置かれたままの荒ゴミがどんどん増えていく。「我家の玄関までもう少し。この人たち、そんなにお役所を信用しているのかしら、」という憤り。「恵まれたものは恵まれて、恵まれないものは恵まれない」と、そこで彼女は記していた。

びっくりした。彼女の眼が見据えているのはいわば「被災者」のエゴなのだが、地震に続く日々のありようを、日常として、そんなふうにした文章を見たことがない気がした。

翌年の夏、もう一度震災に触れて「恵まれたものは恵まれて」という文章を書いている。そこでも彼女は、テレビのコビー、その映像（公共広告機構のコマーシャルでなかったかと思う。もう思い出すことができないが）に対しての異和、憤りを「虫酸が走った。」と書いている。「水が悲し

かった」とも。おそらくそこに現われた欺瞞と作為を、彼女の眼はまっすぐに見て取っていて、認めることができなかったのだ。静かな、よく見える眼が、「震災」という非日常のあとに続く日々をみつめ、見つめる眼のむこうでこころが波うっている。

路上に出て、煙草をふかす。5月の、傾きはじめて日差しのなかを、乳母車を押したばあちゃんが見え去っていく。少し風が出て、東の方角のビルがいっぱい日に浴びている。ここからはてっぺんの給水塔だけがよく見えるのだが、その最後の日々、彼女はその下の田中病院の病棟にいた。

街の草は、街のなかのちいさな古本屋だ。時々病室を抜けだして、彼女はここに立ち寄ってくれた。雑駁な棚をていねいに見て回り、かすかな微笑を浮かべながら。

最後にお会いした日、いっそう雑然とした店内で、紐をかけたままの本の束のなかから、彼女は一冊の本を抜き取った。「キクチさんの本を、見つけました。」キクチさん、は、今思うと菊池敏子さん、だろう。それがほんとうにうれしそうだった。立っているのもつらい、と思えるほどだったのに。

安水稔和氏に聞く一雑誌の記憶

インタビュー：季村敏夫

—「sumus」12号（2004年5月、発行者山本善行）という雑誌に載っていた「蜘蛛出版社ノート」、京都の扉野良人さんの論稿でしたが感動しました。やっと現れたとおもったからです。泉下の君本昌久さんもきつと喜ばれている。出遣いとはこういうことだと受けとめました。ほんとうの評価というのは周辺からは生まれにくい。遠方から出るとおもっていましたので。そんなことをある日手紙に書いて安水さんにお送りしました。遠方を招きよせたいとぼくは考えております。雑誌の記憶、同人雑誌に関わるなつかしい声を招き寄せる試みです。今日は同人雑誌「ぼえとろ」のことからお聞きしたいとおもいます。

安水 「ぼえとろ」は六人（一社壮志、構恒一、川崎淑男、岡田智、森公児、安水稔和）で、1950年12月14日に創刊したガリ版刷りの白い四角い小冊子。創刊号のガリきりは構恒一（かまへ・つねいち）、途中の号から私がきった。

—漫才作家の織田正吉さんですね。

安水 そうです。当時の彼は詩を書き、コントのようなものを書いていた。のちに漫画も描いた、それから漫才の台本。「ぼえとろ」の発行所は私の家、長田区池田上町で、大学卒業のときに廃刊（「ぼえとろ」16号、1953年2月1日）になってます。大学生生活の四年間に出しました。関わったのは文学部の学生だけではなく。神戸大学のジュニア、専門課程に移る前の、法学部とか、経済、経営学部、学部に渡って詩が好きな連中でつくったのですが、その前に大学に入って直ぐ「エスカール」という雑誌があった。註

—その雑誌のことは、これまでの年譜には出てきません。

安水 書いてない。「エスカール」は学生雑誌。

—現物ですが、蔵書のなかには見当たりませんか。

安水 どちらにあるとはおもうんやけど。半分に割れた、片身だけのがどこかに。でも今はわからない。小説とか評論を、大学の先生がたも寄稿するというかたちで、高校でいえば芸芸部の

機関紙のような雑誌。集まって、わいわい話をしながら出していた、そこにたしか私も詩を書いたようにおもう。その「エスカール」から、詩が好きなものだけ集まって、小さなもんを出したのが「ぼえとろ」です。

—そうすると「ぼえとろ」の前身ですか。

安水 前身ではない。だからこれまで、話してこなかったとおもう。学友会雑誌のような学生雑誌で、そこで交流のあった連中のなかから六人が集まり、「ぼえとろ」が誕生した。

—どんな活動でしたか。

安水 「にくやのにかい」という詩のなかでも書いたとおもいますが、元町の「中浜」という肉屋の二階に集まってよく例会をしました。雑誌が出ては集まり、出なくても集まり、いろんな話をした。中とかぶれ、なにゆうても中の一節みたくないことを口走る川崎淑男。道造狂い、立原道造のことならどこへでもかき分けていく森公児。いきなり杉浦民平さんの所に押し寄せ、道造の手紙を見せてもらったり。当時の私たちは、竹中郁のことを「詩人さん」と呼んでいました。今日、町で詩人さんに会ったよなんて。

この「ぼえとろ」に関わりながら、同時に喜志邦三先生の「交替詩派」にも入っています（1951年）。「交替詩派」という雑誌はその後名前を変え、「再現」となり、やがて「渥木」になり、「渥木」のときには私は退会するのですが（1957年）、小島輝正さんや小川正巳さんとの「くろおべす」の創刊が1953年、「ぼえとろ」廃刊の年です。創刊するときに声をかけてもらって入ったわけです。それはずっと続き、まる一年ほどの空白ののち、そのまま「たうろす」（1963年）へと移っていった。だから継続しているわけです、1998年まで。長い期間「たうろす」は続きます。だから「くろおべす」からいうと半世紀（笑）。「ぼえとろ」に関わりながら「交替詩派」、「ぼえとろ」の廃刊のあと直ぐに「くろおべす」に関わったので、いつも二つ同時。「渥木」を退会したときには「歷程」（草野心平主宰）に入っている。心平さんから誘いがあった。それでどうしようかなとおもっているなかで、「くろおべす」があるでしょ、だから「歷程」と「くろ

おべす」、という感じでこれから行こうとおも
い退会してる。「歷程」は現在に至っている。
新藤涼子さんからは、書きなさい何でも載せま
すからとよく電話がかかる(笑)。今も続いて
いる「火曜日」は朝日カルチャーセンターに一
度入会した人というのが条件。それと「蜘蛛」
の創刊(1960年)。これは今までのこうい
う詩や文学の同人雑誌とはちょっと違う面があ
って、神戸の若い詩人連中が集まり、結果的
には四人(ほかに君本昌久、伊勢田史郎、中村
隆)で編集して出すという、神戸やけれど、日
本全体の公器的な雑誌、いわゆる同人雑誌とい
うかたちを採らなかった。だから「蜘蛛」はこ
のなかでは少し違うわけなのね。そうすると、
大体二つほどに同時に関わりながらやってきた
ことになる。

一ひとつではもの足りなく感じられたのですか。

安水 間に合わん。

一表現意欲が旺盛なわけですね。

安水 そうそう、どんどん書きたいからね(笑)。

一意欲ですが、今も変わらずという感じですか。

安水 今も変わらず、ちょっと違う。当時は書き
たいテーマを一杯抱えていました。

一今はテーマが絞られていますからね。

安水 そう、それと同人雑誌というのは普通制約
がある。ひとりが何頁もとるということでけ
へんでしょ。だけど「交替詩派」も「くろおべ
す」も「歷程」も、書きたいことをどんどん書
かせてくれた。制約がない、それがよかった。
「交替詩派」に『存在のための歌』(1952
年、第一詩集)の第一部の長い詩、あれを三段
組にして発表している。「ぼえとろ」と「交替
詩派」が重なり、「ぼえとろ」廃刊のあとは、
「再現」「灌木」と「くろおべす」が重なって
発表の場となる。「灌木」退会のあとは、「歴
程」と「くろおべす」「たうろす」が重なり、
今は「歷程」と「火曜日」が重なって続いて
いる。

一同時代意識の問題なのですが、「ぼえとろ」を
出された時期、たとえば鮎川信夫や田村隆一の
「荒地」は意識されましたか。

安水 横のつながりですね。大学の頃私がどんな
詩的な風土に居たかということだとおもうけれ

ど、空襲で焼け出され、龍野の奥の母の実家に
疎開したとき、叔父の書架に改造社版の現代日
本文学全集63巻が並んでいた。これをもう、

一貪り読みましたか。

安水 読みに読んだ。坪内逍遙、二葉亭四迷から
尾崎紅葉、森鴎外。正岡子規がすっかり好きに
なってね。こころを奪われた。徳富蘆花の『思
い出の記』は二度読み返した。夏目漱石、藤村、
谷崎潤一郎、とにかくざあっと読んだわけ。こ
のシリーズの一番新しい巻の『新興文学集』に
横光利一の『機械』、『新興芸術派集』に川端
康成の『伊豆の踊子』が入っていた。ところが
ね、これ偶然というのは面白いもので、街道筋
の叔父のところへ行ったら、宝の山がもうひと
つ見つかった。『新日本文学全集』が、これも
改造社版やけど十数冊並んでいた。昭和の作家
が大体一人一冊で収められていた。これを一冊
一冊借りては帰ってきた。林芙美子、石川達三、
丹羽文雄とかね、この二つの全集に明治以降の
日本文学はほとんど網羅されていた。

一それは、15、6歳の頃ですか。

安水 長田へ戻って来る前やから、中学生から高
校生やね。無茶苦茶、本が好きやったんやね。

一それまではそれほど読んでいないのですか。

安水 読めない、あらへんや(笑)本。当時私は
自転車で峠ひとつ越えて龍野の町の学校へ通っ
ていた。学校の図書館には読みたい本はない。
町の本屋さんへ行っても本はあらへん。たんま
に、雑誌の薄っぺらいのが入っているくらいで
ね。だから本屋に並んでいるのを買って読むい
うことは頭になかったわけ。そのうちもう一つ
宝の山を見つけた。新潮社版の『世界文学全
集』を龍野の古本屋さんで。

一ほう、古本屋さん。

安水 あった。小さな古本屋さんやなんやけどね。
それが五十冊ほど並んどった。龍野の城下町、
場所もおぼえているけどね。

一立ち読みですか。

安水 お金が要るわけやから。

一貸本屋さん、では。

安水 そう、貸本屋さんや(笑)。だから一冊一冊、学校の帰りに借りて読んでまた借りる。期間は一週間。

—ということは一週間に一冊読んでいたのですか。

安水 ペースはもっと速かったような気がする。小説や戯曲、イブセンなんかも入っていた。この三つの全集が中学の三年生、高校の一年生、二年生の頃の私の読書の対象だった。もうとにかく貪るように読んだ。そのなかに一冊、『世界詩人集』というのがあった。それを見つけて、その頃はまだ詩はあまり頭になかったわけやね。だけどまあ日本の文学全集、外国の文学全集を読むと当然短歌や俳句や詩が出てくるよね。『世界詩人集』を借りて帰ったら、面白かった。一週間経っても読みきれず、もう一週間借りる。もう一週間借りても心残りで写そうとおもった。黒い手帖、今日探したが出て来なかったが、黒い表紙の薄い手帖に写していった。

—まさに筆写ですね。村上一郎さんに教えられ、ばくも若い頃は写していました。

安水 写したもののなかでよく口ずさんだ詩句に、ヴェルレーヌとかコクトー、フランシス・ジャム、ハイネ、ウィリアム・ブレイク、マラルメがあった。とにかく当時翻訳されていた各国の詩人の作品が収録されていた。

—翻訳者はだれだったのでしょうか。

安水 それはおぼえてないけれど、昭和の初めに刊行された『詩と詩論』なんかを見てみると、そこには当時の詩人のほとんどの作品が紹介されていた。『詩と詩論』で扱われていたあれくらいまでが全集にも入っていたとおもう。堀口大學とか山内義雄とか、そうそうホイットマンは富田碎花訳やった。読書というか、文学に触れる世界というのは、そんなかたちやった。それで神戸へ帰って来て、

—焼け跡の神戸ですか。

安水 いやそのときはそうではない。昭和20年6月5日の神戸空襲で焼け出された。すこし後に親父に連れられて兵庫駅に降り立ったときはほんとうに焼け野が原だった。高取山が見えていた。神戸に戻ってきた頃はもうそうでなかった、四年経っているから。最初は親父の会社の長田支店が高速長田の近くにあったので、その二階で私ひとり下宿して。自炊。それから

親父たちが家族を連れて引き揚げてきて、ここに入ったわけ、ここ(長田区池田上町)はそれ以来ずっとなんです。

—「ばえとろ」でなにか思い出、ありませんか。

安水 あるとき信濃追分に行った(昭和26年7月)。一社壮志、川崎淑男、森公児、そして私。この四人が、そのときにね、手分けしてそれぞれが好きな詩集を持っていった。一社が草野心平詩集と高村光太郎詩集。川崎が中原中也詩集と堀辰雄作品集、ルナールの『博物誌』。森が立原道造全集全三巻。私は、津村信夫詩集、丸山薫詩集、吉田一穂詩集、『現代詩代表選集』それと「ばえとろ」を持っていった。向こうで合評会でもしたんやろね、きっと。「ばえとろ」はフランス語 *poëtereau* で、三文詩人とかへぼ詩人とかいう、或いは詩人になりかけ、そういう意味があるが、私たちがこの誌名を選んだのは、へぼと卑下するのではなく、今は卵やけれども、いつかは一人前の詩人になるぞと鼓舞する感覚があったからだとおもう。

—西条八十にも似たような名前の雑誌がありましたよね。

安水 あった、あれはもっとちよつと後の雑誌。たしか八十の娘さんの三井敏子さんが出していた「ポエトロア」(昭和27年10月)。それで、信濃追分に持っていった詩集は所謂戦後詩ということを考えるとずいぶん違うでしょ。

—近代詩です。

安水 そう近代詩。でもね、考えてみたら、昭和26年から10年前20年前の詩ということ。それでね、さっきもいったが、あの頃、昭和26年から27年にかけて、周囲には本がない。だから本に飢えていた。家庭教師のはしごをして得たなにかのお金を握り締め、三宮から元町通りを西へ次々と古本屋めぐりをした。神戸駅前には大きな古本屋(合資会社神戸駅前書店。多聞通二ノ三七、八千代劇場裏)があった。すると面白いほど詩集が手に入った。それも嘘のような値段で。戦後ね、詩人たちも蔵書を手放したんやとおもう。津村信夫の『愛する神の歌』『父のゐる庭』。福原清の『催眠歌』、笹澤美明の『海市帖』、菱山修三の『豊年』『望郷』も手に入った。いま菱山修三、だれもあんまりいわへんでしょ。だけど私はこのひとにもすこし影響を受けた。たとえば「四季」なんかは日本的な感性でしょ、ところがこのひとの

感性は西欧文脈。散文詩が多かった。それから、田中冬二の『海の見える階段』を手に入れたんよ。丸山薫の『物象詩集』、安西冬衛の『座せる闘牛士』『大学の留守』、伊東静雄の『夏花』。竹中郁も三冊、『龍骨』『動物磁気』『象牙海岸』と次々と入手し、モダニズムのかおり、エスプリ・ヌーボーのかがやきに触れふるえました。ことば、詩、とにかく来るもの全部を引き受けようとする姿勢だった。だから古本屋めぐりが楽しくてね。

—うらやましい。

安水 この話、しだしたら脳道にそれる(笑)。

—別の場合に是非(笑)。

安水 つまり大学に入るとき、私は文学部に入りたい。親父は、

—猛反対でしょ。

安水 経済学部(笑)。それ以外なら学費は出さへんという。大学におったら喜んでくれて、ところが文学部ゆうたらとたんに怒って。機嫌が悪いところの話じゃない。すぐに手を出すひとやったからね、怒ったわけ。そのうち私が新聞や雑誌に書き出した本を出したら、そっと買うてきたりして(笑)。

—よくあるパターンです(笑)。

安水 アルバイトをせな仕様がな。それでお金を握りしめ、せっせせっせと古本屋通い。

—「ぼえとろ」を出しているときというのは朝鮮戦争勃発の動乱期でもありましたから、神戸大学でも学生運動は激しかったとおもいます。政治的関心、マルキシズムはどうとらえていたのでしょうか。神戸大学では学生運動はさほど活発ではなかったのですか。

安水 それはあったとおもうけどね。

—関心はなかったのですか。

安水 なかった。あったのは60年安保闘争の頃やね。

—「蜘蛛」のときですね。

安水 いや「蜘蛛」がスタートする前。三ノ宮駅の南側の広場で大集会があり、そのとき私は演

説をしたことがある。矢倉を組まれ、その上に上げられて(笑)。

—それって、君本昌久さんにアジられたのではないうのですか(笑)。

安水 まだあのときは彼との付き合いは始まっていない。よう知らなかった。

—ばくが確認したいのは、「荒地」のほかに、「列島」という戦後の雑誌の運動がありましたよね、それらを含めたマルクス主義、所謂プロレタリア文学などからは切れていたのですか。

安水 離れている。

—聞いていますと、「荒地」からも距離がありますよね。

安水 『荒地詩集』は次々買って熱心に読みました。「荒地」とか「列島」とかいうのをね、全部ひっくるめ、入ってくるものすべてを受容していたというか、そういう感じです。大学では英文学。エリオットとかスペンダーなど三十年代の詩人たちを学んでいました。卒論は T.S. エリオットの「四つの四重奏」論を書きました。

—政治闘争、マルキシズムを気質的体質的に受けつけないという傾向があったのでしょうか。近代以降、日本の詩人は好むと好まざるに拘わらず影響を受けたとおもうのですが。関心がまったくないわけではないですよ。

安水 うん。私が生まれて三日目に満州事変が始まってたわけやしね。そして十五年戦争、空襲の経験もあるし。そして戦後。細かく見ていくと、私の作品のなかに現実の意識は入っていくわけ。それが主義主張になることに私はなにか、そっちに行かへんかったみたいやね。といって、「四季」とか「日本浪漫派」でもなかった。受容できるものは全部受容するけれども、なんかすうすうすり抜けさせるという感じがあるね。

—党派の思考、イデオロギー志向を遠ざけたのはよくわかります。とくに震災以降、文学ではなく記憶だ。個の営為の文学行為ではなく、もっと幅の広い、おおいなる記憶へのにじり寄りであるというような言い方をされてきましたが、今のご発言はそのことにも繋がるとおもいました。そして、目の前の事象よりもっと大きな、幅の広いものに向かう傾向は若いときからあつ

た。でないと、すり抜けるという感覚は受けとめにくい。

安水 状況、時流とかにはむしろ鈍感だったね。

一鈍感たことに意識的だったと受けとめておきます(笑)。

安水 手法的なこととも関わるけれど、震災後に、震災のことを書いた詩は、事件を直接書いているわけではない。ことばに転化され、記憶として残ってそれが今の人だけではなく、五十年後百年後の人びとにも、そのつくろうとする記憶になにかつながっていくものとして書いておきたい。

一やはり「ぼえとろ」の時代とつながっていますよ。

安水 ようにもおう。

一また難しい、はぐらかしをされて(笑)。独特のいいかたです。

安水 話をしている気づいたのは、ずっと一貫してあまり変わっていないけれども、どちらかというと、「ぼえとろ」で書き始めた当初の頃からしばらくの間は、詩とか文学にのめっていた。今は、

一前のめりではないですよ。

安水 詩を書いているわけやけれども、詩や文学といったものを作り出す人間、関わる人間、読みそして書く人間、そういう人間というものが持つ記憶、今はそういうところに関心が向かっている。「ぼえとろ」でじつは詩論、詩論の試論を書いている。恥ずかしいけど。そのなかで、「汝は人間としてよりも詩人として語れり(ペテロニウス)——私は、私の詩法の確立によって、詩人として語るをえて、然る後この言葉を引き裂こうとおもう」、こんなことを書いています。

一驚きです。安水さんにこんな荒々しい季節があったとは。(つづく)

2007年5月15日、安水稔和氏宅で

註 中尾務氏の『小島輝正ノート』(浮游社)に「エスカル・寄港地」のことが出ている(213頁〜220頁)。それによれば、「ESCALE」ガリ版刷、命名者は森公児、ジャック・イペールの管弦楽曲「エスカル」からとったとされる。1号はB5版105頁、発行所は文学研究会。安水稔和氏は詩「MEAE MAGNOLIAE」を発表。2号はB6版72頁、発行所は神戸大学文学研究会。

エディション・カイエと阪本周三 連載、1

大西隆志

神戸で詩人がやっていた出版社という、僕にとっては君本昌久の「蜘蛛出版社」と、出版数はそんなに多くはない阪本周三の「エディション・カイエ」が思い浮かぶ。1928年生まれ君本と、1953年生まれ阪本とは親子ぐらい年齢差があり、詩人の出版社としてある種の共通点が窺えるようにも思えたが、詩においても出版の仕事に関してはフィールドは違っており、直接的な関係はなかったのではないかな。ただ、阪本が「蜘蛛出版社」の『楠田一郎詩集』『永田助太郎詩集』『棚夏針手詩集』『アラゴン・シュルレアリスト』などの書籍に敬意をはらっていた記憶は残っている。それにしても、1997年3月に69歳で君本昌久が、2001年1月に48歳で阪本周三が共に故人となり、いまさら話を聞くことも出来ないが、バブルで浮かれていた80年代中頃の神戸で詩を書き、語り、痛飲し、地道に本を送

りだしていた姿は、時代状況に違和感を覚え続けていた二人の詩人の言葉と精神がどこかで交差していたように思える。神戸で根を張って約110冊程の出版を数えた「蜘蛛出版社」と、1984年神戸で産声を上げてから7年後に東京に拠点を移した「エディション・カイエ」。手許にある出版物を見ていると、これらの名前を奥付に持った新しい書籍には出会えないことが、誰かが継ぐこともない極小出版社の宿命だと納得しているのにとっても残念でならない。

ここで書こうとしている「エディション・カイエ」は、神戸元町界隈の旧居留地という土地の匂いを軽く感じさせてくれてはいたが、地域色にこだわるのではなく、外へ外へと開かれていく視点が風通しのよい出版物を産み出していた。阪本周三が京子夫人と共に始めた編集スタジオは、当初から出版社を試みていたというよりも、優秀な編

集者でもあった阪本の自らの拠点としてのベースキャンプ、または着のような場所でもあった。それまでは、雇われ編集者だったこともあり、自分の編集スタジオを持てた喜びと、これからの夢として花開いたのが、出版の仕事だったのではない。神戸の地でスタートした仕事に手応えを感じていたのは、たまに会うべくにも分かっていた。とくに、エディターとしての評価が高かった阪本周三・京子夫婦による「エディション・カイエ」は、従来からあった出版社との違いを感じさせてくれた。それはこの事務所の佇まいや、出版された書籍にもいえることだが、瀟洒でありながらもやっぱり暮しの手触り感覚を残し、文具の存在を確かなものとして感じさせるような手近な手仕事の確かさでもあった。このことは、1984年10月30日発行のミニコミ紙『午後の新聞』に阪本周三が書いたエッセイ「声低く語れ」にも色濃くあらわれている。

「今日、私たちはいかようにも生きていくことができる。職業も価値も多様であるように見える。この時代の【明るさ】の中ではしゃいでいるコピーライターにもエディターにもフォトグラファーにもデザイナーにもクリティク（批評家）にも、自らの仕事の中に意思をつらぬくことが困難になる日が、さほど遠くない未来においても必ずやってくる。しかも、そのような日々のなかで精神の健康を維持していくことは、すこぶるむずかしい。ぼくたちの意志や力を越えたところで働く巨大なメカニズムが日々私たちを蝕み、スポイルする。それを防ぐ手だてはないだろうか。（略）また、物質をいじくりまわすこと、手近な手仕事にかえること。（略）現在のぼくたちの喧噪の対極に『声低く語れ』という言葉をしっかり和据え、自らの庭を自らの手によって耕しておこう」と、あった。今の時代へのメッセージが書かれているのではと思うほど、予言的であった。林達夫の文章

から受けた言葉を自らの指針として受けとめている阪本周三の思いが伝わってくる。この文章は今から23年前の「エディション・カイエ」を設立した年に綴られたものだ。

最初に「エディション・カイエ」の事務所を開いた場所が、神戸市中央区浪花町59番地の神戸旧居留地に位置する神戸朝日会館ビルの2階であった。このビルは、村野藤吾を育てた建築家渡辺節の設計により1934年に建築された神戸証券取引所で、古典主義をベースとした重厚な洋風建築であり、戦後はGHQに接収されてもいた。その後は映画館とオフィスビルとなり、「エディション・カイエ」が入っていた当時は、天井が高く空間的にゆったりとしたワンフロアーに、デザイン事務所があり、コピーライター、フォトグラファーのスタジオ、編集スタジオなどが同居していた。元々は神戸経済会を支えていた大手企業の事務所などが多かったのだが、建物自身が古くなり機能的でもなかったのも、新しいビルへの転居などにより、空きが出てきたことにより若いクリエイターたちが集まってきたように思える。ここより南に下がった大興ビルも同じように、広告宣伝に関わるデザイン事務所などのクリエイターたちが集まっていて、神戸朝日会館ビルに入っている人との交流は頻繁に行われていた。ひとつの空間を誰もが自由に使っているようでもあった。

ぼくが初めて「エディション・カイエ」を訪ねた時は、ザ・バンドの音楽が流れていたことを鮮明に覚えている。誰のデスクの上に置かれたラジカセから聞こえてきたかは忘れてしまったが、不思議な自由さがあった。この雰囲気もバブルの中での祝祭だったのかもしれないが、最初の書籍がこの場所から送り出されたのは、1986年5月発行の黒瀬勝巳詩集『白の記憶』だった。この詩集は黒瀬勝巳の遺稿詩集でもある。（continue）

植民地の記憶 連載、1

柳原一徳

浪花の唄う巨人・バギヤンこと趙博兄が、ライブでよく唄う曲の一つに「ソウルからビョンヤンまで」というのがある。軍事独裁政権時代の韓国における民衆の抵抗歌の一つ、である。

ソウルからビョンヤンまで／タクシーで5000円
モスクワにも行けるし／月になって飛べるのに
プサンよりもっと近い／ビョンヤンへは行けない
目と鼻の先にある／ビョンヤンへ何故行けぬ

クラクション高らかに／ソウルからビョンヤンまで
夢でもいいから／アクセルふんでブッチギって行く
こう
（編・訳詞 趙博）

ソウルからビョンヤンまでの距離は、日本にあてはめると大阪もしくは神戸から広島、タクシー代5000円は韓国語の元歌では5万ウォン——円が

下がった今なら約 6000 円にあたる。経済格差を差し引いても韓国の交通費は安い——という以前に日本の交通費がべらぼうに高すぎる——のだが、実はこの程度の距離なのだ。日本の新幹線なら 1 万円で 2 時間もかからない。この二つの街が、いまだ自由に往き来できない。

少なからぬ日本人が何も知らんということ自体嘆かわしいのだが、戦後復興期の日本に特需景気をもたらした朝鮮戦争はあくまで休戦であり、いまだ終戦に至っていない。離散家族の悲劇はいまも続く。韓国における、北朝鮮による拉致被害者の数も、日本のそれとは比較にならない（もちろん被害者数の多寡で事を語ろうとするつもりは毛頭無い）。

学校でろくすっぽ近現代史を教えてこなかったおかげで、日本による朝鮮半島への植民地支配すら知らぬ（乃至その結果否定する側に回る）者も少なくない。挙げ句、日本軍慰安婦を否定する輩までもが跋扈し、歴史教科書の「慰安婦に関する記述」も、全社消滅してしまった。ほなアレか？ ワシらがやってきたことはみんな幻やったんかい！？ 〈永野茂門法相による公娯発言に抗議しての韓国人元慰安婦 15 人突発来日事件〉（1994 年 5～6 月）に関わった一人として、この怒りを何処にぶつけたらいいのか……。

話を戻す。クラクション高らかにソウルからピョンヤンまでブツギる——それが叶わない。朝鮮半島の南北分断が続くからだ。それを生み出したのは誰だ。ひとえに、日本による植民地支配ではないか。

イントロが長くなってしまったが、その一端には、私の身内も深く関わっている。

ここ数年にわたって、山口県沖家室島（おきかむろじま）の同郷通信『かむろ』の復刻版作りに携わっている（泊清寺編、全 15 巻予定。小社より第 3 巻まで刊行）。島の青年団体「沖家室惺々会」の機関誌として当初は季刊、後に月刊で 1914（大正 3）年 9 月から 1940（昭和 15）年 3 月まで通巻 158 号を刻んだこの小さな雑誌には、島の日常はもちろんハワイ、朝鮮、台湾、満州など移民先からの通信のほか文芸欄等も設けられていた。通信も交通も不便な時代、島外を働き場とする人々にとって、島とのつながりを確信できる、貴重な〈場〉であったに違いない。

島の人びとの移民先のうち、朝鮮、台湾等は当時日本の植民地だった。時代性に鑑みて当然であろうが、当時の『かむろ』の誌面で、植民地へ向けての島の人びとの発展を称揚する記事こそあれ、植民地支配を受けた現地の人々の憤怒に対する視線はない。

沖家室島にある父方の実家は、1943（昭和 18）年まで植民地支配下の朝鮮京畿道（キョンギド）開城（ケソン）にいた。当時の住所は「けいきどう・かいじょうふ・満月町（まんげつちょう）」と日本語読みしていた。いまは北朝鮮に属する。

『かむろ』の誌面に頻繁にその名が出てくる木村勇二郎は高麗人参で財をなした実業家で、その連れ合いの弟にあたる父方の祖父はそこの金庫番として、一家で朝鮮に渡った。

高麗人参は土の精を吸い尽くす。収穫をすませた後、数年は畑を休ませる必要がある。財をなすには相当の土地が必要だろう。いまの山口県くらいの面積の畑を持っていて、小作料をとって歩くのに 3 ヶ月かかったと父は云うが、あながち誇張とは思えない。そして政商ゆえだろう。朝鮮総督府との関わりも深く、木村勇二郎と牛島満中將と一緒に写った写真もあったと聞く。

父は 5 歳まで開城で過ごした。屋敷の住み込みには「イーンソバン」という気の優しい大男がいて、可愛がってもらったという。姓は「李」だろう。名はどの漢字をあてるのか、今となってはわからない。その後の消息を知る術のない「イーンソバン」もまた、解放後の 1950（昭和 25）年に勃発する朝鮮戦争で命を落とした一人かもしれない。（つづく）

『伊藤茂次詩集 ないしょ』（龜鳴屋）

頒価 1,600 円（税込み・送料別）

跋 川本三郎 「かいしよなし」の悲しみ

再録 天野 忠 ないしょの人

大野 新 一篇の傑作をのこしたアル中詩人

解説 外村 彰 伊藤茂次（もじさん）伝

写真 小幡英典 裏辻の影

表紙・扉画 滝田ゆう

◆問い合わせ kamenaku@spacefan.ne.jp

石川県金沢市大和町 3-39. 龜鳴屋・勝井隆則

登尾明彦詩集『パンの木』（みずのわ出版）を読んで

野口豊子

登尾明彦さんが三六年間務めあげた、兵庫県立湊川高等学校の内実を深く知りもしないのに私は次の詩の出だし、「子どもたちが吠え／私たちが試される」と言うところに、ある種の感慨を覚えた。

子どもたちが吠え
私たちが試される
あの過ぎ去った日の
遠い記憶が
私をもうひとりの私と
出会わせる

（「問い」）

湊川高校が志向する解放教育の一端として正課の授業に朝鮮語が採用されたのは一九七三年のことだった。そしてこのとき、日本の公立高校に於ける初めての朝鮮人教師となって教壇に立ったのが金時鐘さんであった。就任一年半が経過した頃、ある生徒から「なんで朝鮮語せんなんのや？」と、発せられた問いに金時鐘さんは（私は君と向き合う前に、まず「湊川」の存在理由と出会わねばならない。それから湊川高校の「存在」を形づくっている教師達と、更めて確かめあわねばならないことがある）と記した。ここで金時鐘さんの言う〈湊川高校の「存在」を形づくっている教師達〉のお一人が登尾明彦さんであり、私はそのような金時鐘さんを通して登尾明彦さんのお名前を知ることとなった。

当時金時鐘さんは吹田市にお住まいになって居た。そこにお伺いしたとき玄関の上がり口に木刀が立てかけられてあった。登尾さんの詩集を手にし、「子どもたちが吠え／私たちが試される」と読み進めて、ふと私は上がり口に立てかけられてあったその木刀のことを思い起こした。たしかあのとき金時鐘さんは素振りをしているのだとおっしゃっていた。まだまだ腕白坊主どもには負けてはおれん、という言葉の一つも忘れがたく甦ってきた。

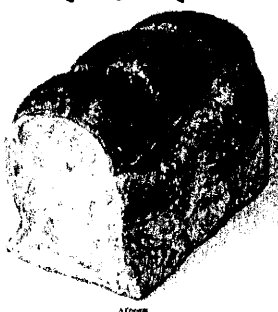
迂回な言い回しになってしまったが、湊川高校の教師の一人として登尾さんもまた、登尾さんの立場から「試される日々」を生きて来られたのだと思う。パンを焼く資格がお前にあるか、と日々問われ、パンを売る資格が私にあるかと自らに問い、パン焼きの男がパンを焼けなくなって詩を書くことから遠ざかった。「問い」の詩はこう続く。

私はパンを焼き
夢を売る
そして三十年
私はなぜパン焼きになったか
問いは
今も問いのままだ

そしてある日、男は丘の麓の小さな家に帰ってきた。長らく置かれてあったパン焼き竈に火を入れ、男はまた以前のようにパンを焼きはじめた。「子どもたちはどの子も／面白い子どもだった」と心のそこから思える日までパン焼き稼業に専念した。夜しか買いに来れない子どもたちのために焼き方にもひとつ工夫がいるのだ。

男が焼くパンを買いに来るのは子どもたちだけではなく。ハラボズ、ハルモニたちも男の焼くパンを買ってくれる。男は思う、パンはパンでも腹をみただけでは何か足りない。これが私のパンだと言えるようなパンに仕上げるのだと。定年という店じまいの日が来るまで男は精魂込めてパンを焼いた。登尾明彦詩集『パンの木』はそれらの日々の痕跡の印なのだ。

登尾明彦詩集
100の木



風が吹き
 灰色の風が吹き
 カタカタと
 骨が鳴る
 パン焼きの男の
 骨が鳴る (「骨が鳴る」)

登尾さんはそうしてパン焼きの男の骨まで歌いきったのだから、店じまいにも悔いは残さなかっただろう。

登尾明彦詩集『パンの木』(みずのわ出版)
<http://www.mizunowa.com/>

活動日誌

2007年

- 2月4日(日) アーカイブカフェ「ボランティアという生き方ー語りと音楽がつなぐー」開催。
 於：みみずく舎
- 2月27日(火) 神戸大学文学部地域連携センター主催「第7回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」にて季村範江『「震災・まちのアーカイブ」活動の軌跡』発表。
 於：人と防災未来センター
- 4月8日(日) 今後の活動についての話し合い 於：事務所
- 4月18日(水) 資料整理 於：事務所
- 5月13日(日) アーカイブ設立10周年にむけての話し合い 於：事務所
- 5月23日(水) ミニコミ整理 於：事務所

アーカイブカフェは「ひょうご安全の日推進事業」の助成金をいただいて開催いたしました。その際、10年以上経過し劣化が激しいビデオテープのDVD化を行いました。(季村範江)

寄稿者紹介

- 大西隆志ー1954年兵庫県加古川市生まれ。バンド「ひとつ山こえてみよう会」でマンドリン、バンジョー担当。詩集『オン・ザ・ブリッジ』ほか。
- 加納成治ー1949年尼崎市生まれ。市内の印刷所勤務のあと、1985年より古書店「街の草」を自営。上念省ー1959年明石市生まれ。「風景が壊れている、そして私も…」が高等学校国語教科書『ちくま現代文改訂版』に掲載される。
- 野口豊子ー大阪で「みず工房」主宰。この数年、金時鐘氏による『新訳朝鮮詩集』の連載に取り組む。初夏には岩波書店より刊行予定。
- 安水稔和ー1931年満州事変の三日前に神戸で生まれる。神戸大空襲で龍野へ疎開。著書『記憶めぐり』『歌の行方ー菅江真澄追跡』ほか多数。
- 柳原一徳ー1969年生まれ。「みずのわ出版」代表。『阪神大震災・被災地の風貌ー終わりにき取材ノートから』ほか。

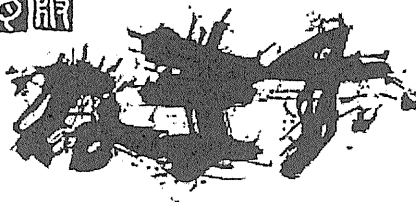
あとがき

ブラジル映画の『セントラルステーション』を観てからというもの、最終シーンが胸に焼きついてしまった。「すべてが恋しい」、轟音をあげ疾駆するバス。主人公の声は、今の私たちからは、まず出て来ないだろう。やり直しは何度も出来るから致命的な遅れはないという「混血都市」からのメッセージを、まばゆいおもいで受けとめかねている。

今回は編集はジグザグの道りだった。神戸を論じる際、渡辺一考さんなしでは考えることすらできない。次号はどうしても、そういう意味をこめ、少しひねってみた。(季村敏夫)

2008 - 01 - 02

23



Kawaraban



瓦版なまず

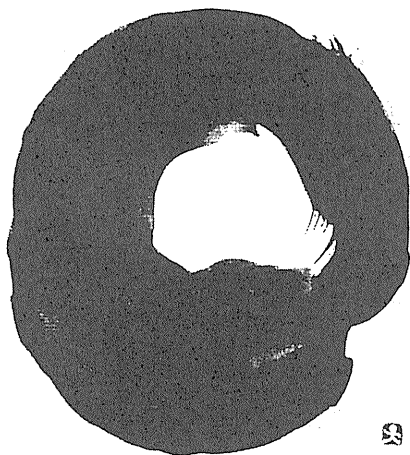
第2期第6号 (通巻23号)

編集人: 季村 敏夫

発行人: 季村 範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone : 078-681-6231 Fax : 078-681-6232



- 2 山本唯人
- 4 柳原一徳
- 6 季村敏夫
- 8 内堀 弘
- 9 安水稔和

<記録>以前
移民が移民を呼ぶー植民地の記憶 その2
太田省吾さんのこと
古本ノ読ミ方
深い深い深い息づかい



表紙・絵 林哲夫

＜記録＞以前

山本唯人

こここのところ、手記資料と向き合う日々が続いている。手記とは、文字通り「手で書かれた記録」。これが、印刷され、出版物として流通されるかたちになってはじめて、多くのひとが手に取り、本棚に並ぶ＜記録＞になる。ところが、どんな＜記録＞にも、もう一つ手前の状態—様々な紙片に、思い思いの方法で記された一手記の段階がある。ここを通過して、記録は＜記録＞になる。

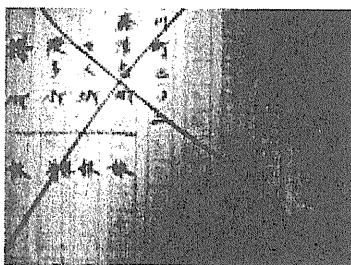
昨年は、東京大空襲・戦災資料センターの増築リニューアルにあたり、37年間、たまりにたまった資料の整理を行った。前身にあたる東京空襲を記録する会は、発足が1970年。おそらく、大規模なものとしては、おそらく戦後はじめて、一般のひとびとに向けて空襲体験の記録を呼びかけた。約800名のひとたちから記録が寄せられ、全5巻におよぶ『東京大空襲・戦災誌』が編まれた。

「原稿がどこかにあるよ」とは、編集の土岐島雄さんから聞いていたのだが、遂に倉庫のなかからつきとめた。一部、展示していたものも含め、全体ではおよそ、大きなダンボール2箱。これを受け取ったのは、「資料」の保管・管理にうるさい歴史家ではなく、記録集の出版を企てる編集者たち。投稿は全員採用、当人の文字にそのまま、まことに荒々しく、赤の編集記号が加えられ、聞きとりたがわず、手記はまず「原稿」として、印刷屋に入稿されたことも確かめられた。

30年を経過するだけあって、書き手は、戦争当時壮年真っ盛り 40～50代、生まれでいえば明治20～30年代生まれのひとと珍しくない。その割に、筆跡は思ったほど個性を表さない。たいてい万年筆かボールペンで、楷書体の文字がきちっと原稿用紙の升目に並んでいることには少し驚かされた。それほど、日本国政府による「識字教育」の影響は大きいということか。採用された文字＝メディアで見るかぎり、記録運動とは、明治の国家に＜対置＞されるものではなく、むしろ、明治の鋳型で組み立てられ、昭和の少国民としてもっと強く鋳直された「国民」の＜くだな＞から、湧いて押し上げるように、出てきた運動だったと位置づけるのが適当なのかもしれない。

ただし、手記とは、通りすがりの人が、普通の意味で＜読める＞ようなシロモノではない。あるいは、そもそも、そういう意味で＜読まれる＞ことをはじめから欲していない表現とでもいうのだろうか。ざっと見るかぎり、一番赤の入っているのは、まずタイトル、それから、やはり、家族に関する記述だろうか。たいていの場合、「戦災

記」とか、「三月十日のこと」とか、そんなことしか書かれていない。また、冒頭に「わたしは文章が苦手なので…」と編集部宛に添え書きした上、亡くなった家族の名前が親等ごとにきれいに並んで、故人の情報が細かく記述してあったり、自分自身への覚書として、もしくは、となりの誰かに語りかけたいのに、そのひとがいないので宙に浮いたまま、顔をのぞかせているといった風情。手記とは、本質的に宛先不明の言葉たちのことをさすのかもしれない。



資料センター所蔵の手記

ところがそれでは、＜記録集＞にならないので、まず、編集部でそれらしいタイトルを付ける、名前の周りにたつぷりとった囲みは取り払って、字送りは詰めるだけ詰めて、ぐっとスペースを圧縮する—そうやって、記録から＜記録＞が象られていくプロセスも追体験することができた。

その時間を逆さにたどり、建替工事前の「原稿」に立ち戻ることで見えてくるのは、手記。手の痕跡は、＜記録＞を表面的に見ていたのではわからない、色々なことを教えてくれるに違いない。

それにしても、なぜ、人は＜書いて＞しまうのだろうか、そんなことが最終的な疑問として浮かんできてくる。同じく、昨夏発掘してガラスケースに収めた雑誌『燃える川』など、もしかすると、そのヒントになることを伝えてくれるかもしれない。

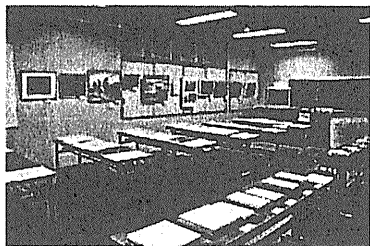
創刊1972年、「江東区に慰霊碑がない」ことに気付いた深川森下界限のおかみさんたちが、まず自分たちの体験を出し合い、交流を深めるためにはじめて手作りのサークル雑誌。色紙のきれいな表紙がついて全5冊、そろっているのはここぐらいだろう。

メンバーの橋本代志子さんによれば、これのおかげで、回りに同じような体験を持つ同性の友人たちがいることが分かり、牡丹町の町会長さんな

ど、少し離れた町へも活動を広めるのに重宝した。「少し離れた町」へ言葉を届ける一どうも、このあたりに体験が文字へと越境する境目があるようだ。

川田順造さんは、〈声〉は基本的にそれが交わされる場から離れられないという特徴を持つこと、それに対して、文字は固定化されたメッセージを、遠く離れた場所へ、何度でも運ぶことができる、そして、文字コミュニケーションの空間の成立は、不特定多数の人々をく統べる>欲望とどこか結びついた現象であることを示唆している。

「少し離れた町」の範囲で交わされる手記は、いつでも、簡単におかみさんたちのおしゃべりのなかに噛み砕かれ、一方では、日本語のマーケット全体に向けて空襲体験を広めようと企てる公共団体や商業出版の世界につながっている。どっちつかずの手記の世界は、声と<記録>のちょうどはざまに揺らめいている領域といえるのかもしれない。



2007年3月『原稿展』の会場風景

今年3月、開館5周年・増築リニューアルの再出発にあたり、「原稿」を展示することにした。名づけて、『原稿展』。大空襲で最も被害の大きかった日本橋・浅草・向島・本所・深川・城東の旧下町6区、約300人へのぼる手記、町別にテابلに並べ、全点。

町別に並べたのは、『戦災誌』を編集した松浦総三さんの考え方による。松浦さんは、戦前『改造』編集部。「マスコミ」を作り上げてきた<文字>の世界のプロ、体験記誕生の仕かけ人の一人だ。松浦さんは、「あとがき」のなかで町別方式の理由を次のように述べる―対象化された記録は体験者にとって、「その夜」の「あの場所」「この橋」の状況を思い描く資料であり、体験を通して連帯と対話を生み出す資料となる。

展示にあたり、原稿の端に書き留められた30年前の住所に宛てて、お知らせの手紙を出した。300のうち200は<宛先不明>のスタンプについて返送、届いた中の15のご家族の方々が、センターを訪れてくださった。30年後の文字との対面。文字を通して、世界した父、母、その息子さん夫婦、孫と一緒にぎやかな会話。残りの200も、未来の出会いを待っている。

「あの場所」「この橋」に関心を持つひとたちにとって、それはいつでも、あのおかみさんたちのおしゃべりの世界に引き込み、かすかに、見えにくくなっていたつながりをにぎやかによみがえらせてくれる一手記は、そういうもう一つの世界とつながっている。資料センターでは、今年科研費をとって、データベースを作成中。遅々たる歩みではあるが、続きはいずれ、またの機会に。

(東京大空襲・戦災資料センター研究員、社会学)

東京空襲を記録する会編『東京大空襲・戦災誌』第1～5巻、1975年
東京大空襲・戦災資料センター
東京都江東区北砂1-5-4 月火定休・開館12:00-16:00
<http://www.tokyo-sensai.net/>

現代思想 2007年12月臨時増刊 青土社
総特集 戦後民衆精神史

鶴見俊輔	集団が動きはじめる時
吉本隆明	戦後のはじまり
金時鐘	人々のなかで
道場親信	下丸子文化集団とその時代
山本唯人	サークルと労働文化

移民が移民を呼ぶ一植民地の記憶 その2

柳原一徳

父方の実家がある山口県沖家室島で、1914（大正3）年9月から1940（昭和15）年3月まで通巻158号にわたり、『かむろ』という雑誌が発行されていた。その誌面に頻繁に登場する木村勇治郎は植民地支配下の朝鮮京畿道（キョンギド）開城（ケソン）にあって、高麗人参で財をなした実業家で、朝鮮総督府との関わりも深かった。

『かむろ』創刊号（1914〔大正3〕年9月）の「消息」欄は、「見よ！ 本島が、如何に多くの海外奮闘者を有するかを。見よ！ 本島人が、如何に海外に発展しつつあるかを」、という見出しを掲げ、島内外456人の動向を伝えている。木村勇治郎については「朝鮮開城（かいじょう）府、人参栽培兼材木商、本島ノ成功者、令息一人」とある。ちなみに戦後早くに亡くなった父方の祖父柳原幸一については、「沖家室郵便局ニ勤務シテ居マス、事務ハ敏捷ニ丁寧ニトイフ通信省の主義ヲ其實行シテ居マス」とあって、当時島で暮らしていたことがわかる。

祖父は木村勇治郎の連れ合いの弟にあたり、木村家の金庫番として大正の終わりごろ一家で朝鮮に渡った。当時の『かむろ』の誌面には、ほぼ毎号にわたって島の動きを伝える「かむろ日誌」とあわせて、ホノルル、ヒロ、基隆（キールン）、群山（クンサン）、平壤（ピョンヤン）、奉天等々、移民先からの通信が掲載されており、移民が移民を呼ぶとでも云おうか、それが島びとの「海外雄飛」を加速させたであろうことは想像に難くない。『かむろ』第15号（1918〔大正7〕年5月）所収「開城通信」から、一部を引用する。

【頃来（けいらい）当地も頓（とみ）に春めきて、街頭の柳楊（やなぎ）、肌つやつやと青み来り、緑の草いつの間にか萌え出でて、近郊の農家の塙（かき）のあたり、黄なる蓮翹（れんせう）の花も見られし候。目下当地の新産物たる人参の植付時期にて、中田木村（引用者註一木村勇治郎）の両氏の如きは日々多数の部下を督励して、忙殺さるる有様に御座候。当地の人参耕作は内地の煙草と同じく、専売の下に、中々面倒なるものにて、植付より収穫迄、六年の長年月を要し、従って莫大なる資金を擁せざれば不可能の事なるが故に、当地在住多数内地人中人参耕作を為しつつある者は、僅に五六名に過ぎず候。而も此内にありて、中田木村氏は、最も有勢なるものに有之候。

・而して政府は其の収納せる人参を、紅参（こうじん）に製造の上三井物産会社の手によりて、唯一の需要先たる支那に輸出さるる次第に候。
・政府の紅参専売収入年額約三百万円を算し、各種専売事業中、純益歩合の多き事紅参の右に出づるものは無之、現今朝鮮総督府の主要なる財源の一に数へられ居り候。】

宮本常一の最晩年の著作『東和町誌』（1982年）には、こう書かれている。

【沖家室には古くから雑貨商が多かった。（中略）木村勇次郎（ママ）もその一人で、明治28年に開城にきて雑貨商をはじめ、30年には朝鮮人参の製造に成功してその販売をはじめた。さらに明治38年からは鉄道の枕木供給を請け負い経営を發展させていったが、日本人がふえ、和風建築が盛んになるにつれて瓦の不足をきたしはじめたので、佐連（され）から瓦職人をまねいて瓦製造をはじめた。このように一人の成功者が出ることによって、また多くの渡航者が出てきたのである。（640-641頁）】

続いて、『かむろ復刻版 第2巻』（小社刊、2002年）の解説文から引用する。

【一方、朝鮮半島へは1910（明治43）年の韓国併合により朝鮮でも内地と同様に、自由に商工業が行えることとなり、沖家室からの移住者は、材木商や米穀商、廻漕業、醸造業等、広く商工業を行っている。こうした商業移民が可能だったのは、沖家室が単に漁業だけの島ではなく、漁業を背景に商工業も盛んで、商工業に通ずる者が多かったからである。（森本孝「大正五年一月発行『かむろ 第六号』に見る沖家室島民の移民動向」）】

当時の島が、今の感覚でいう「僻地」ではなく、様々の産業が入り組んだ都会的な場所であったということがわかる。周囲わずか1里の狭い島に収まりきらないエネルギーは外へ外へと向かい、海外拡張の国策とも相俟って島びとの「海外雄飛」へと繋がっていった。その背景には、遠く旅に出ることを苦にしない島びとの気質もあったわけで、そういった諸々のことが『かむろ』の誌面によく表れている。と同時に、植民地支配者としての一面も垣間見える。『かむろ』が、島の生活誌や産業、移民だけでなく、終末的な戦争へと突き進む

この時代と島との関わり合いを知るうえでの第一級の資料たる所以、である。

身内話に戻す。

木村勇治郎の娘を、私らは梅子おばさんと呼んでいた。当時東京で流行っていたパーマメントをあてするため、開城から列車と船を乗り継いで東京へ行ってきたとか、家では朝鮮人の下男下女が何でもしてくれたので、風呂では自分で身体を洗ったことがないとか、周防大島の対岸の町、柳井の家を訪ねていくと、今からは信じられないような話を色々聞かせてくれた。妹はそれをさして「お伽噺」と呼んでいたが、このような話がまったく厭味に聞こえないところが、生まれながらのグベンジャ（大島の方言で「お金持ち」の意。分限者が誤って定着したものと思われる）たる所以なのだろう。

昔の職場の先輩である川瀬俊治さんが、植民地支配下の朝鮮に生まれ育ち、開城とソウルで小学校の先生をしていた池田正枝さんの開書を一冊にまとめた時、編集を手伝ったことがある（『二つのウリナラ』解放出版社、1999年）。子どものころ小遣い10銭握りしめて、というくだりが貨幣価値から考えておかしいののではない、池田さんより5つ年上にあたる母方の祖母に訊ねた。小遣いなんて2銭貰えたらいい方だ、お年玉奮発して10銭、現金ではなくメリンズと呼んでいた襦袢の袖口をもらうこともあった、信州は貧乏だったからね、と聞いた。当時植民地朝鮮にいた日本人は、よっぽど羽振りがよかったのだろう。

そして奇遇と云おうか、池田さんが1940（昭和15）年4月から43年10月まで勤めていた開城満月国民学校は、父方の実家と同じ町内である。池田さんも2006（平成18）年の暮れに亡くなった。植民地支配と戦争の時代が、こうしてどんどん遠ざかっていく。

2003（平成15）年の正月3日。沖家室島の旧木村旅館、すなわち梅子おばさんの実家が全焼した。島では明治以来最大といわれた大火だった。かつて佐連からの渡船が発着していた洲崎の港の縁に建つ木造3階建の、田舎としては立派な建物だった。戦後の引揚げで、開城で築いた財を失ったとはいえ、それでも持ち帰った着物などが僅かばかり残っていたというが、これですべて灰になった。そして何たる皮肉、火事から10日後、梅子おばさんは自宅の火事で亡くなった。

10年ほど前に父が訪ねていった折、私の著書を土産に手渡したら「ついにウチの家から作家が出たか」と、そして後年、島にかかわる仕事を手がけはじめた私が、廃刊から60年を経て甦った『かむろ』の復刻版第1巻を届けに行った折には、

「お父さんが載っている」と仏壇に供えて喜んでくれた。亡くなるひと月ほど前、周防大島から下関へと向かう途中、どうしても読みたいからといって頼まれた本を届けに行くと留守だったので、玄関に置いて帰った。それは白洲正子の本だった。戦後の一時期貸本屋を営んでいたこともあり、徳山のマツノ書店の先代とも懇意だったと聞き、一時期、本の読み過ぎがもとで目が見えなくなったこともあるという。ひとつの図書館のような人、そのすべてが灰になった。

ところで、父方の実家は1943（昭和18）年に朝鮮から沖家室島に引き揚げてきた。海に面した離れの2階に下宿していた、当時の沖家室国民学校の校長先生の息子がそれを見て「お母さん見てござれ、お局様のお通りぢや」と云った。「お局様」とは父方の祖母、タツヨであり、文明堂のカステラの簍（今もそうかな？）みたいな感じでお女中さんが後ろから日傘をさして大名行列よろしく歩いてきたのだという。

昭和天皇と同日だった父方の祖母といえ、朝鮮料理を思い起こす。キムチ、ナムル、大豆もやしにトック等々、父は帰省の度に、両手に持ちきれぬほどの朝鮮料理の食材を葺合の大安亭市場で買い込んで、神戸から西へと向かう山陽本線の急行列車に乗り込んでいた。父方の一家、就中祖母にとって朝鮮料理は、過ぎ去りしよき時代の記憶でもあったのだろう。

先にも記したが、木村家は敗戦後のどさくさで引き揚げが遅れ、植民地朝鮮で得たすべての財産を喪った。島の旧家として栄えた父方の実家も、こう云っては怒られるかもしれないが戦後は没落した。「移民先で儲けたカネが身に付いた者はおらん」と、母方の祖母がよく話していた。これが実感というやつか、母方の実家は父方と違って〈由緒正しきど貧民〉だった。

木村家や父方の一家だけでなく、島びとの「海外雄飛」の蔭で、植民地支配のもとでどれほどの人が泣かされてきたのか——そのことを思わずにはいられない。戦前戦中の朝鮮や台湾での暮らし向きは、いまま島の年寄りたちのよき思い出話である。それはそれで仕方ないのかもしれないが、戦後世代である私たちまでもが単なる〈思い出話〉の域にとどまっているようでは先はない。

北朝鮮はケシカラン、それはごもつともだ。でも、こんな難儀な国、南北分断を生み出したのも、ほかならぬ私たち日本人だ。世襲による金正日体制の恐怖政治なんて、戦前の絶対天皇制大日本帝國のコピーではないか。テレビのワイドショーなど〈北の脅威〉と〈拉致事件〉、それに〈北の恐怖政治〉を煽るばかりで、〈飢餓に苦しむ北の

人々を救うにはどうすればいいのか・何ができるのか)〈南北統一に向けて、これから日本はどうすべきか〉という視線はない。電波を流す側・受ける側の、この無責任極まりない傍観者の態度は

断じて許すわけにはいかぬ。北朝鮮を「怖い」と云ったりネタにして嗤ったりするのはたやすい。だが、それに嵌ってはいけない。植民地支配者の後裔として、切に思う。

太田省吾さんのこと

季村敏夫

今年の7月、劇作家の太田省吾さんが亡くなった。最後の著書となった『なにもかも』(2005年11月・五柳書院)を手にとる。夏から秋、何度か手にとり、想い起こしていた。うしなったこと、さまざまな未遂、しくじったことなどを。

太田さんが主宰する劇団転形劇場の沈黙劇「小町風伝」。その関西での初公演を実現すべく、京都時代の友人岩脇正人が倉本修らと奔走したのは二十数年前、80年代のことだった。そのときばかりは、堺の瀧克則を介して、太田さんと初めての挨拶をかわすことができた。それから関西で公演される転形劇場はほとんどすべて足を運んだ。ふしぎなことに、その度に同志社の恩師である笠原芳光さんに劇場内でお会いできた。

うしなったさまざまな夢、こんなふうにつぶやくことを、だが今は、かたく禁じようとおもう。「さまざま」とは何なのか。一つひとつの様態。そこに疼きがある。太田さんは、「なにもかも」とは何なのかと自問していた。なぜ、なくそうとするのか。「なにもかもなくしてみようんだよ」、「『更地』という劇のなかの台詞。ぼくは、城跡のある伊丹市の会館で耳にした。会場にはイカロス書房をたたんだ丸一忠雄も居た。舞台は、白い、大きなシートで覆われていた。泰西でいう白く塗る墓、スーパーフラットな更地だった。棲家をなくし、茫然としている神戸の老人たちをおもいながら、ぼくは観ていた。所有するものを取えてなくそうとする試み。ゼロ地点で思考する。すると、なにもかも、毎朝しゃがむ便器や樹木や風のそよぎまで、今までとは違って感じられる、それが太田さんのメッセージだった。しかし、憔悴した老人たちに向かって、そんなことはいえなかった。「ありがと、なんや、さっぱりしたわ」、自衛隊が設営した仮設のお風呂を出たときの、ばあちゃんのつぶやき。地震の後の火事でじいちゃんを亡くした人の声がのこっていた。

太田さんの仕事は、いつも深い思考を促す。おもいがけない発想から問いが現われるからである。「人はどういふことがしないであられないだろう。人が何としてもさうしないであられないことは一

體どういふ事だろう。考へてごらん」、宮沢賢治の問いだ。子どもたちは応える。【人はほんたうのいいことが何だかを考へないであられないと思います】、賢治は目をつぶる。目頭が熱くなる。何をなすべきや、いかに生きるか。この種の問いかけに潜む欺瞞を太田さんは見逃さない。善意は他者を救うか、人との関係をむごい状態にする場合もある。そんなことにも気づけず、煽りたてる人びとが地震の後に出現した。

【人の一生には根拠も意味もない。しかし日々の生には意味があるのです。】、ヴラジミール・ジャンケレヴィッチの言葉である。太田さんはジャンケレヴィッチにこたわった。この本でも何度も引用され、思考を深めている。【日々の生は大事だが、生の全体には断じて意味はない】、同じ内容だ。瞬間のたいせつさ。今ここに共時的に流動する過去と現在にさらされつづけよ、ぼくはこんなふうにとめ直している。

最後の著書『なにもかも』に、「震災に何を見るのか」という一文がある。これは、たまたまぼくが編集したアンソロジー『生者と死者のほとりで一阪神大震災・記憶のための試み』(人文書院)に寄せられたものだ。六月の雨に濡れ、滲んだ文字が忘れられない。速達で届いた便り、そのなかに太田さんの原稿が入っていたのだが、ドアに斜めに差し込まれていた善福寺からの封書は梅雨の湿気を吸って少しふくらんでいた。

「震災に何を見るのか」で、太田さんはプラトンの『パイドロス』から引用していた。夏から秋、古い文庫本を引っ張り出し読んだ。再読し、太田さんの引用の意図が改めて伝わった。美しい夕暮れにこころひかれ、おもわず立ち止まっても、農夫はうなだれて家路につくだろう。しかし足どりはというと、後ろ髪をひかれる感じ、ほんとは、夕暮れに沈みこんでいたのだ。二千年以上も前の古人のおもいをフーテンの寅さんに託し、21世紀の詩人はこう歌っている。

【あるときはコスモスゆらぐ谷間に喘ぐ汽車を／あるときは夕映えの入江を滑る釣り船を／あ

るいはあるいはもうあることだけで嬉しくなる
景色を／眺め暮らしそうな場所に 帽子を被っ
たさすらい人は居る】（相澤啓三「車寅次郎
の神話」、「たまや」4号・2008年2
月）

あるいはあるいは、このように距離をとらねば、
つぎの言葉を紡ぐことができない心中を注目して
欲しい。そこにあることだけで、ただもう訳もな
くふるえる風景のなかに佇むとき、太田さんは天
かけていた。

今春刊行予定。「震災・まちのアーカイブ」渾身の軌跡、合本瓦版。

『阪神大震災・瓦版なまず集成 1998～2008』

今回は公立図書館や資料館納付用に刊行されます。
購入を希望される方は下記までご連絡ください。刊
行次第お送り致します。郵送料のみご負担願います。

電話 078-781-8891

078-681-6231

メール kioku-tk@kxa.biglobe.ne.jp

2008年夏、満を持して上梓

笠原一人・寺田匡宏編『記憶表現論』（昭和堂）

序章 記憶と表現

笠原一人・寺田匡宏

第1章 戦争が終わって転々とするものについて—美術（史）という記憶装置が隠蔽するもの

木下直之

第2章 エチカ、地上の声—文学という記憶装置が隠蔽するもの

季村敏夫

第3章 記憶のエコノミーに抗して—映画「ショアー」とワルシャワ・ゲットー

細見和之

第4章 コール&レスポンス、あるいは友愛の記憶—記憶装置としての音楽

港 大尋

第5章 記憶装置としての写真—写真は何を記憶するか

宮本隆司

第6章 メモリアルを超えて—建築記憶表現試論

笠原一人

第7章 記憶の複層域としての都市—都市に潜む記憶を掘り起こす

宮本佳明

第8章 ミュージアムの場における歴史表現のオルタナティブに向けて

寺田匡宏

学術出版・昭和堂

〒606-8224

京都市左京区北白川京大農学部前

電話075-706-8818／FAX075-706-8878

<http://www.kyoto-gakujutsu.co.jp/showado/>

古本ノ読ミ方

内堀弘

仕入れた古本を整理していたら、一冊に「江東文庫」のシールが残っていた。シールというのは古本の売値を記した紙片のことで、売れたとき

に値段の部分を切り取るから、屋号や住所を記した部分が本に残る。中には素敵なデザインのシールもあるが、江東文庫のそれは白紙に屋号を赤で印刷しただけのそっけないものだ。

江東文庫の石尾さんと私は親子ほども歳が違っていたが、古本屋をはじめたのは同じ頃だった。

あの頃でもう六十近かったのだろうか。石尾さんは店を持たない通販の古本屋だった。昼間から酒の匂いをさせて入札会にやってくる、本を見るときはいかにも楽しそうだった。この人は戦前の大衆文学に精通していた。今でこそ人気のジャンルだがあの頃はほとんど注目されていない。子供向けの読み物とか探偵小説、時代小説、ときどきそうしたものを周りを驚かさすような金額で落札した。「ガキの頃、これが欲しくてね」、そんな言い方があの人の人柄のダンディズムだった。

いくつか古書展にも参加していた。余計なものは安く売れる。そう決めていたのか、午後になると棚の本はほとんど残っていなかった。二日間の会期を終えると同業者はバンやトラックで撤収するけれど、江東文庫は僅かに残った古い雑誌を風呂敷に包んで都バスで引き上げる。そんなふうに見えるものだ。自分を取り戻すように本を買い、余計なものは手元に置かない。でも、あの安さはどこか虚無的だったと思う。

下町のアパートで寂しい最期だったらしい。亡くなってもう十年、いやもっと過ぎていたのか。それでも「江東文庫にあった本」がこんなふうに不意に姿を現し、またどこかに紛れていく。

先月の入札会で、大正末年から昭和初頭にかけの映画館の番組案内を落札した。新宿の武蔵野館、赤坂の葵館、丸の内の邦楽座等々、こうした映画館が週刊で発行していた6~8頁ほどの小冊子で、それが150部ほどもあった。

実は映画のことは分らない。この中にもあった『嘆きの天使』が珍しいのか、それほどでもないのか、そういうことが私には分からないのだ。だが、表紙の斬新なデザインには眼が留まった。

たとえば葵館のものは大正15年の途中から村山知義が表紙絵を描いている。これがいいものだった。それまで、つまり村山が描く以前の表紙は特にどうということはないのだ。それは他の映画館も同じで、小冊子のデザインはこの頃から俄然面白くなっている。

そんな冊子の中に矢橋公麿の口絵を見つけた。矢橋は村山知義とともに前衛芸術誌『マヴォ』の

盟友だ。なるほど、大正アヴァンガルドの風は、最後はこんなところを吹き抜けていったのかと思う。

街頭で無料で配布された、それこそ吹けば飛ばすような紙ペラにも、街頭を吹いた風の気配は映っているものだ。あれこれの気配を重ねながら紙ペラも古本になっていく。

本は中身でしょ。そうかもしれない。でも、貼り付いた気配を読むのも、古本を読むことなのだ。

私は詩歌書を専門にしているので、仕入れた古い詩書の中に中村書店のシールをよく見る。渋谷の宮益坂を登った先にある詩書の古書店で、店主の中村三千夫は一九六八年に急逝した。まだ四十代だった。

私は神戸の黒木書店の主人からこの人のことをよく聞いた。黒木書店も詩歌書をよく揃えた店だったが、主人の毒舌の方が有名だったかもしれない。だけど、中村さんのことを話すとき、この人は本当に懐かしそうな顔をした。

中村さんは古本屋をよく歩いたそう。都内ばかりか地方の古本屋も廻って詩書を丁寧に蒐める。黒木書店にも年に何度かは顔を出したようで、突然に亡くなったそのときも神戸への切符が買ってあったのだという。

本は足で探すものだと、私もそう教えられた。初めて黒木書店を訪ねたとき、若いのによく来たと、毒舌の主人は笑って迎えてくれたが、「ここから西に行ってもうなにもない」、そうも言われた。めばしい詩書は黒木さんが買って、それがここにあるというのだ。

古本の市場に通い、古本屋を歩き、河原に石を積み上げるように在庫を作る。その本が散って、また探しに出かける。そういう「時間」を古本屋と呼ぶのだろう。私は古本屋が「場所」だとはなかなか思えない。

谷中の鶴屋の主人が、中村書店についてこんなことを書いている。鶴屋も詩歌書を漏らさず蒐めた店だった。

「今日も市場で、あなたのシールが貼られた本を見かけました。そんな本が如何に多いとか、私たちは驚異すら感じながら、決してそれを剥がしたりはしません。中村さん、あなたはそれら無数の本と一緒に、今も確かに私たちのそばで生き続けているのです」（『明治古典会通信』・昭和51）

本は器だから、「データ」とか「ファイル」とはちがって、くぐり抜けてきた時々々の気配がそこに残っている。気配を読むといっても、いつとき想いを巡らすだけのことだ。でもそう思えば、書

かれることのなかった時の断片、たとえば街頭を吹いた風や、潰えた夢や、もう誰も覚えていない

脈わいも、たしかに私たちのそばで生き続けているのだ。

深い深い深い息づかい

安水稔和

季村敏夫（聞き手）

一 安水さんの大学二回生、昭和26年のときの古本屋巡りですが、聞いていてうらやましかった。竹中郁の詩集を三冊買われたとか。『象牙海岸』『龍骨』、『動物磁気』、そんな話を前回伺いました。上海事変が勃発した昭和7年の12月に出た『象牙海岸』は第四詩集です。同じ年の8月、竹中さんは第三詩集『一匙の雲』を出しています。版元は鳥羽茂のボン書店。『象牙海岸』は長谷川巳之吉の第一書房。二つの出版社から、竹中さんは同じ年に詩集を上梓した。この二つの出版社が気になります。

ボン書房は第一書房のいわば対極に位置するとおもいます。第一書房の本はとにかく豪華版。天金、表紙は総革装。ヨーロッパ型の重厚な造本を目指していた。一方ボン書店の本は軽くて小さい。手の平におさまるくらい薄い本をつくっていた。重さと軽さ。だけど軽いが重い。竹中さんの『一匙の雲』もこんなに小さなものです。今日、紙見本をつくってきました。いとおしいほどの小ささ、カフカをおもいます。『和露句集』もちょうどこれくらいです。おそらく偶然でしょうが、竹中さんの仕事が、当時対極に位置していた出版社から一冊ずつ出されたこと、このこと、じつに興味深いとおもいますが、どうだったのでしょうか。

安水 これはね、私は実物を仔細に測ったりしました。12cm×8.5cm。竹中さんのお宅からお借りしてきて。先に『一匙の雲』の内容のことを話します。『竹中郁詩集集成』（2004年・沖積舎）を編集したとき、これまでの書誌的な間違いを少し直しました。足立巻一さんの編集された『竹中郁全詩集』（角川書店）では、『一匙の雲』は二つのかたまり、12篇の作品と5篇の作品でした。この全詩集は竹中さんの没後一年の1983年3月に出ています。私の考えは前半のかたまり12篇はそのままですが、後半はどうも5篇ではない。『一匙の雲』は先ず「留針で捕へた煤ら」というデッサン集が12篇あります。それから後半は「リトマス氏感覚反応紙」という章題で先ず無題が一篇、それから「樹」

「モンスウリ公園」「エツフェル塔」「子供」と続き、その後タイトルのない作品になります。とくに後半の「リトマス氏感覚反応紙」の作品が面白い。なぜ面白いかを展開すると詩集の性格がよくわかる。「子供」とその後の作品を足立さんは一つにとらえていますが、作品を細かく見ていくと、一つ一つ頁割りしてあるそれぞれ別個の3篇であることがわかる。だから「リトマス氏感覚反応紙」は8篇になる。読み取りの難しさです。

さて詩集の形ですが、横長横綴28頁の薄い、手の平にのるような、風が吹けばふっと飛んで行きそうな感じの小さな小さな詩集でした。

一 当時の古本屋で見かけましたか。

安水 いやいや。古本屋では竹中さんの詩集はこの三冊だけ。つまりね、竹中さんはヨーロッパから帰ってきてからも旅の時間はずっと続いていた。戻ってからも。昭和7年、第一書房から『象牙海岸』をまとめた。その前に『一匙の雲』を出していますが、竹中さんはこれをパリの思い出、パリのお土産といっている。Souvenirs de Paris というフランス語の一行をそっと入れていますね。詩集の出だしには序詩として、「溶けぬうちに／このアイスクリームを召上れ／ピアノに合はせて」。こんな短詩が置かれています。そして詩集の最後は当時のシュールな感覚で、「おやすみなさい」の一行です。この作り方を見ると文字通りパリの思い出だとうなづける。小さな小さな詩集。小部数だったとおもう。『象牙海岸』の方はシュールリアリズム全盛のバリで学び、それこそ満を持して出版したもの。シネ・ポエムという新しい試み、そのシネ・ポエムのかたまり、それから旅の詩のかたまり、それから初期の作品から一歩も二歩も前進した思惟する詩が収録されている。ところが『一匙の雲』は『象牙海岸』に入れにくい作品、つまりパリの私的な思い出に限っているから、作品も断片的、映像的な感覚で編集されている。造本も小さ

なもの、冊数も小部数。古本屋に出ているとしても見つかれへん。古本屋さんから古本屋さんをまわっているうちに、どこかへまぎれてわからんようになる(笑)。

- まさに散逸ですね。足立巻一さんの『親友記』(新潮社)に、神戸詩人事件で検挙される亜騎保(月井奈都夫)のことが出ています。湊川署に連行されるとき、リヤカー一杯に積まれた同人誌、蔵書、ノート、原稿、日記を目撃します。押収されたそのなかに、ボン書店の『一匙の雲』と春山行夫の『シルク&シルク』があったが、釈放後返却されなかった。権力が処分したという記述がありました。が・・。

安水 『一匙の雲』の現物は竹中さんのお家で初めて出遭いました。今回、足立巻一さんの編集されたもののなかの明らかな事実誤認とか、以後新たに判明した事柄などを補筆訂正し、「解題」は、「足立巻一編、安水稔と補訂」としました。竹中さんはご自分の全詩集などの企画があったとき、『一匙の雲』の作品のほとんどを削りました。

- ほとんど削除ですか。

安水 そうです。だが詩人の気持ちに私にはわかるような気がする。竹中さんの詩の成り立ち、本にするときの手つき、これがよくわかる。雑誌に発表する場合にもある手つき、ある手触りがある。一つの作品を「私」と「彼」と二つの視点で二つの詩を書く。「私」の視点で書いた作品をある雑誌に発表する。もう一つ、「彼」の視点で書き、別の雑誌に発表する。こういうことが一度ならずあった。同じモチーフなのだが、雑誌発表時には視点を変えた二つの作品を別々に。そのうちのどちらかが詩集に収録される。

竹中さんは自己批評がきつかった。たとえば『全詩集大成・現代日本詩人全集』第13巻(昭和31年・東京創元社)では、内容的に不満であるという理由で『一匙の雲』を削除した。また亡くなる直前に全詩集の自選を試みたときも、「序詩」と「樹」の2篇を除き、全篇削除を指示、足立さんを困らせたと言いました。

- 『一匙の雲』はほんとうにマイナーな、私的な場所から記憶へ捧げられた、この世への置き土産、そんな感じだったのですね。

安水 そうです。青春の置き土産とでもいいいます。詩集自体がそうだし、詩集の作り、そのあとの詩集の運命をおもうとこれはプライベートな作業だともいいます。

- プライベートプレス、いやあうれしいなあ。だからこそボン書店の鳥羽茂でなければならなかった。本の運命、このことばが出て、今日伺ってよかった。ありがとうございます(笑)。

安水 全詩集のときは削るが、竹中さんのおもいはどこかに隠れていて現れる。他の詩集を読んでいた出遭う、なんやこんなところで、そんな感じですね。

- ぼくが、なんでこんなことにこだわるかというと、たまたまこれまで、震災一次資料の収集分類整理の活動に関わってきました。そこでつくづくおもったのは消失、書かれたものの散逸。それと、ものに関わる記憶の行方です。竹中さんが『一匙の雲』の出版を依頼したボン書房の鳥羽茂ですが、彼は生まれた年も場所も、亡くなった年も場所も不明です。詩人を目指し上京、仕舞屋で毎日活字を拾う印刷工、だが存在そのものがボエジイだったともいいます。これぞとおもう詩人、竹中郁や北園克衛や春山行夫の詩集を奥さんと二人、まさに血を吐きながら手取りで出しつづけた。最後は結核で亡くなっているらしい。奥さんも結核で死んだ。内堀弘さんの労作『ボン書店の幻』(白地社)にくわしい。この本は京都の土岡忍さんの最もすぐれた仕事「叢書レスブリ・ヌボオ」シリーズの一冊。ぼくらの知らない、戦時下のモダニズム詩人の動き、いろんなことを内堀さんから教えられました。今日はボン書店の詩集、安西冬衛の『亜細亜の鹹湖』と阪本越郎の『貝殻の墓』を持ってきました。どちらも昭和7年出版です。小さいでしょう。『一匙の雲』は、この『貝殻の墓』よりまだ小さかった。

安水 ほんとに何か、プライベート、そんな感じだった。

- 本の薄さは鳥羽茂のコンセプトでした。

安水 250冊限定、25銭。ああ、君本昌久さんと出した『兵庫の詩人たち』に『一匙の雲』の書影を入れました。これです。

- 詩集の表紙の写真はパウハウスに関わったモホリ=ナギ。鳥羽茂のセンスは凄い。

安水 それで思い出した。面白いことに、これは足立さんが解題で書かれていますが、北園克衛が雑誌「文学」第5冊（昭和8年3月）で『象牙海岸』を酷評、『一匙の雲』をより秀れたものとして評価しています。その感じは私にもよくわかる。北園さんの造本も白い硬いアート紙を使ったり、やわらかい和紙を使ったり独特で、丹念でした。

— 北園克衛の詩集『若いコロニイ』もボン書店です。竹中さんが当時無名の青年だった鳥羽茂に造本をゆだねたこと。ときめくような西欧体験、ご自分の私的な記憶をお土産とした小さな作品集をゆだねたことは実に貴い、こころふるえるおもいです。

安水 春山行夫とかのライン、彼の紹介でボン書店を知ったのかもしれない。春山行夫とは関西学院を卒業して東京へ出て約半年間下宿していたときに出遭っています。その春山や近藤東の誘いで昭和3年9月の創刊号から「詩と詩論」（厚生閣書店）に安西冬衛、三好達治らと共に同人として参加しています。竹中さんは外遊先のヨーロッパから「詩と詩論」やいろんな雑誌に次々と作品を送っています。パリの思い出を詩集に作らへんか。そうやなあ、作りたいわ。そんな春山さんとの交友があったとおもう。

— 内堀さんによれば、鳥羽茂は近藤東経由で春山行夫や北園克衛を知ったらしい。近藤東と竹中郁とは同人誌を送りあったりする仲、深い親交がある。

安水 それで次はこれなんやけど、竹中さんの戦争中の詩集『龍骨』。これもあの当時古本屋で買った詩集。

— 戦時下に竹中さんが企画編集した大阪の湯川弘文社の「新詩叢書」（17冊）。

安水 そうです。装訂も竹中さん、沖繩から帰って帰った手拭の図柄をカバー絵にしている。小野十三郎の『風景詩抄』、安西冬衛の『大学の留守』、福原清の『催眠歌』、笹澤美明の『海市帖』、津村信夫の『或る遍歴から』。これらすべて当時古本屋でもとめたものです。あつ、それからこれ『象牙海岸』。

— 第一書房の「今日の詩人叢書」シリーズ、堀口大聖とともに長谷川巳之吉が力を入れたもの。

安水 当時衝撃だった三好達治の『測量船』もある。田中冬二の『海の見える階段』、菱山修三『懸崖』、それに『象牙海岸』。

— これは岩佐東一郎の『航空術』ですが、航空機へのつよい関心が当時の詩人にありましたよね。稲垣足穂は典型ですが。

安水 稲垣足穂は大阪の船場生まれですが、少年時代は神戸。早くから活動写真や飛行機を好んだ。12歳のとき、須磨の天神浜でアメリカ人の飛行家アットウォーターの水上飛行を目撃し感動した。ちなみに稲垣足穂は関西学院普通部に通っていました。山村順の詩集『空中散歩』（旗魚社・昭和7年）には「ナマリ色ノ飛行」という搭乗体験を書いた作品があります。

— さて『一匙の雲』は昭和7年刊行ですが、昭和5年、神戸モダニズムの系譜をひく亀山勝の詩集『青草』が出ています。他に、伊藤整や稲垣足穂と親交のあった衣巻省三。衣巻の詩集『足風琴』（昭和9年）はボン書店から出ています。また詩集『生活の一章』（昭和7年）の水町百窓や山下豊次郎のことに安水さんは言及されています。そういう話を伺いたいのです。橋本実俊の詩集『街頭の春』もありますが、ここらは君本昌久さんとの共同作業『兵庫の詩人たち—明治・大正・昭和詩集成』（君本昌久・安水稔と編・1985年・神戸新聞出版センター）でも展開されていましたが。

安水 『兵庫の詩人たち』の前に前身ともいうべき仕事があります。蜘蛛編集グループ（中村隆・君本昌久・伊勢田史郎・安水稔）で編集した『100年の詩集—兵庫・神戸・詩人の歩み』（日東館・1967年）です。君本昌久さんと雑誌『蜘蛛』をやっているとき、せっせっせと彼は詩の年表（刊行された雑誌、詩集）を作っていました。『100年の詩集』にも、さらに増補して『兵庫の詩人たち』にも参考資料として添付してあります。毎日曜日ここに集まって二人で討議しました。『兵庫の詩人たち』に収録した作品の原本すべてを私たちが持っていたということではありません。二人の蔵書を出しあった。間島一雄書店の間島保夫さんにも頼んだ。そうしたら古本市で見つけたんでしょね、こんなあったと持ってきてくれた。もちろんぼくも古本屋で探した。図書館でも探した。宮崎修二郎さんのお仕事も参考にさせていただいた。他に伊原秀夫さん、当時「のじぎく文庫」の仕事を

していた伊原さんにも手伝ってもらった。彼は私たちが関心ある詩集の詩をコピーしてくれ、実務面のほとんどを担ってくれた。難渋をきかめた詩人詩集の探索のすえ、100人を超える詩人たちの詩集を読みあげて、そのうちから一書五十人をやっと選び抜き、詩集156冊から356篇の作品を収録することができた。一書というのは巻頭に載せた『無題讃美歌集』のことです。

- 一 間島さんか、なつかしい、平成16年に亡くなった。神戸空襲の記録に関わり、福田知子さんの「めらんじゅ」同人。伊原秀夫さんは尼の太物町で「風来舎」という出版社をやっている。

安水 そのときなんやね、亀山勝とか水町百窓、衣巻省三とかの詩集を初めて読みました。現物を何とか手に入れて読んだ。この三人みんな面白かったが、とくに水町百窓の詩集『生活の一章』は面白かった。昭和初年、当時の詩とはおもえない現代性があつた。当時の詩人は既に「詩と詩論」なんかを通過しているわけで、こういう感じの作品が現れても当然かもしれない。

- 一 こういう一群が神戸に現れ出たということ、何か根拠のようなもの、あるのでしょうか。

安水 あると思いますね。広い意味での神戸モダニズムが豊かに多くの詩誌や詩人を育てた。同様に反モダニズムを重層的に活性化させたと思います。亀山勝さんは明治36(1903)年新潟県高田市で生まれていますが、亡くなった年はわからない。詳しいことはほとんどわからない。

- 一 どうやって明らかにしていくのですか。

安水 とにかく資料を丹念に読みといていく。毎日曜日、君本昌久さんと二人ここに集まり、ときに伊原さんが加わった。新しい資料が手に入った、じゃあ一緒に読もうか、読んだ詩集から情報がちらちらと出てくる。それを頼りにして辛づる式につなげていく。今ではインターネットで簡単に探せるでしょうが、当時は探し出した活字が頼りだった。片っ端から読んでみると、どこかにヒントが必ずある。亀山勝さんの場合、いろいろ調べていて神戸市電気局勤務とわかった。住所が須磨上堀ノ内町とわかった。そういうかたちで少しずつ書き留め書き加えていった。竹中さんと親交があったということもわかってきた。たしか、

詩集『青葙』を読みだどっていったとおもう。この人の作品も洒落ていて、竹中郁をもう少し内気にしたような感じ。控えめだが、イメージのつかみ方が独特。やわらかく確かな感性から生み出されたことばです。この詩集の跋文を竹中さんは滞在先のバリから送っている。

水町百窓、この人になると、本名藤井秀雄とわかったが、生年没年出身地不明。ほとんどわかりません。残った作品をたどるしかない。作品は驚きでした。ええつという感じ。この世代、光本兼一(1910~1934)とか九鬼次郎(1914~1940)とかは生活から発する熱気のようなものがあるが、水町百窓はまったく違う、言葉の出でくる場所がね。だからええつとおもった。詩集『生活の一章』は「詩乃家」から出ている。とにかく君本さんと共同作業のなかで多くの詩人に出遭い、多数の詩集を読んだ。註1

- 一 神戸モダニズムの鉱脈を探り当てた画期的な仕事、でもその後、誰もひき継いでいない。

安水 神戸、兵庫という一地方、地域の文学の動きのようだが、そうではない。詩人たちの残した作品を読んでいくと日本の詩全体に届いている。『兵庫の詩人たち』は復刻に値するとおもいます。

- 一 ぼくは、安水さんと君本さんが発掘した後のひき受け、それが未遂であることは問題だとも思います。『兵庫の詩人たち』の年表には足徳とも交友があり、19歳のとき神戸から上京、佐藤春夫を驚嘆させた石野重道の『彩色ある夢』という重要な詩集がなぜか抜けています。補筆し、何とかもう一度とおもいます。

安水 水町百草も詩集から主として情報を得た。『生活の一章』には佐藤惣之助が序文を書き、山下豊次郎が跋文を書いている。「水町君といふインターナショナルな神戸の港が出てくる。神戸へゆく」と水町君の白い姿に接することが出来る」、これは佐藤惣之助が書いた『生活の一章』の序文。竹中さんとは違うモダンボーイの姿が目につく。奥付に住所がある、熊内橋通5-35とある。情報がとれた、それを後の人が生かしてくれたらそれでいい、そういう感じだった。山下豊次郎ですが、この人の作品は探せなかった。水町百窓の跋文を書いたことは確かめたが、とにかく情報量が少なかった。

— 橋本実俊はどうですか。

安水 くわしくはわからない。第一詩集が『地平の春』（大正8年）、第二詩集『街頭の春』（大正15年）が竹中さんの海港詩人倶楽部から出ていることくらいかな。

— 鳥羽茂ほどではないにしても、痕跡の少ないひと、そういう人の資料を探すのは大変ですね。ひょっとすると痕跡そのものを自ら消していたかもしれませんから。

安水 同人雑誌の編集後記やら詩集のあとがき、葉、ちょっとした書き込みがヒントになり、そこからたどることがありますが限られています。とにかくわかったことはすべて書き留めておく。書き留めておけば、あとで何かのことで役にたつだろう、役立ててもらえるかもしれない、そんな気持ちですね。水町百窓、宵待ち草みたいでしょう、名前が（笑）。ところがこの詩集の詩のタイトル、「物質の上の物質現象」とか「落下する物質」とかすごい。ことばはシャープで硬質です。衣巻省三、この人がまた面白い。『こわれた町』（詩乃家出版局・昭和3年）と『足風琴』（ボン書店・昭和9年）という詩集があります。佐藤春夫門下で稲垣足穂と親交があった。足穂とは関西学院中等部で同級だった。大正の末期まで、須磨寺、西代、上祇園、会下山などに住んでいたらしい。後に小説を書き、詩から小説へ移った。「けしかけられた男」（『翰林』）が太宰治や高見順、外山繁らとともに第一回芥川賞（昭和10年）の候補作になり、そのときは石川達三の『蒼氓』が受賞していますが。衣巻の詩は都会風のアイロニーとウィット作品。適当に抒情的で、適当にエロチックで（笑）。イメージのはっきりした作品です。

— フォークシンガーの高田渡、亡くなりましたが、衣巻省三の「アイスクリーム」に曲をつけて歌っていましたね。註2

安水 『兵庫の詩人たち』は何とか復刻させたい。あっそう、柳田國男なんやけど、『兵庫の詩人たち』には「夕ぐれに眠のさめし時」など11篇収録しましたが、さっきいった『100年の詩集—兵庫・神戸・詩人の歩み』のときは掲載を断られた、奥さんに。本人が希望しませんでしたので、詩はとにかく伏せておきたいと。筑摩書房の『定本柳田國男集』、昭和37年から始まった全36巻には柳田國

男の新体詩は収録されていなかった。柳田さんが生きておられるところから刊行されたので本人が若い頃の作品の収録を峻拒した。ところが筑摩書房が次に新編という形で柳田國男集を出したときには入った。それまでは同じ筑摩書房の『明治文學全集』第60巻明治詩人集（一）で、あるいは『日本現代詩大系第二巻創生期下』で、「野辺のゆき」や「野辺の子草」の一部を読むしかなかった。『若葉集』と同じ時期に書かれた柳田國男の詩の全貌が読めたのは『新編柳田國男集』が初めてだった。あつた、だからもういいやと思って許諾を求めるとお許しが出了。こういう一つひとつの作業が大変だった。そのとき触った詩集、ここに収録していないものの方が多い。コピーした作品がダンボールひと箱分、この家のどこかにある、確か屋根裏部屋（笑）。作品の運命というようなことを考えるとね、いま生きている私たちが未来の私たちにどう伝達するのかという問題ですが。なかなか届かないのだから何かの具合でふっと届く。そういうことを夢見ます。

— 『定本柳田國男集』は評判がもう一つ、谷沢永一さんなんか空前の醜態、編集があまりに杜撰なのでやり直せとずっといっていた。

安水 『兵庫の詩人たち』の編集後記で、【なお、神戸詩人事件に関する作品を収録することに留意した。竹内武男、小林武雄、亜騎保の作品すべてと岬紘三の「戦役」「凍花信」は「神戸詩人」所載のものである。】、こう書きました。こういうところに編者である私たちのおも入れがある。つまりこれはアンソロジーなんだけれど、それでいいわけなんだけれど、作品を収録するに当たって、当時の時代との関わりという意味で「神戸詩人」に載った作品は載せる、はずさないという方針があった。もうだいぶ忘れてもたけど（笑）。

— 時代と詩精神ですか、いやあ逆に段々と記憶がよみがえってきたのでは。

安水 神戸詩人事件に限らず、収録詩の当時の文芸思潮とその時代との関わりを強く意識した。あの当時のおも入れ。何か、生かせるようなかたちがあればねえ。

— とにかくエネルギーがないと出来ないですね。

安水 それはもう、日曜日ごとにこの家で一升瓶抱え、飲んで議論し、気がつくと日が暮れて(笑)。

— そういう友情をふくめた熱意がないとまず出来ない、こういう仕事は。編集が済んで君本さん、真っ直ぐ帰れたんですか。

安水 高取山麓の山道、帰れたか、心配で電話した、次の日の朝にね(笑)。その日は朝まで長田の町で飲んだくれてるやろから(笑)。一色醒川とか座古愛子なんか今では忘れられていますが、一色醒川は神戸教会、座古愛子は神戸女学院で活動しています。明治初期のキリスト教に深く関わり、すごかったようですね。この二人の詩集も二階のどこかにあります。

— そうですか、ありますか。神戸は宗教都市で、シナゴークやモスク、ギリシャ正教やジャイナ教の寺院もあります。神戸教会や山本通りにあった神戸女学院の果たした文化的な役割は大きいですね。さて鳥羽茂と神戸モダニズムとの関わりですが、細い糸でつながっているみたいですね。内堀弘さんの本を読んでいると、静文夫という名前が二箇所出てきます。鳥羽は引越して通知を葉書で神戸の静文夫に出している(『ボン書店の幻』103頁)ところから推定できます。

安水 ええっ、静文夫さん、その方はよく知っています。十数年前、遺稿詩集に跋文を書かせていただいたことがあります。探してきます。ありました、これです、詩集『天の毘』です。
註3

— 三浦照子さんの編集、阪神大震災後ずっと被災マンション問題で闘ってきた三浦さん、現在福井久さんと同人誌「風神」を出されています。探してすぐに本が出てきたということ、何や意味あり、ですね(笑)。亡くなったひとから呼ばれているよう。文庫版でいいから、『兵庫の詩人たち』から作品を抜粋し、その後新たに判明したことなどを書き加え、君本さんや安水さんの仕事を何とか背負い直さねばならない、ほんとうにそうおもいました。それでは今日はこのあたりで。

安水 なにゆうてんの、やろう。エリオットののこと、続けてやりましょう。

— 大丈夫ですか。

安水 大丈夫。

— では戦後の荒地ですが、安水さんは卒論にエリオットを選ばれました。エリオットはご承知の通り、第一次世界大戦後を描いています。安水さんは第二次世界大戦後の風景です。そこでエリオットの「荒地」の最終部、あの雷神のDAという呼びですが。

安水 それぞれ、それに関して話したいことが二つある。まずエリオットを読むきっかけですが、雑誌「くろおべす」の同人たちが毎土曜日の午後、六甲ガーデン、今はない喫茶店ですが、

阪急六甲駅の北側にあった。広い庭を見下ろすテラスに座って読書会をやっていた。いつも三、四時間熱心に続けた。ホメロスを英語訳で、ダンテはイタリア語と英語の対訳のテンブルクラシックで、シェークスピアはマクミラン版の全集で順を追って、他にゲオルグ、リルケ、オーデンなどを次々と読みました。そのとき、イタリア語なら岸本通夫さん、ドイツ語なら小川正巳さん、エリオットのときは二宮尊道さんというふうに言語によって座をさばく人が替わりました。

— 安水さんではないんですか。

安水 私は学生やん、まだ(笑)。みんな大学の先生、学生は私ひとりだった。これがエリオットとの出遭いで。ここに神戸大学近代発行会の雑誌「近代」(第3号1953年7月刊)があります、エリオットの「四つの四重奏」(Four Quartets)、二宮さんと小川さんと桂田重利さんと私の四人の共同研究を収録しており、私は「エリオットの対話意識」というタイトルで書いています。大学の四回生のときだった。その評論で私は、詩は対話であることをいい、最後に「バーント・ノートン」から、「ぼくの言葉もこのように、君の心にこだまする」(my words echo / thus, in my mind) という詩句を引用しています。それこそが詩人のまず望むことであり、それが詩人の喜びであると私は結んでいる。この論文で私は、「語る」ということを見定めようとしたが、次の課題は当然「言葉(スピーチ)」と「方法(メソッド)」にあるとも書いている。つまりね、こういうことなんです。飯島耕一さんが私のことに触れ、安水の詩は声と形を探している、そういうコメントがりましたが、考えてみれば詩における声と形、そのことに私はずっと関心を持ってきた。そ

れが話したいことの一つ。もう一つ。戦争が終わり荒地という言い方ですが、私の場合、エリオットの『The Waste Land』に気持ちがいくというのは全体的なものではなかった。エリオットの最初の詩集『ブルーロックとその他の観察』の巻頭の詩「ブルーロックの恋歌」(The Love Song of J. Alfred Prufrock)の出だしはこういうフレーズです。「Let us go then, you and I, / When the evening is spread out against the sky / Like a patient etherised upon a table」。これが今でも私の頭のなかにある。「さあいっしょに出掛けよう」、ではどこに出掛けるのか。麻酔をかけられた手術台の患者のように。夕暮れの空、ヴァイオレット アワー、萼色の時間。萼色の街に出掛けよう、麻酔をかけられた患者のように。エリオットの最初期の詩のこういうところに私はひかれました。肉声の詩。これが私の戦後の感覚と反応した。荒地のDAには反応しなかった。

ー 辻井喬さんは最新作でもDAを引用されています。今でも反応しておられますね。

安水 どうも教条めいた感じがしてね。ヴァイオレットアワーから私はエリオットに入っていました。初期の作品が好きだった。「荒地」でいうと冒頭の、「四月は残酷極まる月」(April is the cruellest month)、これは響いた。四月は春、なのに最も残酷、これは響いた。DA、Datta、捧げよ、なんていわれても西欧思考ではないか。DAはサンスクリット語だから西欧思考ではないといわれても、そうおもった。DAより、「岸に腰をかけて釣りをしていた。あの乾ききった野原に背中をむけて」という箇所が響いた。その後の、「せめて自分の土地だけでも規律をつけてみましょうか」、この「規律」という箇所を抜いて、「ロンドン橋が落ちた落ちた落ちた(falling down falling down)と続けば私に響く。「荒地」は戦後の巨大な風景であるということとは理解できますが、戦後に詩を書き始めた私にとってはそのまま響く場所ではなかった。

ー 水はいかがですか。あの、Drip drop drip dropというあたりは。

安水 dripを2回、dropを5回繰り返して唱えて、But there is no water (水がない) これはいい。水があって岩がなかったなら、岩があって水もあつたら。

言葉が言葉の形が弾みますね。私の反応する箇所は一般的なエリオットの読みからは外れるかもしれないが、いま考えてみて私なりに一貫性はあるとおもう。「荒地」の後の「うつろな人びと」(The Hollow men)、うつろな人間認識、それを取り巻く現実認識もすごく響きました。DAには響かなかった。それでね、もう少しだけ喋らせてね、これが一番いいかったことかもしれません。「四つの四重奏」の冒頭、そのときは響かなかったが震災後に痛切に響いた。

「Time present and time past / Are both perhaps present in time future, / And time future contained in time past.」、現在と過去はどちらも未来にある、未来は過去のなかにある、これが四十数年経って響いた。今となっては響く。

ー そのことは地震の直後からおっしゃっていました。記憶は未来、記憶はことば。九鬼周造の訳語「時熟」、ハイデガーの時間性につながると思います。ここまで来ました、今日は。

安水 ふと気づいた、あなたが来るというから、エリオットのことも聞くといいから、いろいろと想起こしていたら、ふと気づいた、そんな感じです。

(平成19年11月14日、安水稔和氏宅にて)

註1

足立巻一の『鏡一詩人九鬼次郎の青春』(1970年・理論社)によれば、九鬼次郎、本名松田末雄、大正3年生まれ、結核性脊椎カリエスを病み苦しむ。昭和5年瀬戸内海に身を沈めた生田春月の死から自殺願望がつくなり、18歳のとき自殺未遂。昭和15年8月、脊椎カリエスが悪化、26歳で死去。

註2

高田渡は詩が好きだった。ファーストアルバム「ごあいさつ」(1971年6月)は、

谷川俊太郎、ラングストン・ヒューズ、有馬
 敏、山之内獺、エミリー・ディキンソン、衣
 巻省三、吉野弘、添田啞蟬坊の詩に高田は曲
 をつけている。衣巻省三の「アスクリー
 ム」は、【私の恋人よ／あんまりながくほっ
 ておくと／お行儀がわるくなる】。若い高田
 渡は、こんな詩を愛していたのだ。「ごあい
 さつ」は「はっぴいえんど」（大瀧詠一・細
 野晴臣・鈴木茂・松本隆）が4曲バックギ
 ングをつとめている。ジャケットデザインは湯村
 輝彦。

注3

静文夫遺稿詩集『天の罫』（1992年1
 1月31日・憐エルテ出版・東京都千代田区
 猿樂町1-3-1）は、画家で詩人の三浦照
 子氏の編集である。三浦氏によれば、亡くな
 った静文夫はジャン・コクトウとレイモン・
 ラディゲを生涯かけて愛したという。明治4
 2（1909）年生まれ。若いときから、さ
 まざま同人誌、「甲南詩派」「闘鶏」「青
 空」「内部」「風神」「マダム・ブランシ
 ュ」などにに関わり、昭和10年には神戸で
 「オペラ」を主宰、敗戦後シベリアから帰還、
 「木靴」「天秤」などに関わっている。本名、
 山縣瑛男、貿易商社勤務。なお三浦照子氏は
 著書『漂う被災マンション』（1998・風
 神書房）で、行政による「公費解体」という
 制度に疑問を投げかけている。
 以下、安水稔和氏の跋文、「詩人の肖像—静
 文夫の場合—」から抜粋する。安水氏は、昭和
 7年前後の阪神間モダニズムを「同人誌の時
 代」という視点からとらえ、創刊された雑誌
 を列挙している。名前を眺めているだけでも
 壮观である。

【一九三二年（昭和7年）には、「街貌」
 （大塚徹）「詩創元」（小林武雄）「断道」
 （林喜芳）「青騎兵」（亜騎保）「滑
 車」（岬紘三）「散文詩人」（足立栄治）
 「古風な街」（橋本勝美）「角笛」（橘正
 義）「彗星魚」（前田恵一）「回帰線」
 （河内秀生）「新生活派」（堂面秋芳）「新
 調」（南紀美夫）そして「甲南詩派」（山口
 俊三）の十三誌が創刊された。
 「マダム・ブランシュ」も東京でこの年に創
 刊。

一九三三年（昭和八年）には「一家」（竹
 中郁）「航図」（山口俊三）「日本詩壇」
 （吉川則比古・吉沢独陽）「牙」（亜騎保）
 「居留地」（同前）「デッサン」（森本忠
 夫）「花束」（玉井紘二）「吃水線」（久峨
 山清）「季節」（松田末雄）「巴旦杏」（仮

谷政雄）「青画」（塩谷安郎）「軽気球」
 （正田圭之助）そして「闘鶏」（石田三智
 雄）「内部」（亀山勝）の十四誌が創刊
 された。】

安水氏が依拠した資料こそ、『兵庫の詩人
 たち』の末尾を飾る詩年表、亡くなった君本
 昌久渾身の仕事である。そこには三・一五事
 件の年に自裁した岩原晋の「街頭詩人」まで
 収録され、いつ紐解いてもこころ動かされる。
 詩年表の、大正末年から昭和初年の動きを見
 れば、戦時下神戸の青少年を衝き動かしてい
 た創作欲がいかに熱を帯びていたか、よくわ
 かる。またこのあたりの光景、『親友記』
 （足立巻一著）では、博行堂、悦心荘、宇仁
 菅、エスペロ書店、白雲堂、ロマン書房など
 の古書店や謄写版屋文信堂との関わりをなか
 で縦横に描かれている。小説のなかで足立巻
 一があげる詩歌の同人誌は以下。『創元』
 （九鬼次郎）、『詩胎盤』（小林武雄）、
 『詩創元』（地良田綱、九鬼次郎）、『プロ
 フィル』（小野康介）、『青い果実』（足立
 巻一）、『滑車』（岬紘三）、『ポエチカ』
 （竹村英郎）、『耕人』（沢木静城、吉田一
 鶴）、『ボトナム』（長谷川伝次、小島清）、
 『虹泉』（只野由紀夫）、『無限』（冬木
 渉）、『吾妹』（生田蝶介）、『香蘭』（村
 野次郎）、『ひひらぎ』（田上三郎）、『整
 塔』（瀬戸うづ美）、『青叫』（荻沢紫影）、
 『防波堤』（坊矢怜一）、『港風』（足高万
 太郎）、『もしほ』（中村芳夫、塚本泰章、
 沼田清信）、『するる』（森井晴一、麻生孝
 一、法橋章子）、『あさなぎ』（足立巻一、
 川崎藤吉、月井奈都夫、荻沢紫影、丘本冬
 哉）、『六甲』（坪田耕吉、秋山杜思彦、田
 上三郎）、『短歌至上主義』（杉浦翠子、九
 鬼次郎）、『青騎兵』（足立巻一、亜騎保、
 岬紘三、九鬼次郎、冬木渉）、『牙』（足立
 巻一、亜騎保、岬紘三）、『以後』（岬紘三、
 亜騎保、足立巻一）、『神戸詩人』（光本兼
 一、小林武雄、竹内武男、亜騎保、岬紘三、
 津高和一）、『火の鳥』（小林武雄、亜騎保、
 足立巻一）、『カタルシス』（亜騎保、足立
 巻一、田部信）、『天秤』（亜騎保、足立巻
 一、静文夫、桑島玄二）など。だが足立巻一
 の胸には、「取り返しがつかん」という詩人
 亜騎保の悲痛な声が凍りついたままである。
 『親友記』『鏡』や林喜芳の『神戸文芸造兵
 物語』『香具師風景走馬灯』などの横に田村
 隆一の『若い荒地』を並べ、戦時下の青春群
 像の彼方をおもっている。

*

◆ 神戸のモダニズム文学は、古武士の面影をのこす黒木正男を抜きに語れないとは渡辺一考（最近、一考さんの孤独を推名其二に重ねての）の言である。今はない黒木書店の黒木正男さんに関して思い出すことがある。ある日、足徳に興味があるなら、面白いからと一冊すすめられた。昭和四十年代前半のころ、近くの俳文堂も健在だった。それは、青木重雄著『青春と冒険—神戸の生んだモダニストたち』（昭和34年・神戸市東灘区御影町柳・中外書房）だった。「タルホの記述あり」、黒木さんのふるえるような文字が、帯のように巻かれた紙の背にある。開くと自筆のサインがあり、川西和露の弟である版画家の川西英への献呈本だった。早速これもしたら、向かいの喫茶店チェリーのコーヒーをこ馳走になった。その日は先に『彼等』（昭和23年・櫻井書店）をもとめていたので、黒木さんをご機嫌だったのかもしれない。著者の青木重雄は1912年生まれ。関西学院専門部英文科卒業。神戸新聞の学芸部長だった。敗戦後、藤野克己、馬部貴司男と三人で同人誌「自我」を創刊、アンドレ・マルロウ論を発表している。恐ろしいタイトルだが、『青春と冒険』は逸話集成、今では古書価格もかなりする。稲垣足徳を巡る人間関係、板宿（いたやど）の土手で、オートバイ屋の息子（那須徳三郎という人で後に十一谷義三郎の未亡人と結婚）や風呂屋の息子の藤原正章と模型飛行機を飛ばして失敗する話など、いつ読んでも楽しい。さすが黒木正男さん推奨、こたえられない一冊。竹中郁を巡る関係もさまざまに描かれている。竹中郁の兄である石阪孝二郎と小松清とのこと。稲垣足徳、溝口健二（「神戸又新日報」に図案係で勤務）、増田篤夫、亀山勝、福原清、山村順、明石の無量光寺住職の小川龍彦らとの交友が綴られている。小松家は淡路の出で、兵庫の算所町で精米所を営んでいた。小松清はアンドレ・マルロウと交友があり、マルロウやジツドの翻訳を多数残している。

あとがきの冒頭に、「水死者と窓と風景」という詩が一篇掲げられている。作者は九鬼一爾。同人誌「OMEGAの妄想」（大正15年1月31日発行。同人は九鬼一爾、多田繁治、谷崎潤一郎の書生だった水車大八）に発表されたものだ。九鬼一爾（本名、九鬼楠男。著者青木重雄の義兄）の友人である俳人沢井我來から手渡されたという。沢井我來は宮崎修二郎さんの『神戸文学史夜話』（昭和39年・天秤発行所）に何箇所か出てくるが、九

鬼一爾はない。九鬼一爾とは何者なのか。別のペンネームはR I V I E L・K U K I。稲垣足徳や竹中郁、庭与吉（若杉憲）らと交友があったという。昭和14年6月、武蔵野療養所で死去。33歳。

『青春と冒険』を取り出したとき、「蜘蛛」第5号（1963年2月）が出てきた。「特集・神戸の詩人論」。そこに、多田智満子、安西冬衛、藤村壮、近藤東、港野喜代子、亜騎保、中村隆などの名。96頁には、静文夫の作品が掲載、足立巻一の「求心分離機」という文章がある。その冒頭に、【『天秤』はこんど第十二冊目を出した。同人は十三人。亜騎保、足立巻一、伊田耕三、岡本甚一、桑島玄二、静文夫、田部信、津高一、徳永秀則、鳥巢郁美、原口から、正木利雄、米田透。創刊は一九五〇年四月】、こうある。また亜騎保は、岡本甚一は詩を書かない、今は一介の本屋さんだが、本人がいかにか蟬晦を企てようと本来的に詩人、詩的エネルギーを商法に駆使している、と書く。稲垣足徳が土手で模型飛行機を飛ばした板宿、板宿商店街の「岡本書房」だ。ここも今はないが、板宿幼稚園のときから記憶がある。買い物籠をさげた母に連れられ、市場に行った帰り、ここやその近くの模型屋さんへ寄って陶然としたものだ。違う世界に没入することが、子ども心に楽しかった。

稲垣足徳だが、11月24日、「モダニズムと装幀」展（芦屋市立美術博物館）へ行って新発見資料を見てきた。この五月、加納成治さんが花隈の古書会館の市で落としたものだ。私立関西学院中学部校友会『校友会誌』第4号（大正8年2月20日発行）。思想劇「復活の朝 第二幕第三場—親愛なる兄弟へ」。原稿用紙20枚を超える、足徳の中学生時代最後の年の力作。これは快挙ですな、隣でしゃがんでいた加納さんに語ったら、うんうんとうなずいていた。新しい資料は城跡のある花隈から顔を出した。鯉川と宇治川のあいだ、かつて高橋川、境目川、寺前川、札場川、胞衣川、五本の流れがあった花隈の地から現われ出したことがなにより嬉しい。

たとえば、手元にある『岬紘三詩抄』は、友人たちによりガリ版でつくられ、いとおしい薄さが保たれている。拘禁、押収、破棄処分、さらに空襲などにより、同人誌に発表された岬紘三の作品は散逸し、今や収集し難い。裸電球のもと、議論に酒にガリ切り、表現へ

の熱。職業といえば、料理人に印刷文選工、看板屋職人に造船所の夜勤工、魚屋のぼんさん。渴望だけが彼らを支え、物質的な貧しさなど屁ともおもわなかった。関東大震災後のモダニズム、その熱い息吹は神戸にもあった。今回は「happy fewの運動」としてのモダニズム詩について安水稔さんからいろいろと伺い、話はおもしろいところまで駆けて行った。

◆ ここまで書いたとき、犀野良人から同人雑誌「ムンドロップ」（國重游・主宰）9号を贈られる。そこに、「永田助太郎ノート」を見出し、直ちに読んだ。ぼくなんかよりはるかに若い人が、蜘蛛出版社の君本昌久の仕

事を丹念に尋ねる、しかも真摯なその姿勢にどれだけうたれたことか。この論考でも、『永田助太郎詩集』から戦争詩が消えた理由に触れている。君本昌久は永田助太郎の戦争詩になぜゆえ触れることができなかったのか。犀野良人は信頼できる仕事を着実にし遂げてきた。端倪すべからざる読書家であり蒐集家、好奇心は旺盛である。忘年の交わりというが、こちらが学ぶことの方がずっと多い。足穂や平井功、加能作次郎や田中小実昌などに季村敏夫、本年中に是非まとめて欲しい。

(季村敏夫)

寄稿者紹介

内堀弘一

1954年神戸生まれ。『ボン書店の幻—モダニズム出版社の光と影』（白地社）ほか。練馬で近代詩専門の古書店「石神井書林」を営む。

安水稔一

1931年満州事変の三日前の神戸で生まれる。神戸大空襲で龍野へ疎開。著書『記憶めぐり』『歌の行方—菅江真澄追跡』『内海信—花と反戦の詩人』（編集工房ノア）ほか多数。

柳原一徳一

1969年生まれ。「みずのわ出版」代表。最近山口県の周防大島に、とことんこだわり抜く活動を展開している。『阪神大震災・被災地の風貌—終わりのなき取材ノートから』ほか。

山本唯人一

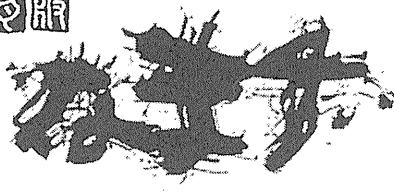
1972年生まれ。東洋大学非常勤講師。専攻は東京空襲犠牲者の氏名記録運動だが、地域に生きる小さな活動にも心を砕く。「伊勢湾台風といずみの会」（『現代思想』2006年1月号）

あとがき

この三月で活動を始め十年になる。いま区切りということを考えている。区切ることは非定型的な行為である。定型的な考えに潜む自明性を疑い抜くことである。そのため議論はなかなか噛みあわないが、このごくしゃく、遅れに拘らねばならない。零八年初春。（季村敏夫）

2008-03-01

24



Kawaraban Namazu



瓦版なまず

第2期第7号（通巻24号）

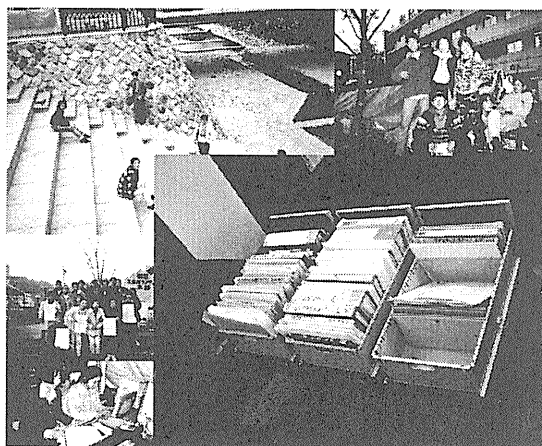
編集人：佐々木和子

発行人：季村 範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone: 078-681-6231 Fax: 078-681-6232

特集 震災一次資料を巡って



- | | |
|------------------|-------|
| 2 記録が生まれるまで | 季村範江 |
| 3 資料ガイド | |
| 5 「澁ボラ資料作業ノート」より | |
| 8 刻まれた聲 | 藤原直子 |
| 9 澁ボランティア資料の声と音と | 市村登和 |
| 10 動詞の実践—アーカイブ試論 | 佐々木和子 |
| 11 澁ボランティア資料目録 | |

記録が生まれるまで

季村範江

「灘ボランティア」は災害をきっかけに偶然出来たグループである。中村由紀子さんを中心に、灘区内にある神戸大学の学生や他府県から駆けつけた若者が活動していた。何か自分に出来ることはないか、この思いで、たくさんの人々が灘区役所にやって来た。区役所は混乱を極め、本来の機能が働いておらず、当初彼らは自主的に動くしかなかった。やがて、個別の動きがひとつにまとまり、「灘区災害ボランティア」が結成された。

バイクに乗って活動していた人が「バイク隊」を、歩いてまわった人が「歩き隊」、高齢者をサポートする「JBC」(じっちゃん、ばっちゃん、くらぶ)を立ち上げ、情報発信のための「灘区災害ボランティア新聞」を発刊するようになる。2月13日、都賀川沿いにテントを建て、そこに独立した活動の拠点を移した。「灘ボランティア」の誕生である。

今までの活動に加え、他のボランティアグループとの連携、被災者の行政への陳情のサポートなど、活動はますます活発化していった。

4月に入ると、リーダー役の中村由紀子さんが神戸を離れ、大学生たちも所属する学校に戻り、活動は次第に穏やかなものとなり、その後も、引越しボランティアや仮設住宅訪問、「灘ボランティア新聞」の発行と続くが、6月末に新聞は45号で終刊、8月、活動の拠点となったテントの撤去で「灘ボランティア」は活動を停止する。

日々刻々と変わる状況のなか、ボランティアたちは自分のやったこと、見たこと、聞いてきたことを誰かに伝えるため、紙きれやノートに書き記していった。必要に迫られて書かれた「連絡ノート」、被災者からよせられた声や情報を発信する新聞、ビラ、ちらし、活動日誌などが、日々の関わりから次々と生まれていった。

まず救援という行動があった。最初は自然発生的な、個別の動きだったが、機能的にまとめられ、多くの人が関わることにより、記録する必要に迫られた。ここに「灘ボランティア」の記録が生まれた。

1998年3月、「震災・活動記録室」の資料を引き継ぎ「震災・まちのアーカイブ」が誕生した。「灘ボランティア」の資料整理の開始は1998年4月、詳細目録にいたっては、2003年から2004年であった。

連絡ノートや活動日誌には、後から貼り付けたと思われる小さなメモがテープで止められ、書かずにおれなかった彼らの気持ちが伝わってくる。

あちこちにマジックで記しが描き込まれた灘区の地図。あそこへ行こう、次はここ、地図の中の記しを見ると、「バイク隊」や「歩き隊」と名乗って、それぞれが何らかの役割を担い必要に迫られ駆け回った現場の様子がうかがわれる。

資料整理を進めるうちに、当時あの場所にいなかったにもかかわらず、都賀川に吹きつける冷たい風がテントにぶつかる音やバイク隊のエンジンの音、彼らの息づかいまでが文字やマジックの記しのあいだから聞こえるような気がした。

なぜだろう。現場に居ないのに、どうして現場に居るように感じられたのか。文字や記しという記録されたものに関わるようになり、今まで考えもしなかったことを思うようになった。描かれたものをたどると、その日の天候や駆け回っている息づかいまでが浮かび

上がる。記録された文字や記しを読みながら、記録されなかった声を思っていたからかもしれない。記録されたものは記録されなかったものの一部である、ということを資料に携わるものとして忘れてはならないし、資料を読むことの難しさと面白さもそこにあり、そのことを教えてくれたのが「灘ボランティア資料」であった。

資料ガイド

資料名 : 灘ボランティア資料

資料作成年月日 : 1993年～1995年8月

数量 : ファイル 186点、(アイテム 956点) 音声テープ 2点

作成者 : 灘ボランティア (神戸市灘区神ノ木通)

組織および活動概要 :

1995年1月20日 バイク部隊、炊き出し調整兼任で結成

1月25日 物資部兼情報部発足、歩き隊活動及びボランティア派遣始まる。

1月27日 上記の部が合併し、灘区災害ボランティア誕生

1月28日 灘区災害対策本部避難所班と初ミーティング

1月31日 対策本部との2回目のミーティング／物資部廃止、避難所関係の情報収集活動停止。

2月 3日 郵パック到着トラック二台分の物資を引き取るよう頼まれ、物資部再結成

2月 4日 新聞部発足／ゲリラ部隊結成／歩き隊、隊として結成

2月 5日 灘ボランティア新聞創刊

2月 6日 避難所班と3回目のミーティング／避難所内ボランティア要請の情報収集活動再開／福祉支援ボランティア JBC 発足

2月 9日 灘区内ボランティア団体ネットワーク作り始まる

2月13日 灘区災害対策本部長と話し合いの上、灘区災害ボランティア区役所受付より撤退、独立した民間ボランティア、「灘ボランティア」となる。

2月20日 灘区内ボランティア団体ネットワーク完成 避難所担当ボランティアとしての活動開始／実動部隊結成

3月 2日 肩揉み部隊結成

3月 4日 第一回灘区内ボランティア団体連絡会議

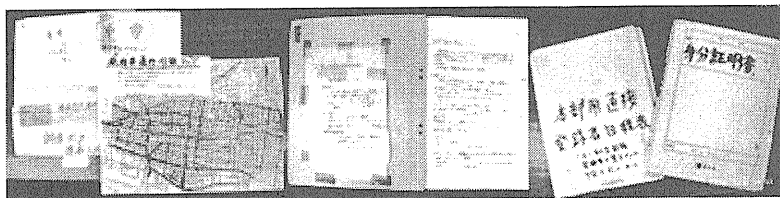
3月18日 市議会にてボランティア窓口設営についての陳情／震災に伴う高齢者対策についての陳情

灘ボランティアは、地震直後から灘区役所にボランティア登録した、あるいは登録しようとした人達によって構成されていた。主として、神戸大学などの大学生が中心であった。活動人数は、運営に携わる地元中心の長期ボランティアが約3

0人、各部署で現場で活動した中長期ボランティアが約50人、指示を受けて活動する短期ボランティアが一日約10～100人であった。

- 資料蓄積年月日 : 1995年1月20日～9月
- 受入経緯 : 清水信年さん(灘ボランティアメンバー)から、舟橋健雄さん(旧「震災・活動記録室」副代表)を通して預けられたものである。1998年3月、「震災・活動記録室」のあとを引き継いだ「震災・まちのアーカイブ」に移管。
- 資料内容 : 阪神・淡路大震災初期のボランティア活動の記録。
- 追加受入 : ファイル1点(アイテム18点) 写真 43点 音声テープ 3点 DVD 2点
- 編成 : 「震災・まちのアーカイブ」所蔵資料の段ボール1箱分を「fond」とし、ノートやバインダー、ファイルにまとめられたものを「ファイル」、さらにその中に綴じたり、挟み込まれたもの1点ごとに「アイテム」とする。「アイテム」は、「震災・まちのアーカイブ」所蔵の詳細目録を参照のこと。
- 法的位置づけ : 「震災・活動記録室」から移管
- 公開条件 : 「震災・まちのアーカイブ」スタッフ立会いの下、プライバシーへの配慮をしながら公開
- 利用または複写条件 : 利用と複写については、「震災・まちのアーカイブ」スタッフの許可が必要
- 使用言語 : 日本語、一部英語、中国語、韓国語、スペイン語、ポルトガル語、タガログ語、ベルシャ語あり
- 物的特徴 : 感熱紙、ファックス用紙は退色(コピーあり)
- 検索手段 : ファイル、アイテムレベルの目録あり。ファイルレベルの目録は、瓦版なまず24号に掲載。
- オリジナル資料 : 原本
- 複製 : DVDに複製。
- 他機関所蔵関連資料 : 人と防災未来センター資料室が「灘ボランティア新聞」第19、20、26号所蔵
- 備考 : 2004年12月、元メンバーが震災・まちのアーカイブを訪問。一部、所在不明資料があることが判明した。その後、預けたという人物に所在確認をおこなったが、確認はできていない。

【灘ボランティア資料 写真】



「灘ボラ資料作業ノート」より

2003年8月21日

灘ボラ資料詳細目録作成とにかかる

2003年10月30日(木) 晴

灘ボラの資料が収められたキャビネットを撮影／
詳細目録がとれているかどうかの確認をおこなう
／段ボール3箱分の資料が、現在はキャビネット
の引き出し3つに収められている／詳細目録が必
要なもの不要のものを分ける／要の中にも備考
でよいものと詳細目録が必要なもの、要コピー、
要赤印のものなどさまざまある／これからは目録
を直接パソコンに入力してはどうかとの提案あり
／避難所アンケート、要望書等あり(3人)

2003年11月6日(木) 曇

目録をとる際のフォーマットを作成／中央区ボラ
ンティアの目録作成のフォーマットを参考に話し
合う／いろいろなフォーマット別に中央区ボラ
ンティア目録を再入力して考える／次回の活動日に
決める事にする／灘ボランティアの資料は段ボ
ール3箱と音声テープ2本(4人)

2003年11月15日(土) くもり

15時半から灘ボラ資料に関する打合せ →以下、
議題・検討内容／音声資料の打ち出し(インタビ
ュー) ※テープ起こし／パソコンに直接、入力す
るか、一度紙に書き写しをするか→資料のポリウ

ームと人手の問題／KN:「灘ボラ資料の量の凄さを見
るとなされてしまう」／SK:「たまたま人が多く
集まったときは、手が余った人には手書きして
もらったらどうか」／SK:作業進行表をつくったら
どうだろうか／SY:メーリングリストという選択
肢もある(6人)

2003年11月20日(木) くもり時々雨

やはり、実際に作業を始めてみて、その後徐々に
補正していく必要あり／詳細目録の作業表作成、
どこまで目録がとれているのか誰が見てもわかる
表にする(2人)

①

番号	氏名	住所	電話番号	担当
1	山田 太郎	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5678	
2	山田 次子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5679	
3	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5680	
4	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5681	
5	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5682	
6	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5683	
7	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5684	
8	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5685	
9	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5686	
10	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5687	
11	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5688	
12	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5689	
13	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5690	
14	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5691	
15	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5692	
16	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5693	
17	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5694	
18	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5695	
19	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5696	
20	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5697	
21	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5698	
22	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5699	
23	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5700	
24	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5701	
25	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5702	
26	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5703	
27	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5704	
28	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5705	
29	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5706	
30	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5707	
31	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5708	
32	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5709	
33	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5710	
34	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5711	
35	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5712	
36	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5713	
37	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5714	
38	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5715	
39	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5716	
40	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5717	
41	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5718	
42	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5719	
43	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5720	
44	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5721	
45	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5722	
46	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5723	
47	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5724	
48	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5725	
49	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5726	
50	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5727	
51	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5728	
52	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5729	
53	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5730	
54	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5731	
55	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5732	
56	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5733	
57	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5734	
58	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5735	
59	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5736	
60	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5737	
61	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5738	
62	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5739	
63	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5740	
64	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5741	
65	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5742	
66	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5743	
67	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5744	
68	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5745	
69	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5746	
70	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5747	
71	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5748	
72	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5749	
73	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5750	
74	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5751	
75	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5752	
76	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5753	
77	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5754	
78	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5755	
79	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5756	
80	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5757	
81	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5758	
82	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5759	
83	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5760	
84	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5761	
85	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5762	
86	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5763	
87	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5764	
88	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5765	
89	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5766	
90	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5767	
91	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5768	
92	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5769	
93	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5770	
94	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5771	
95	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5772	
96	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5773	
97	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5774	
98	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5775	
99	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5776	
100	山田 花子	〒100-0001 東京都千代田区千代田	03-1234-5777	

2003年11月29日(土) 雨

灘ボラの目録を取る／枝番を書く位置をどこにす
るのか／これまでは裏の左上(表の方が見やす
い?・複数ページあるときは、最初のページに書
くか、最後のページか)／サイズの書き方(たて
×よこの順番 14.2×15.8の場合→14×16と表記
するのか?・小数点の扱いはどうするのか(6人)

2003年12月4日(木)

枝番を書く場所をどこにするか。資料の裏として

いたが見にくい場合がある／裏表に書いてある資料でどちらの目録をとったらいいのか判断しにくい場合がある

2004年1月24日(土)

ダンボール①の目録はほぼ終了／一度全員でミーティングをもって問題点を話し合う必要がある。
(1人)

2004年1月29日(木)

ダンボール箱②・25 名簿の場合、作成者は名簿に書かれたグループなのか、灘区ボランティアなのかかわからない／②・29-10 今後の方針 総括中村氏の被災者を早くボランティアの仕事に引き渡す姿勢が同えて興味深い

2004年2月14日(土)

灘ボラの正式名称、又はアーカイブがどう呼ぶか決める必要あり。灘ボラ 灘区ボランティア

2004.2.19(木) 晴れ

午前中：灘ボラ資料のことも含めてミーティング
／午後：目録取り。ある紙を原本にして、それを何部もコピーして、日付別に異なった書き込みをしている場合が多く、その場合どのようにカウントするか。(4人)

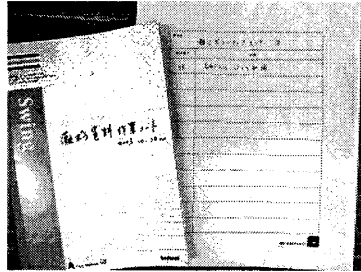
2004.2.28(土) 晴れ 少々寒戻る

灘ボラの名称について『灘ボランティア新聞』の編集者は「灘ボランティア」の小川寛司とあり。／『灘ボランティア新聞』ミニコミ資料として収集の必要ありと思う。当初 2 日一度発行／一次資料詳細目録のデータ入力法について検討する

2004.3.13(土) 晴れ あたたかい

同じ場所にひとかたまりにまとまると「数

量1」を何回も繰り返して番号を増やしていくものあり。あるいは「数量 X←部数」として 1 つの番号にまとめるのもあり→迷ってます／コピーを拡大・縮小コピーしていると同一の物なのにサイズが異なる。用途も異なっていた？(4人)



2004年3月18日(木) 昨日とうってかわって寒く風の強い一日

名称がいろいろ書いてある(例 灘ボランティア、灘区ボランティア、灘区災害ボランティア)／資料 No.42 は灘区の地図をコピーして道路案内の資料にしている／灘ボランティア新聞 10号は内容が灘区の地図案内で書き込みが違って別の用途に使用しているので資料を一つと数えないで別々の資料と考えた方がいいのではないかな。

2004年3月26日(金) 晴

資料番号 9 の目録とりが完了＝ダンボールの一箱目の目録取り完了(3人)

2004年4月1日(土) 晴 桜満開近し

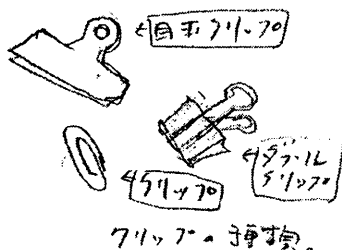
「灘区ボランティア新聞」→2月17日より「灘ボランティア新聞」に／発行者も「灘区災害ボランティア」→「灘ボランティア」に(名称の変化にともない組織に変化?)／おそらく何枚かのつづりになった途中の一枚。表題なくベース基地、各保健所の場所が書かれているがそこでおこなわれた活動の内容が推察できず困る(2人)。

2004.4.15 (木) 晴 桜散る 長田の街路樹の花
みずき咲く

995.1.28 灘区災害ボランティア— 2.13 灘ボランティア—灘区ボランティアセンターとある(作成者欄)に作成された各時期の名称で記入するのか、「灘ボランティア」として一括で記入し、全体の概要でみるのか) / 「三時のおやつを忘れても作業ノート記入を忘れるな!」(2人)。

2004.5.13 (木) 雨

作成者欄の記入についての疑問/団体Aが被災地各地にFAXで送られた資料を灘ボラがそのままコピーして使用した場合、作成者は団体Aとなるのか灘ボラになるのか。/資料の中に複数のコピーが出てくる場合は、保存状態を優先させ、番号をつけ別取る。(3人)



2004.6.12 (土) 雨

つるつとした紙の資料に鉛筆で資料番号を書き込んでも大丈夫かな。/サイズB5、B4、A4、A3以外に、市の広報紙などで「横 27.5cm かける縦 41cm」というのは他に何か定型のサイズがあるのかもしれない/市の広報など結構合併号になっていたりする(ex.3-7「区民広報紙 東灘コミコミ」+「区社協だよりひがしなだ」)。(2人)

2004.7.1. (木)

No.9、No.10の資料に灘ボランティアの活動内容、組織などよく分かる資料あり。

2004.7.10 (土) やや涼しめ

詳細目録作成に1か月ぶりに手をつけたところ方法を忘れていた。/3-11に取り組む。封筒に入れられていたもののそれぞれの紙のうらおもてや上下のばらばらだった。(5人)

2004.7.15 (木) すごく暑い

No.13 は資料のほとんどが感熱紙で要コピー。/まだ消えずに文字が読める。(2人)

2004.10.7 (木)

資料番号 03-17 8 ボランティア会議出席者の名簿の中に総括の中村さんの連絡先あり/資料番号 3-19 7、8に中村さんの新聞記事/20代 アルバイト先(長野)のスキー場から実家のある神戸へとあり。

2005.10.23

灘ボラ資料の整理終了に伴う話し合いをおこなう/◎目録 10/23了/◎入力 10/23了/地図が多数あり—地図を生かした表現方法を考える/ヒトボウの灘ボラ資料チェックする必要あり/◎総括 中村由紀子—4/10神戸を離れるとの記述あり

2005.11.27

◎中村由紀子さんとお会いする/(中村さん談):新聞はファイルしてはいたはず。奈良の大学(女性)に貸した記憶あり→その後の行方は不明→他のメンバーが詳しく知っているかもしれない/灘ボラ新聞 ヒトボウ資料室に4枚あり→コピー依頼中

刻まれた聲

藤原直子

1995年3月、元町に拠点を置く「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」内に「震災・活動記録室」（以下、記録室）は発足した。震災直後、被災地に駆けつけたボランティア。経験のない大災害の地で格闘しつつ、さまざまな声をあげていた。その声を今、記録しておかなければ消えてしまう。連絡会議のスタッフでもあった実吉威のもとに、同じ思いをもった者たちが集まり、「震災・活動記録室」は動き始める。

毎日のように流される被災地からの報道を、私は大阪の自宅で見ている。そこには、各地から駆けつけたボランティアたちの姿があった。私にも何かできないか、気持は動いた。災害にあった神戸の街に、私が初めて足を運んだのは、すでにボランティアとして動いていた兄の勧めで、実吉に会いに行くためだった。3月14日、「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」主催の第4回全体会議会場、神戸駅前のクリスタルタワーを目指し、JR全線開通を前に電車を乗り継ぎ、歩き、たどり着いた。一步入った会場の熱気は、それまで大阪にいて、あふれる情報だけを受け取っていた私を圧倒するものだった。刻々と変わる被災地の状況に、問題への解決策、お互いの情報交換、連携の呼びかけと、誰もが真剣そのものだった。その時感じた熱気と聲の記憶が、今も何かのきっかけに立ち上がってくる。死者とうなだれた者の前に駆けつけた人々の「なんとか、せな」。この聲が、その時感じた熱気とともに私の身体の中に刻まれたのだ。その後、私は再び実吉のもとを訪ね、記録室に参加する。

記録室の活動はボランティアの活動記録の収集と保存を柱に、活動の現場を訪ねての聞き取り、そして記録室通信の発行と、時間の経過とともに広がった。

8月、震災直後から「灘ボランティア」の活動拠点であった灘区民ホール前、都賀川沿いに張られていたテントの撤去作業が行われた。荷物の整理に伴い、活動開始からの日誌、情報ファイル等の資料が残される。記録室の副代表だった舟橋健雄は、「灘ボランティア」の主要メンバーの一人、清水信年を通じダンボール3箱分の資料を預かる。

資料の委託を受け、9月5日、清水に「灘ボランティア」についてのインタビューを実施した。インタビューは舟橋。二人は震災直後より、神戸大学のボランティア活動で面識があった。私もカセットデッキを持参参加した。夏の熱気が残るころ、灘区役所1階に設置された灘区ボランティアセンターでインタビューは行われた。ボランティアセンターには、「灘ボランティア」のメンバー数名がスタッフとして移っていた。仕事の合間にインタビューを聞きながら、清水の話しを補足するなど、役所の中であって、「灘ボランティア」を訪ねたような雰囲気であった。舟橋の質問に、清水は1月17日からの記憶に「灘ボランティア」での活動の記憶を重ね、よくみなく答えていく。同じ大学の学生という親しさもあってか、舟橋が貪欲に聞き出すことに清水は嫌がることなく答え、2時間近くに及ぶインタビューはあっという間であった。この時のテープは音声資料としてMDへとデジタル化されている。

その後、記録室の活動は被災地への情報発信、被災者の抱える問題への対応に重点を移していく。その間、「灘ボランティア」資料は整理されることなく、ダンボールのまま3年間眠ることとなる。

1998年3月、記録室の中から資料保存のため、新たなグループが生まれる。「震災・活動記録室」から資料部分を引き継ぎ、新たに歴史資料に携わるメンバーも加わり、「震災・まちのアーカイブ」が発足。4月より、「灘ボランティア」資料の整理、手書きによる目録作成の作業を始める。2004年には詳細目録を完成させ、目録のデジタル化。2008年2月現在、資料はダンボールから中性紙箱に移され、目録とともに「震災・まちのアーカイブ」に保管されている。

「灘ボランティア」資料の整理を進めながら、ノート、紙の一片から活動の日々を読み取り、私は資料の中で、「灘ボランティア」に関わる人々に出会った。「資料が人が出会ってそれぞれに歩きだす場になったら、いくつもの出会いのひとつになれば、と思う」。これは、アーカイブの会員だった木内寛子が、「震災・まちのアーカイブ」という場についての思いを語った言葉だ。残念なことに、木内は亡くなり、10年後に叶った「灘ボランティア」のメンバーとの再会は私たちだけのものとなった。しかし、その再会が叶ったのも、木内の言う、資料と人が出会いそれぞれが歩き出すことができたからだと思っている。

資料に残された、あの時の聲の断片が、私の記憶を立ち上がらせる。「なんとか、せな」。死者とうなだれた者の前に駆けつけた人々の声が、出会った私たちを歩き出させた。「今、聞こえてくるボランティアの声を記録し保存することは、自分たちの想像を超える価値がある」。発足時に記録室が議論の果てに出した答えの意味を、13年経て実感している。

灘ボランティア資料の声と音と ―灘ボランティア資料との出会いから

市村登和

「ムビラ」の音色を思い起こすとき、しばしば「ふしぎ」な思いに囚われる。

ムビラは、灘ボランティア資料に関わるにつれて私が資料と切り離せなくなった楽器の名前だ。実体としてのムビラは、ジンバブエのショナ族が長らく演奏してきた楽器、金属製の鍵盤を指ではじく素朴な作りの楽器だ。両手でようやく抱えることができる丸い大きな鉢のなかにムビラが置かれる。乾いた金属の音色が大鉢の中で共鳴する。さらに鉢の外縁にぐるりと取り付けられたボトルキャップの王冠も演奏者の身体揺れにつられジージーと振り震えて音を発する。乾いた金属の音色だけでなく、一緒に醸し出されるザワザワとした金属音ではない音色が共鳴するのがアフリカの大地ではとても心地よく響くものなのだ、と、灘ボランティアで活動していた三木まさよさんは語ってくれた。

灘ボランティアの資料と関わるのが、なぜムビラを聴くことになったのか、という問いには明確に答えられない。いや、このような経緯でつながっています、という説明なら可能だ。しかし、私が答えられないというのは、資料を整理しはじめた頃、このように結びつくとは思っていませんでした。思っていたのは、資料を整理しはじめた頃、このように結びつくとは思っていませんでした。思っていたのは、資料を整理しはじめた頃、このように結びつくとは思っていませんでした。

三木まさよさんがムビラを奏でた日。2007年2月の「アーカイブカフェ ボランティアという生き方」開催は、震災・まちのアーカイブが外へ開くことを試みた日だった。開催場所の西元町の「みずく舎」は、元町商店街に面する1階でガラス張りになっていた。透明なガラスを超えて私たちの情景は外へと開放され、三木さんが奏でる音も外へと漏れ聞こえていたことだろう。外へ開く、とはどういうことなのだろう。

動態としての「灘ボランティア」と灘ボランティアを形作っていた若者の行為は、平面上に記録として一旦閉じ込められた。それが「灘ボランティア資料」だ。しかし、資料を過去の記録として扱うだけでなく、その後の灘ボランティア資料と震災・まちのアーカイブとの出会いが、灘ボランティアに学生として関わっていた「三木まさよ」という今を生きている人との出会いを作り出し、資料には閉じ込められていなかった「ムビラ」というアフリカのジンバブエで奏でられている音と出会わせたとのこと。それを感じて、受け止めて、受け容れて、応答すること。これを外へ開かれたことと受け止めてよかったのか。そもそも、資料と出会う、ということとは、どういうことなのか。資料に出会ったことで、資料が私に問いかけてくる。

三木さんがあの日にあの場でムビラを奏でていたこと、灘ボランティア資料が震災・まちのアーカイブにあることとは根底で関係しているのだけれども、あの日、資料そのものについて語られることはなかったし、三木さんが灘ボランティアで活動していたことの詳細が語られたわけでもなかった。資料を手にとる私たちはどのような普遍性を持って受け止めたのか。

資料、とくに、私たちの手元にある一次資料のほとんどは、あの日の地震に関係すること抜きには存在しない資料だ。

資料に書かれた情報、何々が今必要だ、とか、バイク隊用の地図、などは、活動終了とともに記録として残されたものでしかなくなる。しかし、全く別の意味を持って、つまり、ある時間の活動の記憶として読み手と対話し得るものにはならないのだから。灘ボランティアで活動していたうちの6人が、資料を手放してから初めて資料に再開した日があった。その日の情景をこの紙面に再現することはできない。目録もない。その資料は形としては存在しないのだから。だが、忘れられない時間であり事である。おそらく、灘ボランティア資料そのものにとっても忘れがたい時間だと思う。勿論、資料に再会した灘ボランティアの6人にとっても。だが、こうして書かなければ、なかったことになるのだろうか。やがて、この再会を知るすべてが朽ちれば、灘ボランティア資料に重ね合わされた行為は消えてしまうことになるのだろうか。

灘ボラの資料と出会い、灘ボラの人たちと出会った。

事実だけでなく24の文字で表わすことができる。だが、しかし、地震直後から約8ヶ月間に作成された資料に、足掛け13年が経過した今もお向き合っている。24文字では収まらない。道半ばだ。もしかすると、いつまでも道半ばであるかもしれない、という予感すらある。まだまだ、「不思議」に囚われることと思う。それは、この資料を目録として作り上げ「灘ボランティア資料」として公開することが資料との付き合いの完了ではなく、ここから、震災・まちのアーカイブの、そして、私と資料との「アーカイブ」の始まりだからだ。ムビラと灘ボランティアとその資料とに出会うように、これからも往還は続く。

動詞の実践 —アーカイブ試論

佐々木和子

「アーカイブ」とは何か。『文書館用語集』(1997年)によれば、「①史料、記録史料、②文書館」、すなわち記録や資料そのもの、その記録や資料がある場所のことと定義されている。そのイメージは、ファイルや箱のなる書庫。人の訪れはたまさか。しかし、アーカイブはもっと動物的なものではないか。その本質は次のような動詞に宿っていないか。そのことに気づかせてくれたのが、震災・まちのアーカイブ(以下まちのアーカイブ)での活動であった。

引き継ぐ—まちのアーカイブの前身は「震災・活動記録室」(以下記録室)である。記録室は、ボランティアの「やったことを記録に残す」ために、個人および団体の、ボランティア活動の記録保存を呼びかけた。当時の記録室のメンバーは、記録を残しておかないと活動そのものがあつたことが消えてしまうという意識があつたという。ここでは、記録は自分たちの存在したことの証(あかし)であつた。

記録とは、「人が行動(精神的を含む)するとき、その情報(内容)を時間的・空間的なハードルを飛び越えて(自分を含む人が)アクセス可能とするために媒体の上に刻んだ事柄」(小川千代子『アーカイブを考える』2007年、カッポ内筆者)。ボランティア達はその活動のあとを日誌や連絡ノートなどに刻んだ。まちのアーカイブでは、それを「わたしはここに居ます」という世界への呼びかけの声にとらえた。

ボランティアの声を拾い集める活動の時期であつた記録室。記録を集めることに力を注ぐことはできたが、記録のその後については方向を見いだすことは難しかった。

まちのアーカイブは、記録室から遅れて生まれた。記録は記録室からまちのアーカイブへ引き継がれた。遅れは時間的距離をもたらす。ボランティアの声達とも距離をとってつきあうことの出来る位置にたつた。

名づける—被災地ではいつのまにか、ボランティアの活動記録や「震災・復興に関する資料・記録」類は「震災資料」、中でもピラやチラシ、ボランティア名簿、や避難所日誌などのような原資料は、「震災一次資料」と名づけられていた。まちのアーカイブは、「震災資料」という「アーカイブ」を所蔵する「アーカイブ(文書館)」となり、保存するための整理をおこなうことになつた。

まちのアーカイブは、段ボール箱に入れられたノートや配布資料を綴じたバインダー類に「避難ボランティア資料」と名づけた。ボランティア自身は、「避難ボランティア」、「避難区ボランティア」と呼んでいた。ボランティア組織総体の名乗りよりもむしろ、組織内の各グループの動きに注目した名づけがおこなっていた。たとえば、バイクを使って被災地で活動する「バイク隊」、自分たちの足で歩いて活動する「歩き隊」、「走り隊」は、「走」の右上に〇をつけて「バシリ隊」などである。しかし、資料の整理作業をはじめるとき、グループ全体を外部から見た名前が必要となつたのである。

出会う—名づけたことによって、次の作業がはじまつた。段ボール箱3箱の「避難ボランティア資料」は、震災・まちのアーカイブの女性部隊が中心に整理され、詳細目録の作成もおこなわれた。資料の整理を進めるうち、元メンバーの話を聞こうという話ができた。資料の中の「避難ボランティア」の声を聞くうち、確かめたり、もっと知りたいことができたのである。

避難ボランティアの元メンバー達と交流がはじまつた。ボランティア当時のことだけでなく、現在の生活とのつながりにも話が広がった。資料の中の声と経験を思いだす声が交差する。早い時期に活動から離れようとしていたリーダー。綴じられたファイルは、引継ぎを意識していたものだった。地図がたくさん含まれている意味やメモの意味も理解できた。その内容は、この『VERSION 2』24号の随所に反映されている。

この出会いは、まちのアーカイブのメンバー、「ボランティア」について考える機会にもなつた。当時自分は、ボランティアとどう向き合つたか。「避難ボランティア資料」に含まれたボランティアの声とむきあい、自然にできた議論だった。それは、またボランティアの声の聞こえる「アーカイブ(資料)」とは何かという議論にもつながっていった。

2007年、小川千代子は、アーカイブには「保存する」の動詞が含まれていることに気づき、驚いたという(前掲書)。まちのアーカイブでおこなわれていた活動は、すべて「保存する」に含まれる多義的意味の実践だつたのではないか。この関連性の実践的検証が、「アーカイブ」とは何かにつながってくるように思われる。

灘ボランティア資料目録

番号	表題	年月日	作成者	形態	数
1001	(歩き隊マニュアル)	—	(灘ボランティア)	ノート	1
1002	(メモ)	—	(灘ボランティア)	ノート	1
1003	(炊き出しノート)	(1995年2月7日～3月13日)	—	ノート	1
1004	(連絡メモ)	(1995年2月)	(灘ボランティア)	ノート	1
1005	(救援物資配給メモ)	(1995年1月～2月)	(灘ボランティア)	ノート	1
1006	(避難所関連メモ)	(1995年3月)	(灘ボランティア)	ノート	1
1007	宿泊所関係ファイル	(1995年2月～3月)	(灘ボランティア)	紙ばさみ	1
1008	宿泊マニュアル	(1995年2月～3月)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1009	(ボランティア覚書)	(1995年1月～2月)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1010	4月以降ボランティア活動アンケート	(1995年3月)	(灘ボランティア)	B5、ファイル	1
1011	ボランティア用ひきつぎetcノート	(1995年1月～2月)	(灘ボランティア)	B5、ファイル	1
1012	バイク部隊	(1995年3月)	(灘ボランティア)	B5、ファイル	1
1013	東京農工大学阪神協力隊活動報告書	1995年4月15日	東京農工大学阪神協力隊	A4、冊子	1
1014	総括文書ファイル Yuki's	(1995年1月～3月)	(情報総括 中村由紀子)	A4、クリアファイル	1
1015	済・依頼項目	(1995年2月～6月)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1016	摩耶埠頭倉庫物資管理ノート	(1995年2月8日)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1017	(保健・住宅・就職・物価・ボランティア・雇い・外国人・総合・ライフラインなど情報の収集ノート)	(1995年2月～3月)	(灘ボランティア)	B5、ノート	1
1018	灘ボランティア新聞(歩き隊)	(1995年2月7日～3月21日)	(灘ボランティア)	B5、ファイル	1
1019	(感想 仮設について)	—	斎藤香緒里	B5、ノート	1
1020	(地図 灘周辺)	—	(灘ボランティア)	A3、一紙	2
1021	(応急仮設住宅入居高齢・障害者の住居実態調査書)	(1995年4月1日～4月23日)	—	A4、透明はさみこみ	1
1022	(ボランティアの仕事)	—	伊藤富士男	A5、一紙	1
1023	(ボランティアの活動メモ)	—	—	A5、一紙	1
1024	震災に伴う高齢者対策についての陳情	1995年3月14日	中村達夫	A3、一紙	3
1025	灘ボランティア本部御中(手紙)	—	三隅	封筒便箋2枚、一紙	1
1026	フロン回収マニュアル	1995年2月	兵庫県フロン回収処理推進協議会	A4、一紙	1
1027	兵庫県災害対策総合本部情報ファイル	1995年2月	兵庫県立女性センター	A4、一紙	1
1028	(ボランティア報告)	1995年4月9日	前田	FAX用紙45x21.5cm、一紙	1
1029	(ボランティア訪問用紙)	—	(灘ボランティア)	A4、一紙	2
1030	(灘ボランティア関連資料)	—	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1031	避難所関係依頼項目	(1995年2月～3月)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1032	(ボランティア予定表等)	(1995年4月～5月)	(灘ボランティア)	A4、B5、メモ、一紙	5
1033	灘区地図(コピー)	—	—	B5、ホッチキス止め	4
1034	(灘区地図 テント避難者一覧)	—	(灘ボランティア)	A2、A3、A4、一紙	11
1035	(名刺入れ バイク隊)	—	(灘ボランティア)	9x11.5cm名刺入中名刺8枚	1
1036	ファックスネット生活情報	1995年1月20日～4月11日	(県立神戸生活科学センターから発信)	B4、一紙	1
1037	テント村調査	(1995年3月18日ごろ)	—	ファイル	1
1038	～2/27まで済依頼項目	(1995年2月)	(灘ボランティア)	袋	1
1039	D. M名簿	—	—	A4、ノート	1

番号	表題	年月日	作成者	形態	数
1040	テント村状況調査	—	(灘災害ボランティア団体)	ボックスフォルダー	1
1041	旧掲示板資料	(1995年2月24日ごろ)	(灘ボランティア)	袋	1
1042	ボランティア新聞掲示場所一覧＋登録避難所リスト	(1995年3月30日ごろ)	(灘ボランティア)	ファイル	1
1043	バイク部隊ノート	(1995年2月～3月)	(灘ボランティア)	B5、ノート	1
1044	(灘区ボランティア新聞バックナンバー)	1995年2月	(灘区災害ボランティア)	A4、ファイル	1
1045	調査データ原本入れ	—	(灘ボランティア)	A4ボックスホルダー	1
1046	(アンケート未回収 テント村)	—	(灘ボランティア)	クリップ止め	1
1047	(ボランティア新聞掲示依頼用紙)	—	(灘ボランティア)	クリップ止め	1
1048	灘ボランティア本部各部隊紹介	—	(灘ボランティア)	一紙	1
1049	(灘区地図 自治会掲示板場所)	—	(灘ボランティア)	ポッチキス止	1
1050	(炊き出しBANK関連資料)	(1995年3月)	—	B4、A4、一紙	41
1051	避難所状況一覧	1995年4月6日	—	A4、一紙	4
1052	(灘区様 炊き出しBANK参加要請)	1995年3月25日	(炊き出しBANK)	B4、FAX用紙、一紙	7
1053	(神戸市民生局 陳情、回答等)	—	(灘ボランティア)	A4、一紙	4
1054	灘ボランティア本部各部隊紹介	(1995年)	(灘ボランティア)	A3、一紙	6
1055	(避難所実態調査)	(1995年3月)	兵庫県民主医療機関連合会	A4、B4、一紙、B5封筒	1
1056	バイク部隊	(1995年2月)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1057	(配布チラシファイル)	(1995年3月)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1058	灘区詳細図(消火栓の位置表示か)	—	(灘ボランティア)	掛け図	1
1059	KOBE C情報	1995年5月	神戸市民文化振興財団	新聞、一紙	1
1060	ミュージカル・ピーターパン特別ご招待の御案内(チラシ)	1995年4月	関西テレビ ホリプロ	B5、一紙	2
1061	5月5日新神戸駅前お楽しみ抽選会(メモ)	1995年5月	—	B6、一紙	1
1062	(掲示板設置場所マップ、コピー)	—	(灘ボランティア)	A3、一紙	6
1063	(地図)灘区あんない'94(避難所書込あり)	(1994年、1995年)	灘区役所、(灘ボランティア)	一紙	1
1064	身分証明書	—	(灘ボランティア)	ファイル	1
1065	連絡依頼項目	—	灘区情報ボランティア	ファイル	1
1066	生活関連	—	(灘ボランティア)	ファイル	1
1067	本部用直接登録者日程表	(1995年2月27日～3月26日)	(灘ボランティア)	ファイル	1
1068	ボランティアへの依頼書<受付用>	(1995年2月4日～11日)	(灘ボランティア)	ファイル	1
1069	被災地の皆様へ	(1995年1月25日)	(我妻正男 キク)	手紙	1
1070	(手紙文)	—	(物資を送った人)	便せん	1
1071	受付ミーティング議事録	(1995年2月13日～21日)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1072	バイク部隊ノートVol. II	(1995年3月23日～4月15日)	(灘ボランティア バイク部隊)	B5、ノート	1
1073	(ボランティアへの依頼書)	(1995年2月27日～3月3日)	(灘ボランティア)	A4、一紙	21
1074	(可動員人数調査表)	(1995年2月15日～5月6日)	(灘ボランティア)	A4、ファイル	1
1075	(ボランティア派遣依頼票)	(1995年5月2日～31日)	—	A4、紐綴じ(約5cm厚)	1
1076	(大石南町一丁目／二丁目地図)	—	—	—	1
1077	(メモ 送付状 東京都高橋)	—	—	—	1
1078	COOP LINEの運輸局引越しボランティア紹介	—	COOP LINE引越ボランティア相談係	A4、一紙	1

番号	表題	年月日	作成者	形態	数
2001	(地図)	—	—	A3 A3×4貼合せ	3、1
2002	むすび交流の会 巡回こどもセンターまつり	1995年3月	FIWC神戸復興キャンプ VYS巡回子どもセンター	A4、一紙	4
2003	—	—	—	A4レポート用紙	1
2004	(メモ)	(1995年)	—	A5、一紙	2
2005	灘ボラを離れたLANDと担当団体	1995年2月9日～20日	—	B5、一紙	1
2006	本部送リスト	1995年1月30日	—	B4、一紙	1
2007	重要！棟炭・豆炭使用上の注意	(1995年)	—	A3、一紙	1
2008	情報収集マニュアル	1995年2月	情報センター	A4、一紙	7
2009	灘区役所災害対策本部避難所班 高内係長殿	(1995年)	—	A4、一紙	1
2010	避難所総覧	(1995年2月11日、16日)	—	A4、一紙	6
2011	(新聞記事)	(1995年)	—	B4、一紙	1
2012	(地図)	(1995年)	—	B4、A3、一紙	8
2013	(メモ)	(1995年)	—	10cm×15cm、一紙	1
2014	人出に関する情報の流れ	(1995年)	—	A5、一紙	1
2015	(メモ)	(1995年)	(灘ボランティア 浦)	A5、一紙	1
2016	オリザ活動報告	1995年2月9日	たのくら	B5、一紙	1
2017	ボランティア登録	(1995年)	—	A5、一紙	1
2018	(活動報告記入用紙)	(1995年)	—	A4、一紙	1
2019	震災復興まちづくりニュース第2号	1995年2月19日	神戸市住宅局 都市計画局	新聞、一紙	1
2020	救援物資過不足リスト	1995年2月22日	関学救援ボランティアセンター 山西	B4、一紙	1
2021	(メモ)	(1995年)	—	A4、一紙	2
2022	中川さんへ	(1995年)	灘ボランティア 本多・三宅	B5、一紙	1
2023	避難所状況総覧	1995年2月16日	—	A3、一紙	2
2024	灘・中央・長田・東灘区案内(地図)	—	—	B4 2枚貼合せ、4枚貼合せ、一紙	11
2025	名簿	(1995年2月2日)	—	B4大きめ茶封筒	1
2026	(地図)	—	—	A3、一紙	1
2027	お届する救援物資について	1995年3月19日	関学救援ボラ委員会 救援物資センター	A4大きめ FAX用紙、一紙	2
2028	歩き隊活動報告書 2/20～	(1995年2月20日～3月25日)	(灘ボランティア)	A4大きめ ファイル 青色	1
2029	物資移動表	1995年2月17日～3月17日	(灘災害ボランティア)	ファイル	1
2030	(診療 可 医院名)	1995年2月6日	灘区医師会	一紙	1
2031	(物資関係)	(1995年3月19日)	関学救援ボラ委員会 救援物資センター	一紙	1
2032	(各避難所あてお知らせ)	—	関学救援ボラ委員会 救援物資センター	一紙	1
2033	(個人調査表)	—	(灘ボランティア)	—	1
2034	(地図)灘区あんない'94(書込あり)	(1994年、1995年)	灘区役所、(灘ボランティア)	一紙	2
2035	(ボランティア活動メモ その他)	—	(灘ボランティア)	一紙	1
2036	(今日の報告・地図)	(1995年)	(灘ボランティア)	A5小さめ・小・A4、一紙	27

活動日誌

2007 年

- 6 月 17 日 (日) 「瓦版なまず」第 22 号の印刷、発送作業。於：事務所
 6 月 27 日 (水) ミニコミ整理 於：事務所
 7 月 15 日 (日) DVD 作品「ひとがためらうとき」試写会 於：兵庫勤労会館
 7 月 25 日 (水) 資料整理 於：事務所
 8 月 12 日 (日) アーカイブ設立 10 周年にむけての話し合い 於：事務所
 9 月 29 日 (日) アーカイブ設立 10 周年にむけての話し合い 於：事務所
 10 月 13 日 (土) アーカイブ設立 10 周年にむけての話し合い 於：事務所
 10 月 28 日 (日) アーカイブ設立 10 周年にむけての話し合い 於：事務所
 11 月 30 日 (金) 「灘ボラ」資料についての話し合い 於：三宮勤労会館
 12 月 15 日 (土) 「灘ボラ」資料についての話し合い 於：三宮勤労会館

2008 年

- 1 月 2 日 (水) 「瓦版なまず」第 23 号の印刷、発送作業。於：事務所
 1 月 13 日 (日) 「瓦版なまず」合本、「瓦版なまず」第 24 号の打合せ 於：事務所
 1 月 30 日 (水) 「瓦版なまず」第 24 号についての話し合い 於：三宮勤労会館
 2 月 10 日 (日) 「瓦版なまず」合本、「瓦版なまず」第 24 号の打合せ 於：事務所
 2 月 16 日 (土) 「瓦版なまず」合本、「瓦版なまず」第 24 号の打合せ 於：事務所

お知らせ

震災・まちのアーカイブが誕生して、10 年を迎えます。この区切りに、これまでとは
 こうしてきた瓦版なまずの合本を発行します。10 年にわたる活動の一端をご覧ください。

震災・まちのアーカイブ 10 年の軌跡

『サザエさんたちの呼びかけー阪神・淡路大震災・瓦版なまず集成 1998～2008』

発刊の辞 季村敏夫・栗原彬・大門正克

装丁 林哲夫

製作 みずのわ出版

小冊子「聲」一執筆者 辻川敦・西栄一・水本有香・辰巳大輔

片岡法子・島田誠・吉村俊美

編集後記

難産の末、瓦版なまず24号が誕生しました。十月十日（とつきとおか）どころか、10年近
 くの年月を経て、女性陣たちが中心に文章を書き、世に問うことになりました。この号は、
 全体で「灘ボランティア資料」の記述目録の役割を果たしています。サザエさんたちと「震
 災一次資料」との格闘のあとをご覧ください。（佐々木和子）

あとがき

10年を区切りとし、「震災・まちのアーカイブ」の活動の結晶でもある「瓦版なまず」をまとめることにいたしました。

「瓦版なまず」は、若いメンバーの情熱によって生まれました。初期の編集者は寺田匡宏さん。グループ誕生の勢いを、そのまま紙面にぶつけています。高校時代、新聞部に所属していた経験を活かし、用紙にもデザインにも、文字にもこだわり、表紙を飾る「なまず」の文字も彼が考えたものです。

後を引き継いだのは菅祥明さん。女性たちのなかで孤軍奮闘。引き継ぎ、独自性を出すのに苦労されたこととおもいます。彼の引継ぎが、現在を生かしています。

地震から10年が過ぎた頃から、目線を少し広げよう、変化をつけようということになり、神戸の歴史や文化、土地の記憶などを取りあげることになりました。

今年初めての手仕事である24号は、女性を中心に、震災一次資料に関する特集号としました。これまでの資料収集活動で、分かったこと、感じたことを、自分たちの目線で表そうとする試みです。数年費やし整理してきた「灘ボランティア資料」を巡るもので、長年の課題でもありました。何度も話しあい、意見を交換しては書き直すという共同作業をぎりぎりまで続け、何とか合本の最後に連なることができました。

災害に遭遇しなければ、アーカイブも「なまず」も存在せず、このように考えを文章にするということの苦しさも、出来上がった時の喜びも知らない人生であったとおもい、出会いの不思議と驚きをかみしめます。ここまで続けることができたのは、読者のかたがたの励ましとご支援があったからこそと、深く感謝いたします。

手仕事といえば、版下貼り付けなどの編集作業を手弁当でくださった柳原一徳さん、装幀の林哲夫さん、ありがとうございます。サザエの「なまず」、どのように手にとっていただけるか、期待と不安にゆれています。

平成20年2月29日

季村範江

サザエさんたちの呼びかけ

阪神大震災・瓦版なまず集成 1998-2008

2008年3月31日 発行

発行者——季村範江

発行所——震災・まちのアーカイブ

〒653-0022

神戸市長田区東尻池町1丁目11番4号

TEL 078-681-6231

FAX 078-681-6232

装 幀——林 哲夫

製 作——みずのわ出版

印刷・製本——(株)国際印刷出版研究所

この事業は、「(財) ひょうご震災記念21世紀研究機構」と
「ひょうご安全の日推進県民会議」の助成を受けて実施しています。



防災力強化県民運動
ひょうご防災アクション2007～2009